

第二次世界大戦体験記

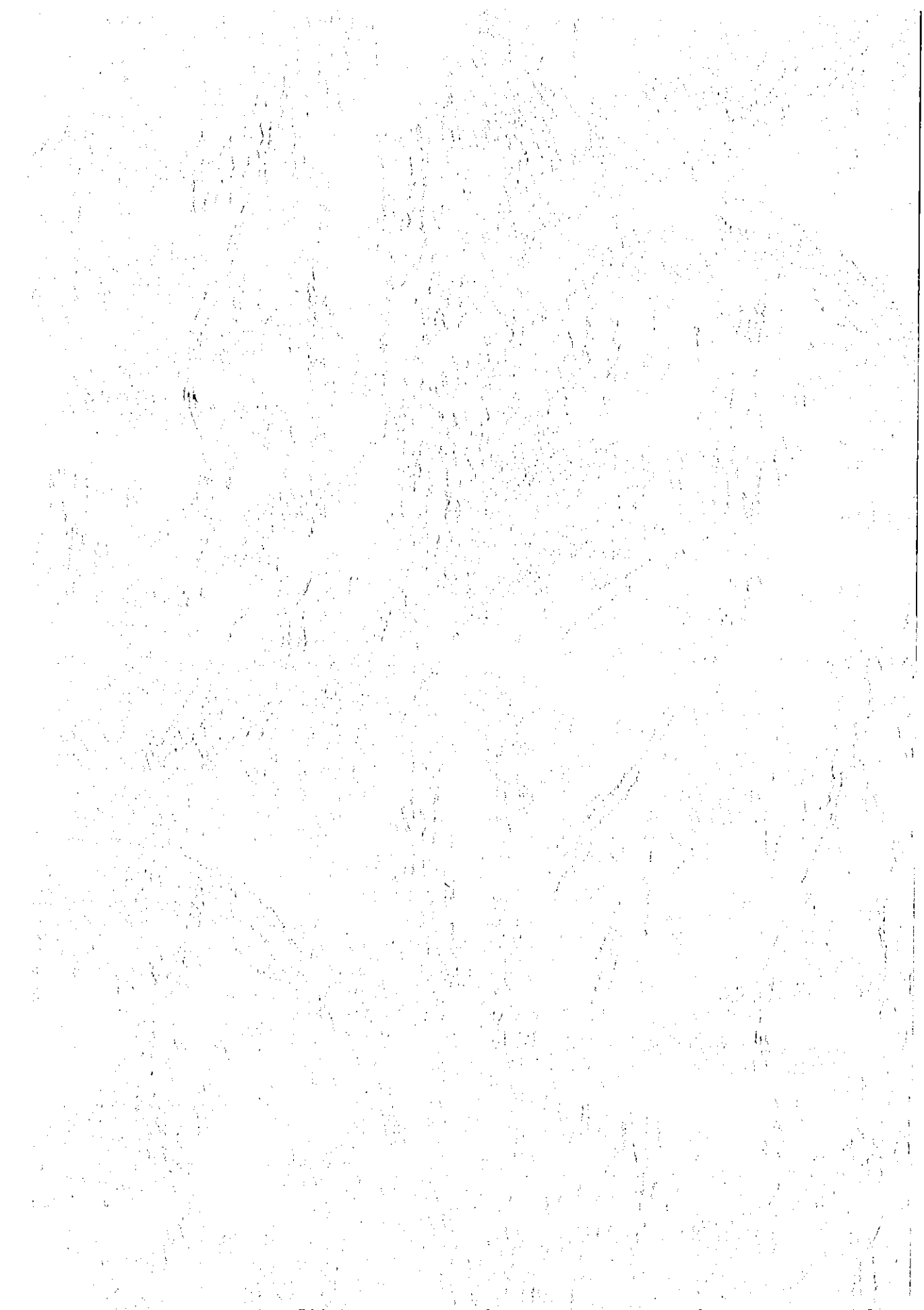
第二集

轍

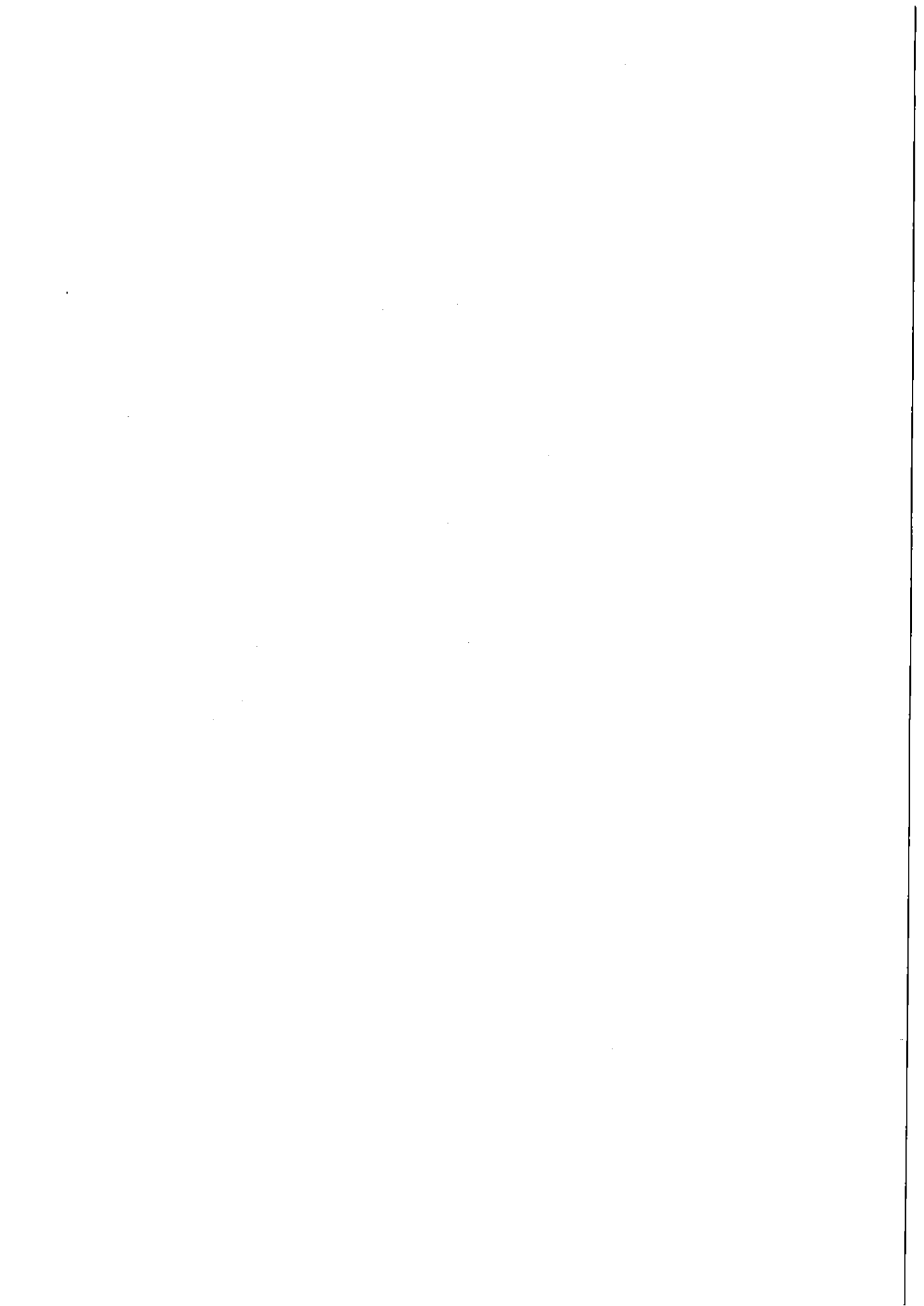
あだち



加西市教育委員会



永遠の平和を求めて



はじめに

今年、第二次世界大戦が終わって五十年という節目の年にあたります。

しかし、半世紀を経た今なお、世界の各地で紛争が絶えることはありません。戦争とは、軍人だけの戦いではなく、一般市民をも巻き添えにした人間の殺りく行為です。

我が国においても、戦争体験の風化が憂慮されておりますが、この度、多くの方のお力添えで、戦争の記録を「轍」第二集として発行することができました。この冊子は、すさまじい空襲や悲惨な戦場の様子、また、意気軒昂と戦地に赴く兵士たち、そして無念の涙にむせぶ戦友の死など当時の模様が生々しく再現され、戦時中の貴重な資料となっております。ご寄稿下さいました方々に深く感謝申し上げます。

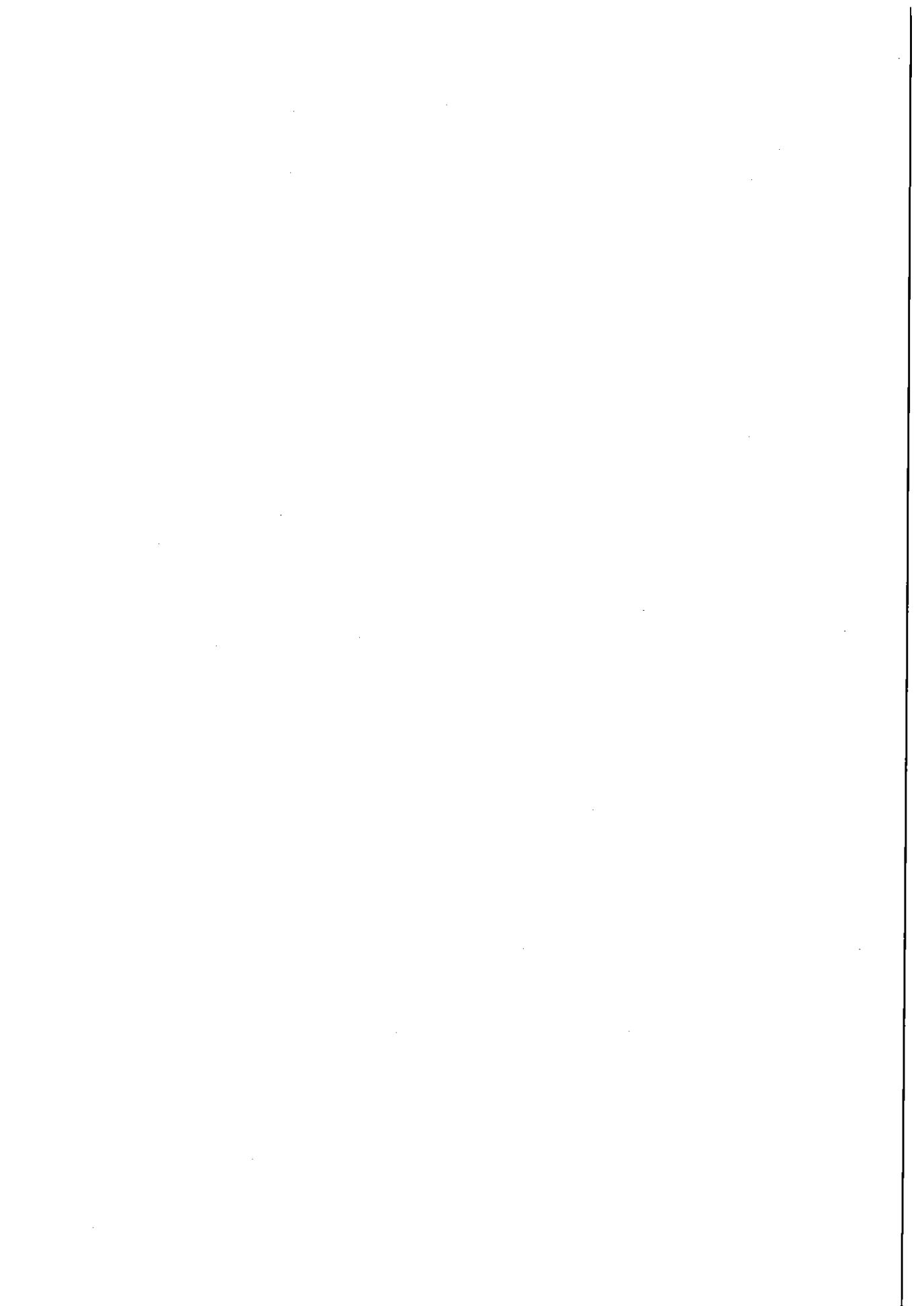
「轍」第一集は、平成四年度に発刊しましたが、学校教育ではこれを教材とした授業が数多く展開されました。そして、戦争の恐ろしさを改めて知り、人命の尊厳に目覚めた子どもたちから人権尊重、平和を誓う幾多の声が届きました。また、戦争体験者からは「私の体験も、是非後世に残してほしい」との強い要望がありました。

この平和な世に感謝し、むごい戦争を後世に語り継ぐことは我々現世に生きる者の使命であります。この冊子が多くの方々に読み継がれ、おろかな戦争を繰り返すことのないことを祈念いたします。なお、本の題名は、「前車の轍を踏まず」との思いを込めて、「轍」と命名いたしました。

私たちは、先の戦争では幾多の尊い人命を失いました。ここに五十回忌の御霊に深甚なる哀悼の誠を捧げます。

平成七年三月二十四日

加西市教育長 菅 野 和 彦



目次

はじめに

一、私のルソン記……………	吸谷町	藤井照二	一
二、あゝ紅の血は燃える(一)―私の日記から―……………	北条町古坂二	高井康之	六
三、我が青春日記(一)―中国から南方方面へ―……………	北条町古坂一	安富清	一八
四、銃後の守りと戦後……………	西横田町	古角恵美子	二五
五、ビルマ戦線の回想(一)―ペグー山系の悲劇―……………	佐谷町	森脇巖	二八
六、ビルマ戦線の回想(二)―シッタソ河突破―……………	佐谷町	森脇巖	三三
七、私の学生時代―学徒動員時の一断面―……………	河内町	松尾みさこ	三八
八、我が青春日記(二)―南方での防戦と敗戦―……………	北条町古坂一	安富清	四〇
九、国鉄北条線列車脱線転覆事故記……………	網引町	太田加七	五三
十、白いマフラー―鶉野飛行場周辺―……………	中野町	下村静子	五六
十一、第二次世界大戦体験記―中国から南方へ―……………	国正町	民輪進治	六一
十二、比島沖海戦……………	西野々町	北田一夫	六八
十三、終戦前後の思い出……………	南網引町	寛精一	七四
十四、いくさ(軍隊)の軌跡……………	桑原田町	菅野重雄	七八

ページ

十五、私の青春時代	東笠原町	三宅 庸男	八六
十六、あ、紅の血は燃える (二) — 国鉄貨物操作場での勤務 — 北条町古坂二	高井康之		九七
十七、座談会 — 義務教育の実情を語る —			一二二
西在田小学校行事概要 — 昭和十九年度 — 二十一年の様子 —			一三五
座談会出席者			一三六
座談会参考資料 (写真)			一三七

付 録 (資 料)

- 一、空襲時に於ける家庭の心得
 (昭和二十年度北条町会議事録綴りの裏面よりコピー)
- 二、軍票 証券
 - ・ 外套 (軍隊) 昭和十九年作
 - ・ 戦中号外を配るときの呼び鈴 (朝日新聞)
- 三、近衛兵
- 四、北条中学校竣工式

一、私のルン記

吸谷町 藤井照二

昭和十九年四月一日、敗戦の色濃い頃、現役志願で静岡県磐田郡磐田町の中部百二九部隊第一航空情報連隊に入隊し、三中隊六班に配属され通信手の教育を受ける。

七月一日、教育半ばで急きよ転属^③となり一個中隊が編成され、フィリピンに派遣されることになる。私たち通信手四十名余りと、それ以外は他の部隊から転属したものや、召集兵^④で第十航空情報連隊設立の先発隊となる。

七月十日、門司港で吉野丸（八、八〇〇トン）に乗船し出航する。船団は、吉野丸と扶桑丸（八、九〇〇トン）と護衛の海防艦の三隻である。

七月二十四日、途中台湾の南端、高雄に停泊する。この間、少数ではあるが、私を含めて上陸が許され手足を伸ばす。

七月二十九日、早朝^⑤バシー海峡を航行中、突然敵潜水艦の魚雷攻撃を受け、足下に魚雷が命中する。私も船中でふっ飛ぶ。たちまち輸送船の二隻は沈没する。幸い私は沈む船より逃れ、漂流しているところを海防艦に救助され、リングエンに上陸し、マニラに護送される。途中、車窓から眺める景色は椰子の木がなかったら内地と見間違える。

八月七日、七夕の日ようやく目的のマニラに到着する。一時民家にあずけられる。現地は戦戦恐恐の

① 二十歳になり、自分から希望して入隊すること
② 音信を次々と取り次いで先方に知らせる兵士
③ 配属が替わること
④ 自分の意思に関係なく国が強制的に呼び出して兵役につかせること

⑤ 台湾とフィリピン群島の間の海峡

様相に緊張する。

八月末にはマニラ城内の兵站^⑥に移される。ここで仲間と再会するが残念ながら生存者は野村君一人しか見かけない。急に寂しくなる。後続隊と合流し、中隊は再編成され各情報小隊は各要所に配属される。中隊長は、小宮中尉^⑦であり私たちの小隊長は平形少尉^⑧、班長は土門軍曹^⑨である。この情報小隊は私たち通信手八名が配属される。しかし、最終には八名中七名が戦死し、私一人が残る。この準備期間中に延べ五百の敵、艦載機に二度攻撃され、航空部隊の主力であるニコラスの海軍航空隊も、クラークの陸軍航空隊も壊滅する。私たちの派遣は一足も二足も遅かった。

九月末、私の任地はルソン島^⑩の南端、ピリ村^⑪に配属され直ちに敵機の監視に当たる。が、連日十機余りの艦載機に繰り返し攻撃され、夜間にはゲリラの襲撃も受ける。私たち初年兵も最初から激しい戦場に立つ。

二十年二月頃、私は長時間の漂流が原因で体調を崩しながら耐えていたが、ついに倒れ苦痛に耐えていたところ、偶然飛行大隊の田島中隊長の目に止まり大隊に引きとられる。

二十年三月頃、一カ月余り大隊のお世話になる。しかし、当時は薬など全く無かったが手厚い看護と親切な現地の方々の差し入れもあり、お陰で一命を取り止める。健康も少し回復に向かうころレガスピ^⑫に米軍が上陸して来る。

我が情報隊は、地区司令部（小野田中佐）の指揮下で敵を迎え討つが、我が軍は少数であり装備は貧

⑥ 戦場の後方にあつて、食糧、馬、軍需品の供給補充輸送などに当たるところ

⑦⑧⑨ 陸軍の階級
(下から上級へ)

二等兵・一等兵・兵長・

伍長・軍曹^⑨・曹長・准尉

少尉^⑧・中尉^⑦・大尉・少佐

中佐・大佐・少将・中将

大将

⑩ フィリピン群島最大の島でフィリピンの中心

⑪ ルソン島の半島の一村の名

⑫ ルソン島の半島部分の最東端の村落名

弱である。そのため尋常では戦えずイサクロの山中に潜み、ゲリラ戦で半年余り抵抗を続ける。が、弾も食料も一粒の塩もなく苦戦し、多くの犠牲を出す。

司令部（指揮官）の方も焦りか、大声で怒鳴りつけたり、私たち部下に金鶏の手形を与えたり苦惱の程が伺える。私たちの方も多頭の獵犬に追われ逃げ逆らっている獣のようで、衣服は破れ頼れる友も失い言語を絶する苦難に精魂つき果てる。ただ一思いに往生できることを願っていた。

二十年十月頃、日本の敗戦を知り降伏する。厳しい戦いは終わったが敗戦のショックで気が沈む。いったんレガスビー^⑮に連行されマニラのカランバ仮収容所に護送される。途中では現地人の罵倒を浴び、石を投げられ惨めな姿となる。

カランバの仮収容所で労働にふすため数日待機する。この間には、偶然懐かしい加西の方と出逢う。石井・大西・仲田・久保田。私の方は視力に障害を負っていたが、当時は手当ての方法もなく、今更悔やんでも無駄で愚痴になると思っていたが、彼等に健康を尋ねられ話す。

これが、後に国家補償の件で救われるものになり幸運であった。

数日後、労働にふすためこの仮収容所を出る。この時、我が情報隊の生き残りの九人とは別れる。私と班長の二人は「行けば二度と帰ってくることは出来ない」と噂されていたコレヒドール収容所に移った。廃墟と化した要塞の後始末についたが、私は特に体力が衰えていたので、またすぐマニラに戻る。

今度は、マニラ郊外の弾薬庫にある収容所に移り、先ず庫内の草刈りから始める。確かに作業は軽い

⑬ 少人数で出沒し、奇襲して敵の戦線をかき乱す

⑭ 神武天皇東征の時、天皇の弓に止まったという金色のトビ
金鶏勲章——手柄のあった軍人に与えられた勲章

⑮ ルソン島の南にある街

⑯ マニラから少し離れた島

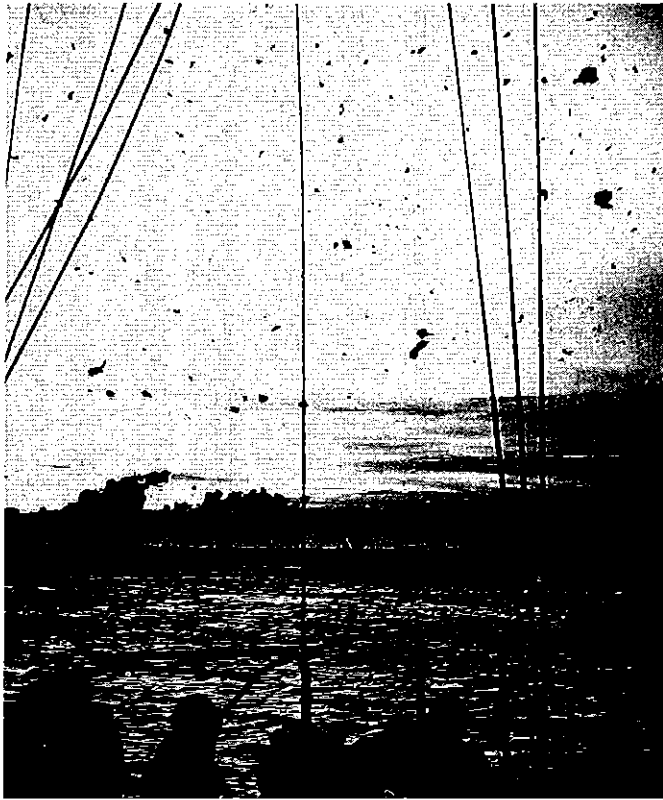
方だが給食の方は途端に粗末なものになる。幸い私は、しばらく米軍炊事の手伝いに付したので体力の回復には救われる。この収容所で半年余り過ごした後、マニラ市内に移る。

今度は、マニラの海岸通りにある収容所に移り、半年近く補給部隊の作業を続ける。暑い炎天下、対日感情の悪い奴等の多い中で一年余り過ごした後、帰国の途に着く。

昭和二十一年十二月二十一日「故郷を

離れて再び踏むことは出来ない」と覚悟していた懐かしい祖国「名古屋」に復員する。

十八・十九・二十歳と僅かな期間ではあったが、貴重な体験と尊い教訓を学び地獄の里から奇跡の生還を得る。



敵艦の攻撃を受ける日本軍輸送船

“ 決定版 昭和史 ” 毎日新聞社刊より転載

バシー海峡

ルソン

アンガユン

マニラ

ミホ

パナイ

サマル

レイテ

イサロク

チカ
軍用道路

ピリ

地区司令部
情報隊
飛行場大隊

マヨン

ラガスピー

二、あ、紅の血は燃える(二)

— 私の日記から —

北条町古坂二丁目 高井康之

◇ 二十年、三月十二日 月曜日

いよいよ、今日より待ちに待った動員^①。

俺たち、普通科生は吹田操車場に配属される。午前八時三十分、吹田駅に集合し、先ず教習所なる所に連れて行かれた。本屋と呼ばれている事務所の二階が教室のようになっていて、そこが教習所だ。最初に鉄道指導員二名を紹介される。若いインテリ風の人が田井指導員殿。五十才位の西郷隆盛に似た逞しい人が有村指導員殿である。その田井指導員が今後の俺達の予定を説明してくれた。それによると、この教習所で約二週間の講習(学科)を受け、その後、また一週間程の技術講習が有り、それ等を終えて四月始め頃より現場に配属される。

職務は連結手^③。この仕事は鉄道の数ある作業の中で一番危険な作業だそうだ。もとより危険は覚悟の上、命を落としてこそ、国に報いる意義があるというものだ。午後、作業服、地下足袋、それに通勤定期券が支給された。此の通勤定期券は鉄道従業員のものと同く同一のもので日本國中、鉄道だけでなくどの私鉄でも無料で乗れるという有り難い定期券だ。まるでおとぎ話の宝物のような物でこれを初めて手にした時、嬉しくて、嬉しくて耐えられなかった。

① 戦争目的遂行のため、生徒を工場で働くよう指示すること(旧制中学二年生、現在の中学二年生)

② 現在のJR吹田駅構内車両の入れかえや運転編成するところ

③ 列車で車両を互いに連結する人

帰路、久保君が此の定期券を使って「休みの日に何処か遠い所に行ってみないか。」と誘う。勿論望む所だ。伊東君は早速、これで来週早々、三重県の親類先へ行くそうだし、玉田君は赤穂の城を見に行くそうだ。動員されて初日にこの恩恵。しかし、明日からは昼食も配給され、級友の話だと果汁や、お菓子の配給も度々あるとの事。「果たして動員された俺たちがこんなに優遇されて良いのだろうか？」と嬉しさの中にも疑問を感じる。

帰って新聞を読むと十日の夜、東京が本格的な夜間空襲を受けたとの事。俺の生涯で記念すべき動員第一日目に東京空襲の報道。何か身体が引き締まる様な気がする。これで俺も祖国興亡の決戦に身を持って挺する事が出来た。日本男児の本懐、これにまさる物有りやだ。万才、万才。

◇ 三月十三日 火曜日

動員二日目 坂阜操車に就いての教習。そして貨車の種類、及びその記号も習う。「絶対、秘密だ。」と、念を押されて田井指導員から吹田操車場で一日に取り扱う貨車の台数を聞いて驚いた。一日に平均四千輛。多い日には五千輛からが出入りするらしい。一時間平均にすると百二十輛。一分間に二輛の貨車がこの操車場から出たり、入ったりする勘定だ。そして「これ等の貨車を円滑に出入りさせるも、させないのも今後俺たちの努力による。」と聞いて、今更ながら自分の責任の重大さを知る。(絶対に事故を起こさないぞ)と改めて決意を固くした。昼食は昆布の刻み込んだご飯と白菜に油揚げの煮込みの副食。案外おいしい。

④ 小山に路線を敷き貨車を一台毎に小山より落として独力で方向別の路線へ走らせる装置

◇ 三月十五日 木曜日

昨晚、防空壕の中で空襲警報のサイレンを聞きながら寝てしまった。そして、朝、省線電車^⑤で塚本まで来て驚いた。大阪の空が真っ赤に燃えている。不覚にも昨晚の空襲がこんなにも本格的だったとはその瞬間まで知らなかった。「此の調子では大阪市も半分位は完全にやられたのではなかるうか。」と心配しながら、大阪駅に着き、下車した。ホームには家を焼かれた人の群れがあふれている。泥まみれの防空頭巾、煤にまみれ汚れた顔。どの人も申し合わせたように目を真っ赤に充血させていた。そして、精も根も尽き果てたのか、冷たいホームに座りこんで力なくうなだれていた。「畜生！」松尾君が叫ぶ。「此の仇はきつと打ってやる。」と一人言を言って「俺は今年こそ予科練に志願して此の仇を撃つぞ。お前も志願しろ。日本男児なら此のザマを見て黙っていられるはずはない。」と、今度は俺に向かって叫んだ。勿論、その気持ちはよくわかる。が、俺は松尾君と違って年齢的に予科練志願は出来ない。が、国に報いる気持ちは決して彼に引けは取らないつもりだ。

教習所に行くと、皆、昨夜の空襲の話をしている。竹谷、竹原、三宝、高野、上地、浜地の六人が欠席。恐らく彼らは罹災したのだろう。松尾君曰く。「東京は十日、名古屋は十二日、大阪は十四日、この分で行くと神戸は十六日頃にやられるな。」もとより覚悟は出来ている。恐れはしない。

◇ 三月十八日 土曜日

昨晚、とうとう神戸も大空襲をうけた。丁度、母は北条に行つて留守。父と二人だけで寝ていると夜

⑤ 鉄道省の線の意
国鉄線・国電の旧称

⑥ 予科練習生の略
十五才になると志願でき
海軍航空兵の本科に入る
までの予備の課程

⑦ 半に空襲警報発令。

初め敵機編隊のB29がかなりの高度で西の方面から来襲。探照灯に照らされたB29に向かって山から海から我が高射砲が火を吹く。赤い火の玉がツツと敵機に向かって飛ぶ。勇敢にも敵機に立ち向かう我が軍の戦闘機の機銃も赤い糸を引く。生まれて始めて此の目で見る空中戦。

そして、空襲。B29から一つの赤い花火の様な物が落とされた。それが、落ちながら、五個、六個と別れる。それぞれに別れた火の玉が途中で無数の火の玉となる。そうした火の玉が雪のようにゆっくりゆっくり地上に向かって落下する。それが話に聞いていた焼夷弾だ。焼夷弾が落下したと思われる上からやがてパツと火の手が上がる。そんな状態が次から次へと繰り返された。三の宮方面の空が真っ赤になる。落とされる焼夷弾も段々と近くなり、「今度こそ駄目か。」と思われることが度々。だが、幸いにも風向きが良かったのか、落下するにしたがって南へ南へと火の玉が流され助かった。

しかし、空襲が始まって四十分程たつと、俺たちが住む若菜通から一丁程南の阪急電車の高架線付近にも落とされ始めた。「轟っ」すごい火勢の音が聞こえ始める。泣き叫ぶ女の声まで聞こえる。もうその頃になると火の手で付近は真昼のような明るさ。残念だが味方の高射砲も沈黙している。戦闘機の姿も見えない。だから、B29は悠々と超低空を飛び続けている。何時間か経ち、空襲も一段落をつき隣保の人達も落ち着き、色々と今の空襲の様子を語り合い始めた。

前川さんが見ていた時には「B29が大倉山の方向に撃墜された。」と言い、砂川さんの話では、「

⑦ 敵機が近づくと、この警報がでる

⑧ 高熱を出して燃える薬剤を入れた爆弾

⑨ 現在の神戸市中央区旧葺合区

味方の戦闘機も三機程、火玉となって墜された」というが、俺はあいにくどちらも見えていなかった。

「三の宮の方は全滅だな。」「いや、あの火の手では加納町付近が相当やられているだろう。」隣保の人の会話にも自分等の家は助かったという安心感で充たされていた。

時たま、忘れたようにB29が超低空で一機、二機と飛んで来るがもう誰も壕には入らない。おそろくあのB29は燃え盛る神戸の街を写真で撮りまくっているのだろう。そして、明後日位の敵国の新聞にデカデカと「神戸空襲の模様を写真入りで誇らしげに報道するだろう」と思うといっても立ってもおられない気持ちだ。

不思議に今日の空襲は、阪急と省線の高架線を境として山側には一発の焼夷弾も落ちず、浜側ばかりで落ちた。そして、生田川から西は全滅で東は無事。おかげで俺たちは助かったのだが、それが偶然そうだったのなら良いのだが、もし、戦術的に見てそう計画的にやったとしたら、敵ながら天晴れな爆撃照準の腕前だ。夜明け寸前。警報が解除になり父は市役所（父の勤務先）が心配だと出かけた。俺は一人で日暮れ通りの罹災地を見に行った。見渡す限り火の海。もうすっかり家や工場は燃え落ちて平面になった大地が燃え続けている。

風呂敷包みを持った人や、バケツ一つ持った人達が夢遊病者のようにウロウロしている。子供が泣き叫んでいる。親も、泣いている。生田川の川辺は、着のみ着のままの姿で避難している人達でうずまっていた。警防団か隣保長の人がある間を忙しく駆け走り、人員点呼をしている。吾妻通まで来た時、兵

⑩ 現在の三宮駅の山側一帯

⑪ 新神戸駅より南に流れている川

⑫ 現在の消防団に近い役割をした地域の自治組織

隊さんが五十人程燃えているマッチ工場の煉瓦堀を壊し始めているに出合った。「さあ、皆さん、頑張って兵隊さんに協力してください。」一人の警防団の人がメガホンで叫んだ。俺も手伝う。警防団の人からシャベルを手渡して貰い崩れた煉瓦を拾い、燃えている火の中へ投げ込む。恐ろしい程熱い。むっとする熱気が全身を襲う。顔がピリピリする。睫毛がこげそうだ。防空頭巾を深くかぶり直して一生懸命働いた。気がつくとき、始め多くいた人達も一人去り二人去りして俺と兵隊さんだけしか残っていない。先程、メガホンで叫んでいた警防団の姿も見えない。腹が立った。自分の事も大事かも知らないが戦争は兵隊さんだけでやっているのではない。日本人全部で戦っているのだ。焼けた物は仕方がない。今更、慌ててわめいても焼けた家が出て来る道理はない。それよりも一寸でも兵隊さんの仕事に協力する事が本島の一億総力戦なのだ。

そうこうするなかに夜が明け始めた。それでもまだ大地は燃え続けている。兵隊さんからにぎり飯を貰い、一休みして、付近を見渡せば遠く済生病院が見える。吾妻⑬小学校も見えると云う事は此処からそのあいだに有った日暮通六丁目の生田筋の煙草屋が一軒だけポツンと焼け残っていた。

「タバコ」と読める赤い看板が不思議に印象的だった。兵隊さんの話ではわが戦闘機が体当たりでB29を撃墜したのが良く見えたそうだ。

すっかり夜が明けて家に帰る。鏡で顔を見ると真っ黒な顔の中で目玉だけがギョロギョロしていて、眉毛が所々焦っていた。午後二時頃まで家にいて、遅い昼食を一人で済ませ、⑮国香通の松尾君の家に

⑬ 現在の中央区

旧葺合区

⑮ 現在の中央区。旧葺合区

く。玉田君も来ていた。幸い、両君の家も高架線より山側にあつたので無事、ただ、心配なのは南本町の津坂君と脇浜町^⑮の谷下君の事だ。恐らく彼等の家は罹災したであろう。が、俺達も昨晩からの疲労で彼等を見舞いに行く気力もなくすぐ帰宅した。

帰宅して一休みする暇もなく松尾、玉田君が飛んで来て、今津坂君が担架で松尾君の家の前の私立病院に担ぎこまれたと知らせてくれた。とりもなおさず、三人で私立病院^⑰へ走って行く。病院内は空襲で負傷した人で満員。プンと鼻をつく血の匂い。廊下まで負傷した人が寝かされていて足の踏み場もない。右往左往している医者や看護婦に聞き、やっと津坂君の部屋に行く。彼の左足先は頭程の大きさを包帯されていて包帯に血が滲んでいた。彼の話では、家が焼け落ち、布団を覆って春日野道^⑱まで逃げて来た時、一発の焼夷弾が右足の親指の上を直撃。親指は根元から吹っ飛んでしまったのだ。それにしても彼は元気だった。「ただ、これから下駄をはかれないのが残念だ。」と笑っている。もっといってやりたかったが次から次へと負傷者が運びこまれ邪魔になっては迷惑だと思ひ退室した。

病院の屋上に登ると未だ北本町、南本町^⑲の方向には中天高く黒煙を上げ燃えているのが目に入った。此の日記は午後五時二十分に書き終わる。水道は出るが電気は止まっている。ラジオも聞かれない。未だ罹災地は燃えている。父は恐らく今夜は帰らないだろう。

◇ 三月十九日 日曜日

電車は、阪急、阪神、省線全線全部不通。新聞も来ない。今日、生まれて始めて人間の死体を見た。

⑮ 現在灘区
神戸製鋼のある一帯

⑰ 私立国香病院

⑱ 現在中央区の繁華街

⑲ 現在の中央区
国道二号線の南

午前十時頃、松尾、玉田両君と俺の三人で罹災地視察。先ず、春日野道を南に下って脇坂へ出る。脇坂から国道筋を西に行き小野柄⑳小学校の前まで来た。学校前の防空壕の付近に大勢の人が集まっているので俺たちは「何ごとだろう」とそこに行くのと丁度壕の中から警防団の人が戸板に老婆の死体を乗せて運び出しているのが目についた。顔は見えなかったが、両手の指は五本共パツと開いて硬直し、戸板からはみ出ている。そして脚は右大腿が松の木を割ったように大きく二つに裂け、骨が不気味に白く光っていた。着ている着物やモンペも血にまみれて赤黒く染まっていた。見ていて身体が震えて止まらない。聞く所によると、この壕の中で十人からの人が死んだらしい。この老婆も「昨日まで元気に暮らしていたのに」と思うと人間の生命のはかなさを痛く感じさせられた。

阪急の三の宮から高架線づたいに焼跡を見下ろしながら春日野道駅まで歩く。まだ所々ブスブスと白い煙が上がっている。「良くあんなに燃える物があるのだな。」と玉田君が感心していた。

春日野道駅で高架線を降り、津坂君を見舞いに行く。出血は完全にとまったらしい。配給の牛乳を飲んでいた。父、今日も帰らず。

◇ 三月二十日

昼頃、母、北条より帰る。神戸が空襲だと聞いたが、交通が不通で二晩、心配で寝られなかったとの事。勿論、電報も駄目だったと言う。父は市役所で泊まったまま帰られず。父の使いの人が肉を持って来てくれ明日も帰れないとの伝言あり、馬の肉らしい。だが、とてもおいしかった。

⑳ 生田川の西

◇ 三月二十七日

松浦先生来られる。午後、昼食時間の際、十五日の大阪空襲の話聞く。それに依ると俺が見聞した神戸空襲と全く同じ。大阪でも多くの人達が死んだそう。俺が思うに空襲で死んだ人達もやはり国の為、戦争で死んだ事になる。なれば、その人達も靖国神社に祭って上げたらと。

教習が終わってやれやれと一休みしていると上り坂で四年生の山本なる人が怪我をしたと有村指導員が知らせて呉れた。坂阜から線別にかかるポイントのカーブで速度の出し過ぎで添乗台から投げ出されたいらしい。幸い怪我は大したことはなかったがその為無人で走った貨車は大破し、積み荷の石炭は全部ふっ飛んでしまったらしい。一人の一寸した不注意から大事な貨車や石炭を駄目にしてしまうという事はこの戦時下に必要な資材を失う事になる。くれぐれももうすぐ現場に配置をされるがこの様な事故のないよう心から細心の注意を払わねばならぬ。

◇ 四月一日

愈々、教習も後二日で終わり。五日より現場で配属される。果汁の配給あり。午後乾先生来所。

この頃、連日防空壕で寝ている。空襲警報にもすっかり慣れて時にはサイレンの音さえ知らずにぐっすり寝てしまい翌朝になり母に教えてもらって「へえ」と感心する事も度々。考えて見れば防空壕の中でグウグウ寝ているとき、爆弾の直撃を受けて死んだとしたら、何の苦もない一番安楽な死に方だと思う。こんな考えが果たして良いのか悪いのか知らないけれど、とにかく今までよりも度胸が出来てきた

・この日から中学三年生

ように思う。子守歌の代わりに「ブー」^{②①} 中部軍情報。潮岬南方海上を北に向かう敵編隊有り。」のラジ
オを聞いて寝るのも又良きものである。

◇ 四月二日

沖繩に鬼畜米軍上陸。朝礼のとき、有村指導員がその重大性について訓話。続いて乾先生も同じよう
なことを話された。正に本土決戦は始まったのだ。今こそ神州男児の心意気を見せるべき時だ。久保君
と松尾君が「早く俺たちも志願して第一戦に立たねば」と言っていたが本土決戦となれば志願してもし
なくてもどうせ皆戦い抜くのだ。その時こそ津坂君の仇は必ず討つ。津坂君だけではない。タラワ、マ
キシ、硫黄島その他の戦場で護国の魂と散った勇士の仇を討つ。

昼休み後、教習所で詩吟の稽古。俺の声、沖繩へ届けとばかり張り叫ぶ。

◇ 四月某日

最近、俺たち級友の間で遺書を書くのが流行している。津坂君の例もあり、明日をも知らぬこの頃で
は、自分が死んでも後世に自己の意思を残すべく名文句で一筆残したいと言う気持ちからだろう。それ
とも特攻隊をまねしたものか。発案者は仁井君。久保君も書いたそう。伊東君は「マスターベーショ
ンみたいなものだ」と嘲笑していた。ともあれ俺は別に改まって遺言なんて書かない。この日記がすな
わち俺の遺書だ。

既に今までにノート二冊に書いた日記は、北条への疎開荷物と一緒に送っている。そして今このノ

②① ラジオから軍隊の情報と
して、敵機の攻撃状況を報
じた

②② 特別攻撃隊の略語で飛行
機に搭乗し、爆弾がわりに
敵軍艦などに体当りして玉
砕する軍隊

トに書き続けている日記こそ、俺の最大で最高の遺書なのだ。文章文句は下手でも良い、俺の生活記録や経験、感想を書き綴っている日記が何月何日に途切れるか判らない。そして、日記が途切れたときこそ遺言になるのだ。

久保君は半紙に五枚、墨で書いて油紙に包み防空壕の中に埋めたそうだ。松尾君はやはり半紙に墨で書き封筒に入れ胸のポケットに何時も納めているそうだ。

ナベ君と仁井君はすでに疎開荷物として田舎に送っているとの事。

そして、不幸にも級友の誰かが死んだ場合、その遺書は皆に公表すると約束する。

◇ 四月某日

今日で教習を終わり愈々明日から坂早に配属される。

田井指導員、有村指導員に心から礼を述べる。

「頑張れよ」帰るとき田井指導員から肩をポンとたたかれ激励されたとき、別離が一寸感傷的で泣いた。短い期間であったが、田井指導員の人間味のある指導ぶりに後ろ髪を引かれる思いで教習所を去る。

あ、紅の血は燃える

(学徒動員の歌)

花もつぼみの若桜

五尺の命ひっさげて

国の大事に殉ずるは

吾等学徒の面目で

あ、紅の血は燃ゆる



高井康之氏“ 中学二年当時 ”

三、我が青春日記(二)

——中国から南方方面へ——

北条町古坂一丁目

安富

清

昭和十七年四月下旬、ウースン^①で独立工兵第五十七大隊が編成され、集まってきた人は全国からで、全くの混成隊であり、私も歩兵の機関銃隊からの転属である。工兵のうちでも戊で折疊舟にエンジンを取り付け、敵前上陸をする部隊だ。私は歩兵で、一期の検閲の時に転属を言い渡されたので、また一から工兵の教育だった。この隊では、前の歩兵のような「いじめ」は少なかった。

休養日に二回程、上海に外出する機会があった。或る休養日の夕方、正中上等兵から「世良田さんかと言付かって来た」と小遣い銭と餅菓子が届いた。異国での差し入れは思ってもみなかったことで、その心遣いに胸の熱くなるのを覚えた。この世良田さんと言う人は私の親戚で上海の租界地^②に住んでいる人だった。

ウースンの砲台、廟行鎮、^③大場鎮、上海の競馬場、敷島公園を中隊全員トラックで見学した。

昭和十七年六月、転地演習のため、満州へ汽車の長い旅をした。到着した所は、フラルギー^④で十日間の滞在である。兵舎は幕舎だ。八月から関東軍の大演習に参加した。桂木斯上流約十キロメートルで行われた。演習が終わり向こう岸に運んだ兵員を運び帰した。最終便の門橋を組んだ舟がみるみるうちに沈んでいった。他の中隊の舟で、歩兵を定員を越えて積んでいたようで、二十三名が死亡した。私達は

① 上海の南隣

② 外国の租界地

③ 上海事変。三勇士が鉄条網を破壊した所

④ 上海事変戦場跡

⑤ 満州とロシア国境に近い所

その搜索に従事した。演習終了後フラルギーにかえる。

この地方の十一月は気温零下三十度まで下がり、河川での演習は出来ないで南京へ転地演習に向かう。貨車一両に一個小隊が寿司詰めである。転地前に三年兵の正中上等兵組は満期除隊した。貨車に機材、糧まつを積み、作業中休憩になり、一中隊の将校某氏が「この戦争は自分の思った通り、ドイツ、イタリアの敗戦、日本の敗戦も遠くない。」と、敗戦論を語った。我々は当時敗戦等考えたこと等なく、むしろ腹さえ立った。その将校は、大阪の工業学校の先生だったらしい。

南京に着いたのは、十一月中旬だった。宿舍は、獅子山兵たん宿舍で、裏側は城壁が続いている。

早速揚子江で折疊舟による渡河演習が始まるが、私は風土病にかかり四十日間練兵休で演習を休んだが、その間古参兵に頼まれて、煙草を酒保で買った。買った煙草を支那人に売ると買った値の四、五倍になるので古参兵の小使いはほくほくだった。

全治後は本部の操舟機^⑥の修理班として勤務する。昭和十八年の元旦は、洗濯後物干監視、その後は手紙を書き、銃剣の手入れと忙しい一日だった。二日と三日は外出するが、左右と敬礼ばかりで気が許せなく、余り楽しくなかった。

三月一日付けで上等兵に進級する。三月下旬に歩兵と戦車隊と舟艦隊の合同演習があり、当時大曲中隊長の張り切りようはすごかった。四月上旬、転地演習のため、満州ジャムスへ出発し、この街から五、六キロメートル上流の四合屯^⑦に落ち着く。宿舍のすぐ前には飛行場があった。七月チチハル^⑧で、第一師

⑥ 敵前上陸用の舟ベニア板の折疊舟

⑦ 桂木斯より西にある街

⑧ ハルピンより西にある街

団との連合演習がある。場所は松花江^⑨の上流小民屯で、「夜間敵の銃撃を受け、中隊の舟艇に損害が出た。」と言う想定で、河岸に舟をつけ命令を待っていた。すると、菊の紋章の高張提灯^⑩がやって来る。それは御参戦中の梨本宮殿下であった。殿下に従っている将校が来て、

「殿下より、状況が終わったから元の行動にもどれ。」

との言葉だった。演習が終わり残務整理のためジャムス四合屯にかえった。^⑪

九月上旬ハルピンの兵舎に落ち着く。中旬に動員令が下る。昭和十八年九月十九日遺骨を旅順の忠霊塔に納めるべく石原兵長と私は出張し、二十一日帰隊し十月四日出陣式で、六日ハルピン駅に集結して釜山港に向かう。釜山では三日間の滞在だったがここには、東本願寺、西本願寺があり、私たちは東本願寺に泊まった。この付近は大変賑やかなところで、大衆の浴場あり、映画館、芝居小屋等があった。内地の街と全く変わらない。

釜山港から五千六百屯の順揚丸に乗り込む。十月十日、門司港で船団を組むために二日間停泊、久々に見る内地の山々が眼前に広がり懐かしいが、上陸することは出来ない。これで内地も見納めと決意する。船団は十隻中一隻は第一函南丸で同航する。途中台湾の高尾に寄港。二日間の停泊。その間青いバナナを積み込む。ここの気温は三十二、三度で内地の真夏である。

出航すると毎日一回は退避訓練。船内は畳一枚に三人が寝る。暑さと体臭で寝苦しい。兵隊ならではの状況だ。毎日一回乃至二回は加給品の配給があった。十月下旬、荒天で海は荒れ、船は木の葉のよう

⑨ 桂木斯を流れている

⑩ 竹箒の先に提灯が吊ってある

⑪ 我隊の宿舎の土地名

に揺れた。ちょうど私は、対潜水艦監視に立ち、船酔いでへさきにしがみついで吐いたが、吐くものがなくなり血を吐いた。コレヒドール海峡で暗夜、三回汽笛が鳴る。驚きとショックで何も持たずにデッキにかけ上ってみると、他の船と衝突寸前だった。機雷を避けようとして近づいたらしい。無事にマニラ港に入港することができた。

昭和十八年十一月一日マニラ港の波止場の二階にごさを敷いて寝起きした。三日は明治節、マニラ市街を団体行動で見学、無銭外出でむなしく波止場に帰る。国際都市だけあって見るものが皆珍しい。服装がすばらしい。真っ白な半ズボン、サングラス、すねまでの靴下に白靴、防暑帽、実にハイカラである。

波止場に赤砂糖の山が幾つもあり、黒人の兵隊が監視をしている。飯ごうに一杯失敬したところ、運悪く見つかり、ひどい目に逢った。一週間滞在後セブ^⑭に向け出発する。十一月十六日セブ港に着く。十六日付けをもって機工^⑮手集合教育を命ぜられ、田中軍曹以下六名が下船する。長い航海で飽き飽きしていたので、陸に上がって第一に思ったのが、「腹一杯バナナを食べてみたい」と云うことで、港にバナナ売りの店が並んでいる。一円で三十本位買った。手持ち金七十円余りで、心強い。十三時に兵たん宿舎に向かう。途中、一人がやしの木に登り、実を一個落として中の水を飲もうとしたが、臭くて誰も飲めなかった。夕方宿舎に到着、同年兵ばかりで心安い。ここマндаウエの宿舎の垣根越しに原住民から一本七円のウイスキー五本を買った。

⑫ フィリピンのマニラまでの海峡

⑬ 明治天皇の誕生日の旧称

⑭ フィリピンのマニラより南に下がったセブ島セブ市

⑮ 整備工

今日は十二月八日大詔奉載日、教育地に向かう。大発五隻でオポンの島に渡る。五コ部隊の受教育者が集合していた。どこを見てもやし林、バナナの木ばかりだ。とにかく暑い、内地（日本）の七月、八月の盛夏だ。中隊を代表して来た自分達は、一生懸命学科、実習に精励する。毎夜間食にパイヤ、バナナを買っていると、所持金が欠乏し、田中軍曹によく借金した。（参考までにパイヤ一個三十銭だった。）

六十馬力のディーゼルエンジン、装甲艇乙百馬力焼玉エンジン、十五馬力のエンジン等の故障排除教育だった。

昭和十九年正月、部隊の演芸大会があった。休養日毎にセブの街に外出したが、街の中程に理容店があり、かなり大きく従業員も五、六人いた。主人は日本人で、島根県の出身で、セブに来る前は、セブの奥地に住んでいた。ここに来た当時は天国だったと言う。「一年に一回は、郷里へ墓参りに帰っていたが、もう帰れない。」と長いキセルで煙草を吸いながら語ってくれた。

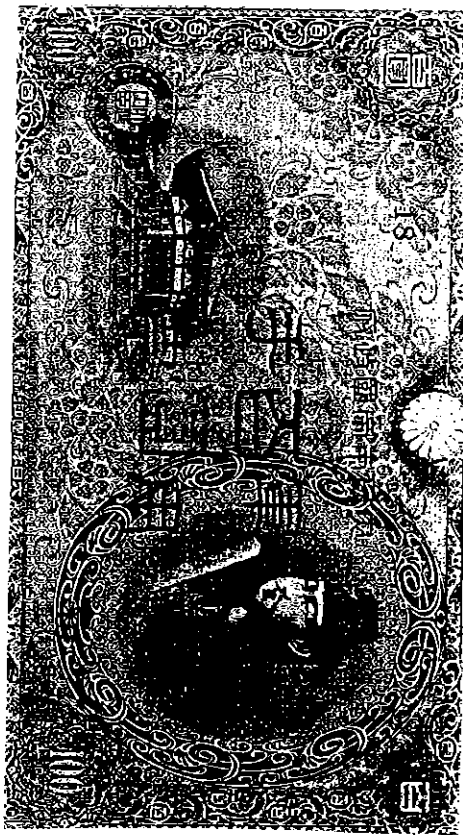
昭和十九年一月十日教育終了、第十二回南丸参百屯。一月十七日ミンダナオ島カガヤンの原隊に復帰する。部隊は「暁」部隊の指揮下、船舶工兵になる。

中隊は手旗、モールスの猛訓練を重ねている。私は大隊の機工手教育の助手として、対岸のパイナップル缶詰工場跡で教育をする。中隊長が替わって河野中尉になった。中隊長がかわってから初めて炊事につく。なかなか面白く楽しい仕事だった。

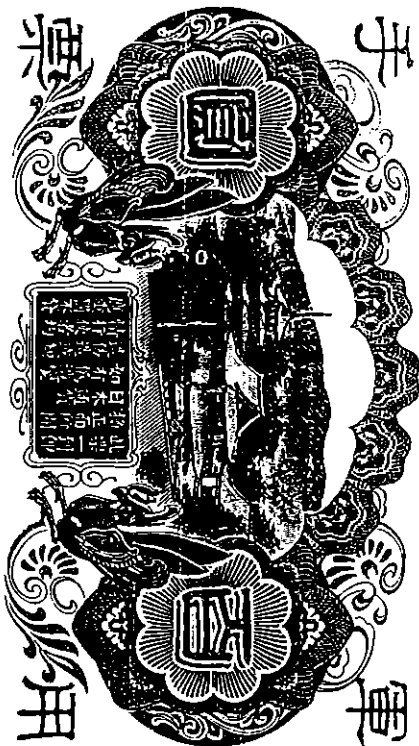
⑩ ミンダナオ島内の地名

三月一日付けで兵長に進級、四月上旬異動準備が始まる。カガヤン出発、セブに向かう。セブに三日間滞在し、船団七隻、護衛艦二隻でセブを出発した。途中私達より先に出た船団が、敵潜水艦にやられ相当の被害を受けた模様である。そのため、又セブに引き返す。二日間停泊し出発したが、敵潜水艦は幾度か出没した。無事にインドネシア領のハルマヘラ島ワシレ湾^{①⑦}に入港し上陸、早速荷揚げ作業に従事する。ここには、貨物廠があるので、貨物船の出入りが激しく昼夜を分かたず作業に追いまくられた。ここでの宿舎は湿地帯の中にあり、一日中、薪を燃やしていたが、戦友は次々と下痢をし、自分もその仲間に入る。熱も三十九度位あった日は何日も続くが寝ることなく努めた。

(表面)



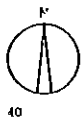
(裏面)



軍票(軍用手票の略) 戦地・占領地で軍隊が使用する手形

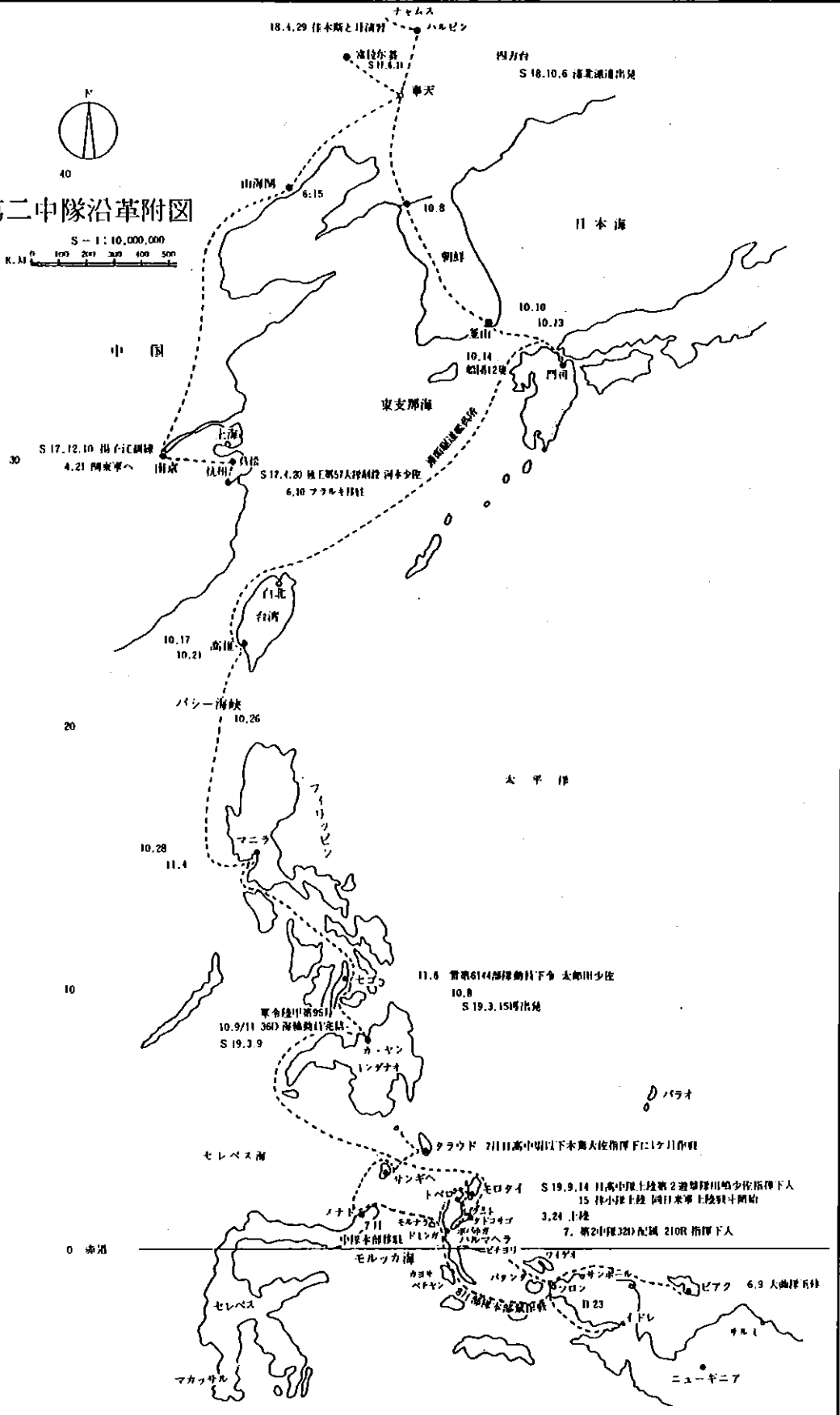
野田 四郎氏提供(○、七倍に縮小)

①⑦ インドネシア島々
セレベス島の東端にある街



第二中隊沿革附図

S - 1 : 10,000,000
K. M 0 100 200 300 400 500



四、銃後の守りと戦後

西横田町 古角 恵美子

戦争中は病気になってもお医者さんが少なく、若いお医者さんは、皆戦地に行かれています。内地におられる方は、個人医院で、年寄りのお医者さんだけです。重症になれば、お米や品物を持ってお願いすれば、しぶしぶ来てくださるような事でした。今、考えると嘘のようですね。今の人達には、想像もできませんね。

戦争中は若い元気な男の人たちは皆兵隊に行き、後に残っているのは年寄りや、女、子供達ばかりです。一生懸命に米作りや野菜作りに朝早くから夜遅くまで働きました。「朝は朝星、夜は夜星、昼は梅干し頂いて、欲しがりません勝つまでは、進め一億火の玉だ」と歌い文句の通り歯を食いしばり頑張ってきました。

兄は、召集^①で出征^②し、お腹の大きな義姉と、年老いた父と、私と三人で七反余りの田をまもってきました。しかし、父も過労で倒れ、義姉も父の看病にあけくれておりました。

そして、八月十四日、終戦となり兄は戦死し、義姉は十一月に無事男子を出産しました。が、生まれた子どもは可愛そうに父親の顔も知らないのです。二十一年三月には父も亡くなり義姉と子どもと私の三人となり、今から先どう生きて行くべきか、途方に暮れる毎日でした。

しかし、「今をどうするか」が迫っており、気を取り直しました。夏の暑いときに俵を編み、^③「さあ、

① 一般国民を軍隊に召集めること

② 軍隊に加わって戦地に行くこと

③ 当時は米を入れる俵のため藁で米を入れる俵を編んだ

米の供出をしなくては」と何も知らない私は近所のおじさんに俵の作り方を教えてもらいました。表と中へ入れる俵を作り、(中へ入れる俵はさん俵と言って丸く編んだ物を底に入れる。)表の俵は縄で目がかりを入れ、底だけ先に編む。其の中へもう一枚をいれ、それにお米を十六貫(六十キログラム)入れる。上の口を全部かがり、最後に俵締め機で中央と両方二箇所ずつ締めていく。初めての事で上手にできずドジョウ口のようにとがった俵となり、検査に合格せずやり直しを何回も繰り返しました。やっと合格した時の嬉しさは、今でも脳裏に焼きつき離れません。

今は紙袋に三十キログラム入れ、口を閉じるだけで簡単です。

終戦の翌々年の五月に稲の種まきもすみ、下関の叔母の所へ行った時、各駅停車で夜、出発し翌日の夕方やっと下関に着きました。途中、広島を通過する時、街全体は焼け野が原で、木は焼けて黒くこげ折れ曲がり、草一本も生えておりません。駅の付近に焼けて赤茶けたトタンを寄せ集めて、小さなバラックの家が少し建っているだけです。あの原子爆弾の恐ろしさを目のあたりに見た時は、あまりの悲惨さに言葉もでませんでした。これから先何十年も草も木も生えないとその当時は言っておりましたが。昭和六十年に広島へ旅した時は「これがあの時の広島か」と、思うほど立派になり、昔の面影などありませんでした。あの焼け落ちた原爆ドームも塗り直され、かすかに昔の姿が残っておりました。戦後40年間のすさまじい復興ぶりは唯々驚くばかりでした。

私たち老人は、あの苦しかった時を思い浮かべ、今の幸せを日々感謝して残り少ない余生を、暮らし

④ 民間の物資を法定価格で政府に売り渡すこと

ていきたいものです。

二度とあのような悲惨な戦争などないようにと祈りつつ……。



老人とともに農耕にはげむ婦人

“決定版 昭和史” 毎日新聞社刊より転載

五、ビルマ戦線の回想(二)

佐谷町 森脇 巖

遙かなるビルマ国に、幾多の日本軍将兵の遺骨が、永遠に祖国に、帰ることなく、戦後五十年の歲月は流れんとする。

ビルマ戦線の懐愴な戦いの中でも、第二十八軍の敵中突破の死闘は、想像以上であった。この当時の状況を十分に表現は出来ないが、足跡を可能なかぎり伝えたいと思う。

第五十四師団「兵」、^{つわもの}兵団は兵庫、岡山、鳥取の各県出身者が大部分で編成されたのである。この中には、加西市出身者が多数いると思うがはっきりしない。輜重兵第五十四連隊(一〇一二〇部隊)の第一中隊に菅野正義君(繁昌町)古角実男君(西横田町)谷川照君(下若井町)が、第三中隊には、藤原哲男君(殿原町)と以上四名の方は、この作戦で戦死された。私はこの連隊一中隊付の衛生兵であった。昭和二十年五月三日、英印軍は強力なる空軍と、機動部隊をもって首都ラングーンを奪回する。これと前後して主要道路、即ち、マンダレー街道、^⑤プローム街道を完全に占領した。これより以前、ビルマ国軍は日本軍不利と見るや英印軍に寝返りを打ったのである。ビルマ方面軍は、^⑦シタン河以東の南東部に後退、^⑧第二十八軍はアラカン山脈、^⑨イラワヂ河南西部に孤立した。やがてビルマ特有の雨季の進行と共に諸河川は氾濫し、低地一面は、沼地に変わった。第二十八軍は戦闘を繰り返しながらペグー山系^⑩に兵力を集中してシタン脱出の準備を進めた。約五十日間の行動。連日の豪雨と食料の欠乏、その上

① 陸軍で弾薬、食糧、被服など軍需品を輸送する兵隊を
② 病気の予防、治療、撲滅を図るため医師の指示で兵隊に関わる兵

③ イギリス・インド軍

④ ビルマ国の首都

⑤ ビルマ国の中央を南北に走る主要道路で北側が

⑥ 南側が首都までの道

⑦ マルタバン湾に入る東部の河、シタン市に

⑧ ビルマとインドの国境の山系

⑨ ビルマ最大の河で中央部を北から南に流込んでいる

⑩ 東にシタン河、西にイラワヂ河が流れ、その中央の山系

風土病、特に悪性マラリアと原住民軍の反抗により多数の死亡者と落伍者を出した。七月二十日夕方、^⑩全軍突破のため、縦隊に分かれて一斉にシットタン河に向かって突進した。英印軍、反乱軍、原住民軍と交戦しながら、広大なる湿地帯を突破しシットタン河へ、それぞれ筏に身を託して夜間、渡河を決行した。八月末、約一千軒を突破し友軍の陣地にたどり着いた。第二十八軍の戦没者は約三万五千と発表した。

—— ペゲー山系の悲劇 ——

中隊は六月初めペゲー山系西麓のポーカンに入った。別行動の連隊主力は、「アラカン山麓の戦闘において連隊長以下多数の戦死者を出した」と聞き、痛々しく感じられた。

師団主力は象を先頭に密林を切り拓き、山系の奥深く進む。師団司令部は手島中隊に対し糧秣収集を命令した。中隊は重症患者を残して、山系東麓へ急行動をおこした。

七月三日には、陣地を構え、日中斥候を出し部落を偵察、夜間、原住民等の熟睡している頃を見計らい、襲うのである。第一回目は成功する。収集した米は全部師団司令部へ引き渡した。翌日は不成功。第三回目は途中中隊伍が分離して十名は取り残され、止むなく引き返した。参加者は僅かの粃と引き臼を持ち帰った。翌朝、指揮班長は激怒し、前夜引き上げた者を青竹で殴りつけた。余りにも哀れであった。中隊長はこれらの者に対して、再び日中に糧秣収集を命じた。彼らは敵襲を受けたのか、生還しなかった。収集隊が出て行った後、粃すりをしていた。その時、敵の観測機が、しつこく低空で旋回を続けた。

⑩ ビルマの土地の軍隊

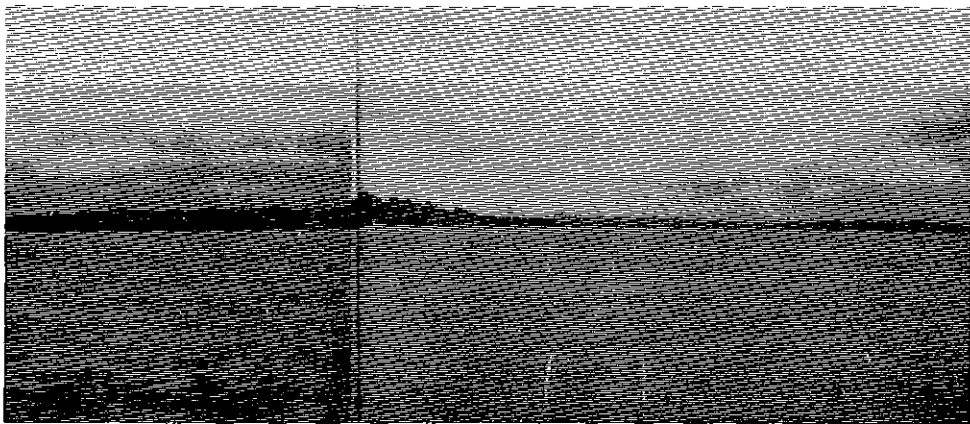
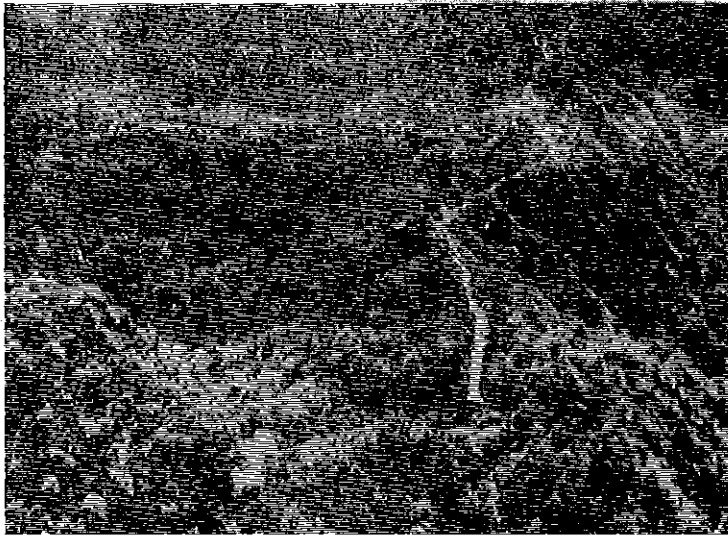
去ったかと思うと敵は我々の陣地に迫撃砲の集中攻撃をかけてきたため全員、その場に伏せたが陣地は正に修羅場と化した。小林軍曹は上膊部を引き裂かれていた。石川軍医は直ちに止血、片腕切断の手術にかかった。しかし、麻薬がないので手術が進むにつれて幾回も激痛に堪えかね「殺してくれ」と叫んだ。手術は終わったが、坦送に堪えるものは皆無である。部下に抱きかかえられながら、陣地を離れたが、彼はだめになってしまった。この砲撃に三名の戦死者、数名の負傷者を出してしまい中隊長は慟哭した。

七月九日午後、山中に難を避けた中隊主力は、連日の行動に体力は衰え、砂ずれの足は浮腫みマラリアの再発で大部分は病人であった。突然、翌朝四名、昼三名、夕方三名と前途を悲観して手榴弾を抱き相次いで自決し果てた。結局、糧秣収集による犠牲者は三十名となり、中隊長は戦力低下を憂いて自決を禁止した。糧秣は不足し、食塩も欠乏したので、草や筍を採って雑炊をつくり飢えをしのいだ。加西市出身の古角上等兵は患者班として残っていたが、私が出発地点へ引き返すと既に白骨化し、谷川上等兵は足の浮腫みで落伍した。中隊は落伍者を出しながら急ぐ。先行部隊の白骨に、銀蠅と蛆が群がる骸その悪臭は鼻をつき、落伍者は杖にすがって後を追っている。正に惨憺たる地獄の断末魔の様相は、筆舌に尽くせない。多くの骸と白骨は、師団主力へ追及する中隊の道標となった。

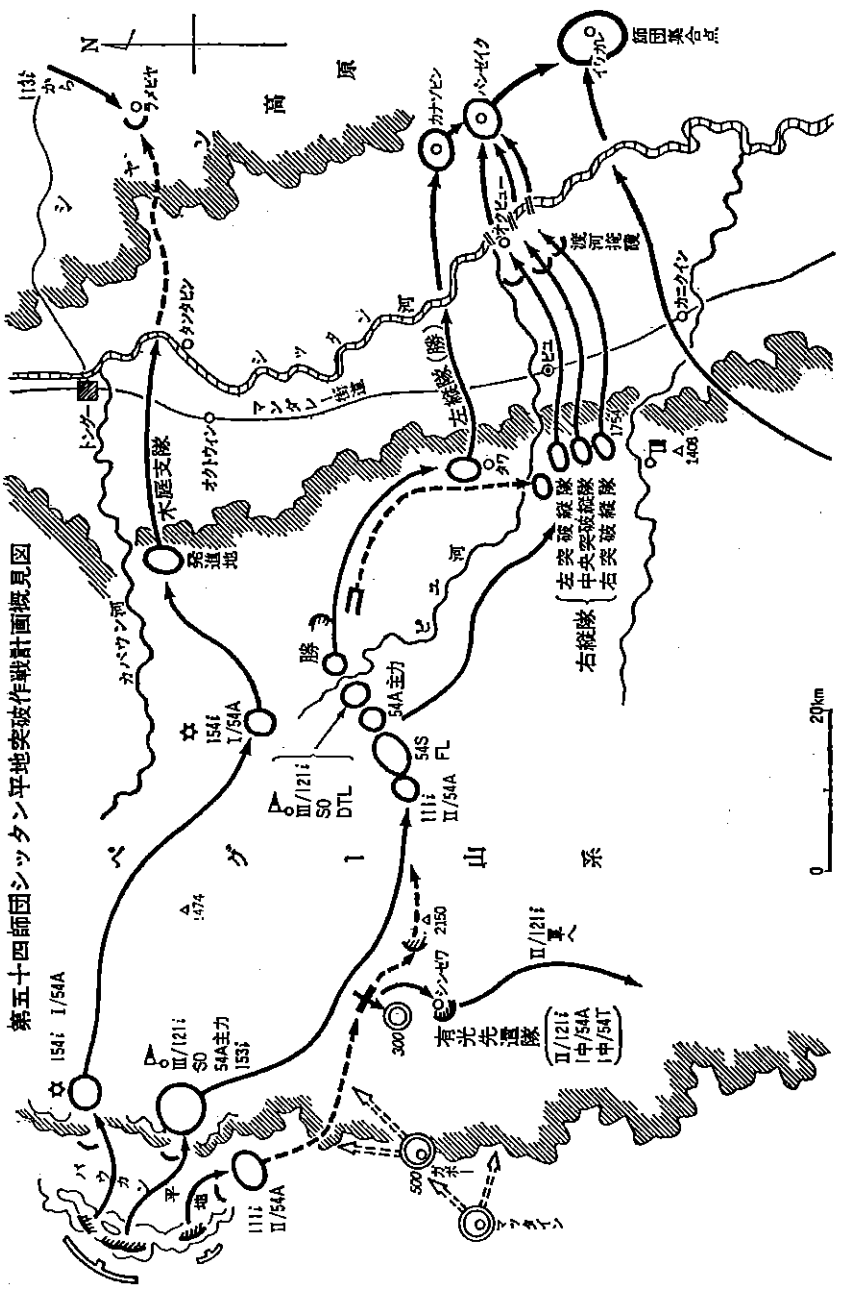
森脇氏（筆者）



ブローム、タンガップ間のアラカン山道
（英帝室軍事博物館所蔵）



ブローム付近のイラワジ河（雨季）



地圖第六十

六、ビルマ戦線の回想(二)

— シッタタン河突大破 —

佐谷町 森 脇 巖

① ペグー山系の東稜線上からシッタタン平野を望見すると、視界一面は湿地帯である。その中に点々と黒く見えるのが部落である。この地平線の彼方に最大の難関シッタタン河があるが、肉眼では見ることが出来ない。

各部隊はそれぞれ分散した。② 輜重兵しようちゅうへいの第一中隊は、師団司令部直轄となり、師団長護衛のため軽機関銃分隊を差し出した。中隊は師団司令部より重機関銃を預かった。中隊長は「武功を挙げるため、全力を尽くして搬送せよ」と命令した。疲れ果てた兵隊には余りにも酷であった。

七月二十日夕方、中央突破のため縦隊は行動をおこす。闇のため山麓伝いに、孟宗竹を担ぎ、隊伍が分離しないように白布を吊り下げ先進する。兵隊は重機を交替での前進であるが、平地へ出る頃には暗闇となり、湿地帯を東へ強行する。担いだ銃身はずっしりと重く、肩に食い込むも、隊伍から遅れば重機と心中である。③ ようやくにしてマンダレー街道を敵に遭遇することなく横切った。その頃、重機を担いでいた兵が隊伍から遅れて不明になってしまった。中隊は五名の搜索隊を編成し、捜したが発見できず、仕方なく部隊の最後尾を続行した。漆黒の闇の中を続行しているうちに、物凄い雨が土砂降りとなり、部隊は動けなくなった。どうすることも出来ず、ずぶ濡れになってその場に二時間位我慢し

① ビルマ最大の河、イラワジ河とシッタタン河の間に南北にペグー山系がある

② 陸軍で弾薬、食糧、被服など軍需品を輸送する兵隊

③ 都市マンダレーから首都ラングーンに通じる道

ていた。すると、東の空が白んで来たので敵に発見されないように草むらへ走った。その中、先行部隊が部落の中へ入ったので続行する。

④ 原住民の好意で米の配給を受けて炊飯し、飯盒一杯をペロリと平らげ、満腹感を味わう。十三時頃、部隊は危険を感じ、キンワイン部落を出発する。すぐ後を反乱軍が襲ってきたために小走りに草むらへ前進したが、川巾が三米もあり、深いので中隊の主力は、立ち往生した。銃撃は激しくなるばかりだ。担いできた竹を組み、渡りを先行した者は湿地帯を走った。その頃より敵機の機銃掃射である。何回も走りかけたが、すぐ旋回して襲ってくるので草むらへ引き返した。このため中隊はちりぢりになった。夕暮れとともに敵機は去ったので、泥田の中を強行し、明け近い頃、やっと部落に入った。

⑤ ようやくにして、三日目に河近くの部落に入る。敵はシッターン平野で日本軍を捕捉殲滅し、最後は、シッターン河の激流にとどめを刺すべく空軍、機動部隊、それに反乱軍、原住民軍を到る処に配備して「二十八軍今や遅し」と、激しく撃ち迫ってきた。

濁流渦巻くシッターン河に『筏で身を投ずるか』『敵と対決して自決するか』の決断を迫られる。山から担いできた孟宗竹に、芭蕉や木片を集めて、四人一組となって筏を組んだ。師団司令部は原住民が沈めていた丸木舟を探してきた。これが我々の運命を大きく変えた。中隊はこれに乗船することが出来た。三名宛乗船する。闇の河面から対岸を見渡せば約二百米以上はあったが、流されながら舟は東岸へ着く。草を掴み、しかと土手を踏みしめた。時、昭和二十年七月二十六日未明、正に『生』への感激を噛みし

④ ビルマの土着民

⑤ シッターン都市を中心としてシッターン河を挟んで開けた平野

めたのである。

他の部隊は連日西岸付近で激しい攻防を繰り返しているのか、敵機は旋回を繰り返し爆撃する。地上部隊の銃や砲撃は続いた。西岸に到着した部隊は、夜を待って次々と筏に身を投じた。蛇行の変化の激しい流れは、東岸近くでは一層速い。流されながら辛うじて東岸に泳ぎ着いたのである。多くの将兵は急流に吞まれ消え果てた。正に地獄絵の如くであった。

加西市出身の菅野上等兵はシッタン河を目前にしながら砲撃のために、両足に重症を受け、『これまで』と覚悟を決めて「自分を捨てて行け」と言って残り、敵に手榴弾を投げつけ、「残り一発で自決した」と戦友は語った。また、藤原上等兵はシッタン河に消え果てた。

⑥ 英第十四軍司令官の回想によれば、シッタン河に約六千以上の死体を発見し、さらに「多数の者が水中や草むらの中で発見されずにいた」と発表した。

渡河し、逐次集結した各部隊は、夜を待って沼地を東へと進んだ。途中水の深いところへ一晩中迷い込んで引き返すこともあったが、三日後⑦ シャン高原に入った。原住民は逃亡していたが食糧は残っていたので久しぶりに胃袋を満し休養をとった。シャン山系を奥深く入り南進した。ここにも先行部隊は反乱軍に撃たれ、部落の入口、家の中に白骨が散乱していた。正に「白骨街道を征くが如し」の惨状であった。八月二十六日転進部隊に敗戦が伝えられた。そして、第三十三軍の陣地にもどり着いたのは八月末日のことである。

⑥ イギリス軍

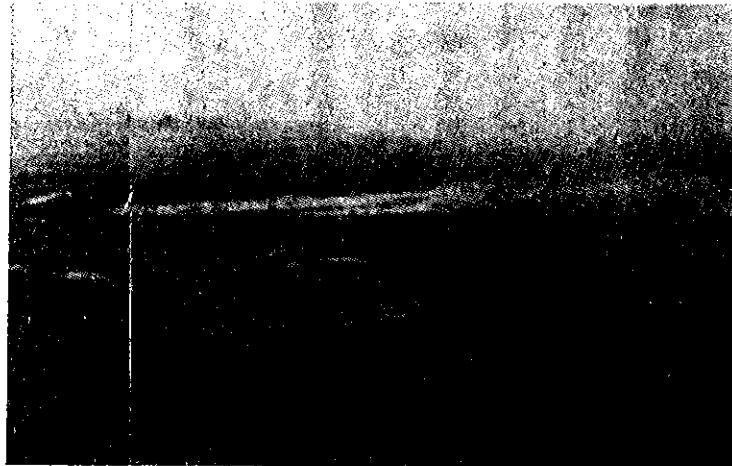
⑦ シッタン河東部の高原



シッタン河（日本海新聞社提供）



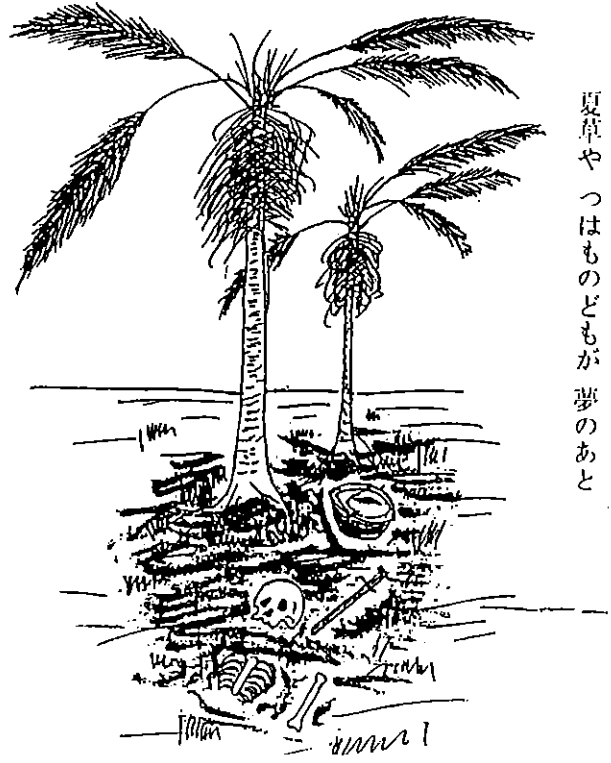
シッタン河の渡河（鮫越春湖氏筆）



シッタン河畔の冠水地帯

終戦を目前にして敵の伝単（ピラ）

シャン山系、北ケドウィン



夏草やつはものどもが夢のあと

賞詞

陸軍第五十四聯隊第二中隊附

陸軍衛生伍長 森 福 巖

右者中隊衛生兵トシテ終始一貫熱心積極的ノ衛生業務ヲ精勵シ豫作戰行動ノ貢獻スル所極メテ大アリ
 昭和二十年五月五日於ケル、インピン附近ノ戰鬪於テハ敵機飛ノ間或傷者ノ救出治療ノ任ヲ完クシ爾後大ケル山系ニ向テ機動及過作戰於テ常ニ沈著剛勝ノ活躍シ遺憾ナク衛生兵トシテ本領ヲ發揮セリ
 右ハ伍長ノ旺盛ナル責任觀念ト任務ニ對シテハ萬苦ヲ辞セズルノ熱意トニ殊ル所ニシテ其ノ武功拔群ニシテ衛生兵ノ範ナリ
 仍而茲ニ賞詞ヲ授ルニ

昭和二十年一月二十日

陸軍第五十四聯隊長代理陸軍大尉 佐 田 恒 田



七 私 の 学 生 時 代

— 学徒徒動員時の一断面 —

河内町 松尾みさこ

小学校は国民学校^①でした。戦局が激化した昭和十九年、私たち女学生は学徒専用電車に乗車して西明石の川崎航空機工場^③にお国のためにと通勤していました。

その当時の女子の制服は紺のヘチマ衿、白い衿、腰に細いベルトを通し胸元に白い布を縫い付け、学徒通勤報国隊、学校名、血液型を記入しておりました。下は着物をつぶしてモンペを作り着用し、防空^④頭巾は綿を入れて作りました。帯しんでつくった肩掛けの救急袋^⑤でした。

私は神戸で下宿して女学校に通っておりましたので、下宿の食事は雑炊、おかゆの毎日です。それも一椀なんです。「あーおなかがすいた、早く土曜になれば家に帰っておなかいっぱいごはんが食べられる」と、土曜を待ったことを思い出します。その頃、学徒動員の歌を私たちはよく歌っていました。

「君は鉄取れ、我は槌^{つち}、戦う道に二つなし。国の大事に殉ずるは我等学徒の本分ぞ」^⑥毎日のように空襲があり、サイレンが鳴ると防空頭巾をかぶり、今の二号線^⑥の北側の細い道^⑥を列を作り走りながら、明石公園に避難したものです。爆弾投下の瞬時は地面に伏せて爆風を避けました。耳をおさえ、目をおさえ地面に伏せたのです。爆風のすごさは思い出たくありません。一緒に伏せていた隆子さんは爆風で飛ばされ逝ってしまいました。

① 昭和十六年（一九四一）

② 小学校は国民学校と改称
徒動員として、学校を工場
へと場所を変え、毎日軍需
工場で働いた。そのため
通勤専用の電車

③ 現在の川崎重工明石工場
④ 爆風、機関銃等から頭
を守る頭巾

⑤ いつ、どこでも、負傷
した時応急処置の出来るよ
う、救急薬品、器具を入れ
た袋

⑥ 国道二号線

二か月後の深夜です。下宿のおばさんの「みさちゃん空襲や。はよ、はよ」の声、飛び起きて毛布をかぶり防空壕に走りしました。空襲に備え服は着て寝る毎日でした。防空壕は先の人でいっぱい入れません。その日はいきなり空襲になったのです。私はとっさに近くの野田女学校へ走りしました。ここも避難の人でいっぱいです。焼夷弾の炎が波のよううねって地面をはって入口めがけて走ってきました。

「海へ行こう」と誰かが叫びました。海辺まで三百米。この遠かったこと。両側の家々は燃えています。空から焼夷弾の雨がシュウシュウと落ちてきます。体が熱いのです。海辺に着くなり、私は毛布を体に巻いて海中に入りました。

今思えば三月というのに長い時間潰っていたので感覚が無かったような気がします。空が白み始めた頃、街並みは廃墟となっておりました。下宿のおばさんも、子供も、それっきり生死さえわかりません。私達昭和一桁世代ひとけたが体験した敗戦でした。



空襲により廃墟と化した市街地

“決定版 昭和史” 毎日新聞社刊より転載

- ⑦ 敵の空襲に備えて各家庭や町内会では空地に避難するための壕を掘っていた
- ⑧ 現在の神戸野田高等学校
- ⑨ 高熱を出して燃える薬剤を入れた爆弾（砲弾）

八、我が青春日記(二)

——南方での防戦と敗戦——

北条町古坂一丁目

安

富

清

昭和十九年六月六日、「セレベス^①」方面の敵潜水艦基地探索のため歩兵に協力せよ」との命令が下り、我が船舶工兵は指揮官日高中尉以下大発五隻で、自分は一舟艇の機関手兼副艇長である。艇長は安藤伍長だ。本船に曳航され、六月七日十三時頃タラウド島^②に到着。島津少尉の指揮する二隻を残し、自分等は日高中尉の指揮に入り三隻でサンギ^③へ島にむかい、六月九日タフナ島に到着し、原住民の盛大な歓迎を受ける。

宿舎は音楽堂だ。六月十日夜、日本軍歓迎会で男女青年、子供の演芸会があり、心が和んだ一夜だった。ワシレの下痢がまだ続いていた。誰かに教わり、「硝酸を飲めばよい」と聞き、手の平に一杯搗んで口へ放り込むと、不思議に下痢は止まった。

当時の物価は驚くほど安く、卵一個三銭、バナナ一本一銭、パイナップル七銭、鶏一羽五十銭、豚一頭五円と言う安値で、また宜撫工作が行き届いていた。

六月十二日、搜索に出発、夕方小さな島に着く。大発の機関が故障で頭が痛い。夜が明けても故障を排除することが出来ず、皆不愉快な顔をしている。「何としても治さなければ」と努力したが遂にまた夜を迎えた。夜を徹して排除に専念した甲斐あって、快音を発してエンジンは始動した。

① 赤道直下 フィリッピン
の南、ボルネオ島の東に位
置する島

② ミンダナオ島の南の小島

③ タラウド島の南西の小島

この捜索は一週間で終わって基地サンギへに帰る。自分の艇の乗組員は、安藤良一、清宮万三郎、市川金吉、久保山、皆木俊一、もう一人いたが名前は忘れる。計七名、その中の清宮はプロボクサーでピストン堀口と一緒にだったとの事だった。市川、清宮は炊事係、皆木は操舵手、久保山は機関助手、久保山は地方で漁船の機関手をしていらしい。三日後にはメナド方面の島々だったが、海が荒れて歩兵は船酔いで全滅だった。指揮艇から「しけのためタマコに帰港する」と送って来た。

一夜明ければ晴天、シャウ島に向かう。機関快調、当艇にはタグランダン島の酋長、同婦人、子供三人と歩兵三十人が乗っている。無事十六時頃シャウに着く。島民の出迎えを受ける。清潔な白服の青年達が、横笛バンブー（竹筒）で愛国の花を吹奏してくれた。酋長の案内で歩兵は宿舎に行く。舟艇隊は海岸に天幕を張る。今晚は酋長主催の会食で自分を除いて皆出席した。自分は明日の航海のため、機関の整備が残っていた。大変な歓待だったそうだ。

本日も晴天なり。次はダグランダン島、酋長の島である。八時出発、十二時着。酋長の案内で前方の島パラウに十六時着。ここでもバンブーの楽器で盛大な出迎えだった。一泊して引き返すことになりタグランダンに十二時に着く。ここでも賑やかな出迎え、各戸に日の丸を掲げている。今夜も会食、自分達二人も早く艇の整備を終えて出席した。島の御馳走はどんなものか好奇心でいっぱいだった。酋長の邸宅は、庭には玉砂利を敷きつめ、平屋ながら立派な白亜の殿堂で、ライトは丸い器具で、白い柔らかな光を放っていた。ガス燈らしい。テーブルは白い布が掛かっている。ナイフ、スプーンは銀製品、流きよ

石である。料理は豚、毛があちこち残っている鶏の塩煮である。ウイスキーは一抱えもあるガラスビンに一杯入っている。やしから取ったウイスキーだろう。デザートはバナナ三本が出た。

翌日、八時出発予定だったが、見送り者が沢山集まってきて土産物をサンパンに満載している卵、バナナ、鶏、豚、野菜、羊まで積んでいる。余り多いので途中で断った。見送り人は皆踊って歌って、子供はラジオ体操まで見せてくれ、こんな情景は内地でも見ることは出来ないだろう。

夕方シャブ島裏に着く。機関の故障。夕食は卵三十個入った汁と、鶏五羽の肉を七人で腹一杯食べる。機関故障排除のため徹夜する。

翌日、タフナ基地に帰着。三日後、島津小隊を迎えにトラウ島に向かう。追い風と機関快調で案外早く着く。当地で一週間滞在する。四隻の艇隊でタナフに帰るが、その間前が見えなくなる程のスコールに毎日出会った。

タナフの県庁設立一周年記念行事があり、二日間賑やかだった。その間原住民の芝居を見る。食欲は満ちたが、色欲は欠乏している。宜撫せんぶがよく、なかなかものにならない。間もなくサンギルと別れる日が来た。ワシレの本隊に帰隊である。敵潜水艦基地も見つからず、また、敵と遭遇することも無く終わろうとしている。が、話によれば「三日程前タフナの港から出港した友軍の駆逐艦が、敵魚雷にやられた」と聞き、この先の航海が心配だった。一旦出航すれば命の危険など毛頭ない。むしろ機関故障だけが心配だ。帰りのコースはシャウ島、タグランダン、パラウを経てメナド^④に無事到着。着く島々で夜、

久保山がよく米山甚句を聞かせてくれたが、きれいなよく通る声だった。

メナド港迄帆船で一緒に来た人から、露天商で売っている樽のアイスクリームを樽ごとプレゼントしてくれた。プレゼントの主はタグランダンの酋長の娘で、お世話になったと礼の品だ。彼女はハンケチを振りながら帰って行った姿が目に残る。

メナドは立派な街だった。一週間滞在したが、過日パラシュート部隊が降下したところである。映画館もあり「マレーの虎」を上映していた。メナドの裏側にあるビートンに着く。大分戦況も悪化している。ここでも一週間の逗留後、二千屯の古い貨物船、(全速で六ノットしか出ないそうである)に曳航されてワシレ^⑤に向かう。途中しげに逢う。ワイヤロープが不気味な音でしゃくる。ロープが切れば我々の命はそれまでだ。皆船酔いで参っている。長い長い時間だったが、無事ハルマヘラ島^⑥に近づく。港に入ると本船から離され、単独でワシレに向かう。ワシレは空襲で貨物廠は焼けていた。そこ、ここに沈没船がマストだけ海から顔を出している。貨物移転の船団が入っていたが、暗夜に出ていくのだろう。中隊はいなかった。自分等は空襲を知らずに堂々と航海を続け、ここまで来たのが不思議である。二十四時、大隊本部の荷物を積載して本隊へ追及する。中隊はボバネゴにおり、我々は行方不明と思われたのか、中隊の編成外になっていた。二ヵ月間はよい目に会ったが、残った中隊の者達には申し訳ない気持ちで一杯だった。三日間逗留して、自分等の大発二隻はドジंगाに回送するため、夜を利用して秘匿していた川奥から出して棧橋で荷物を積み込んだ。

④ セレベス島北端の港

⑤ ハルマヘラ島の中心の港

⑥ セレベス島の東の島

⑦ モロタイ島遊撃隊が編成されたが、自分はその編成に入っていないかった。今まで行動を共にした乗組員は皆行ってしまふ。伝場船で、大発動艇に乗り換えるため送つての帰途、手を振りながら泣けてきた。あんなに涙の出たことはなかった。あれが永久の別れだった。自分の船は、一中隊に申し送つたが、あの小さなエンジンで、毎日のように全開で一日中走れば、エンジンもかなり弱ってきている。応用修理もかなりしたが、よくこれまで持つてくれた。二ヵ月余りの間、常に神経はエンジンに集中してただけに愛着があり、申し送りの際、さびしさを隠しきれなかった。

⑧ ドジンを出發してボバネゴに行く。中隊に合流、自動砲分隊になるが、自動砲なるものは初めてで操作等全く分からない。この頃は、毎日空襲あり。装具と自動砲をかついで山に退避するのが仕事だった。

⑨ 昭和十九年九月、ボバネゴを大発動艇二隻に糧まつ兵器を積み込み、どこへ行くのか出發したが、途中敵魚雷艇と遭遇照明弾が打ち上げられ、付近の川に逃げ込む。ここはカタナという部落荷物を陸揚げし一コ分隊に、甘味品一梱包、酒三本配給。配給後は食べ放題。出發前は酒で行水をした。暗夜を待つて出發。出發後一時間程たったと思うころ、後方より黒影が二つ浮かんだと思うと敵の機銃乱射、丁度、線香花火のようだ。敵魚雷艇の速力は三十ノット、自分等の艇は十一ノット、とてもかなう相手ではない。側面から乱射して通り抜けるとまた旋回して乱射し、何回も繰り返すが命中弾がない。我が方もへさは自動機関砲、船尾には重機関銃を發射するので敵も余り近寄れない。自分は小銃を七発程撃つた

⑦ ハルマヘラ島北の小島敵をおどかすため上陸しているところに逆上陸する部隊

⑧ ハルマヘラ島の一港

⑨ 魚形水雷で操縦できる艇を發する仕掛けの弾丸

⑩ 機関銃でところかまわず撃つこと

が、命中しない。敵の弾着は次第に下がり舷に命中しだした。自分の背中をかすめる一発「熱い」思わず声が出た。隊長は渡辺准尉「敵に体当たりせよ。」と一喝、いよいよ最後だと思われたのだろう。しかし、なかなか当てさせてくれない。一名戦死一名負傷者が出た。他の一隻は前方の小島に逃避していたが、艇がやられて救助を求めている。敵の動向を見て救助に当たる。救助は成功した。翌日、艇を見れば舷は蜂の巣のようになっていた。艇を捨てて陸行することとなり、福井と二人で自動砲を担いで道なき道、谷また谷川を渡り昼夜を分かたず歩き続けた。

十日余りで到着したところはガレラで、松永歩兵部隊に転属、休む前に寝るところを造らなければならぬ。タラカン山の中腹に三人住まいの壕を掘る。糧まつの大半を捨てて来たので食べ物がない。食事抜きで昼夜兼行で糧まつ分散作業、作戦道路構築、陣地構築、戦車壕、肉攻壕の構築、も早一月になるが、全く休みは無かった。

壕の中に三人寝るが、寝返りが出来ない程だった。装具は湿気でだんだんと腐っていく。兵の士気は低下していった。歩兵からの配給米は、一日二百グラム、朝昼一緒の弁当を朝に食べてしまい、昼はやしの汁だけで済ます日々である。だから作業を終えての帰路は歩いていても感覚がなかった。

肉迫攻撃演習が始まる。毎日のようにモロタイ島から敵機が飛来し、ガレラ飛行場を爆撃する。

昭和十九年十二月三十日、歩兵部隊の要請で、荷物運搬の援助のため、自分他二名は、背負子でゴム袋に入った米六十キログラムを負って隊の後に着く。滑走路を越えると流れの早い川にさしかかる。

二人がかりで荷物を渡した後は、ジャングルの湿地帯を夜通し歩いた。大休止になり泥の中でどれ程眠ったか、ふと気付くと辺りは大分明るくなっていった。歩兵は皆よく眠っている。悪いとは思ったが自分等三人は、荷物をそのまま置いて逃げ帰った。翌日の昼頃、隊に着く。准尉殿に報告した。「これから本部の炊事まで行って牛肉を貰って来い」とのことで、疲れも忘れて二人ではりきって受領に行く。

昭和二十年の正月を迎える。元旦は昨日の牛肉で腹一杯になった。二日から防空壕掘り、五日からガレラ飛行場でタピオカ^⑫植えの開墾を始める。道具は円匙^⑬だけだ。鎌の替わり、鍬の役、炎天下で、ふんどし一つである。空襲の時は、五百米も離れたところの蛸壺に飛び込む。月が出ておれば、午前二時に起床して農耕に出発した。食糧は尽き果て、一日八百グラムの米である。従って、朝食は飯盒の蓋に重湯一杯、昼と晩はタピオカに米粒が数える位で、飯盒の蓋に一杯だけ、空き腹を抱えては内地を思い出し眠れない。大多数の者が、マリアアにかかって休んでいる。作業に出る者は五、六人で、残りの隊員八十名余りはこの円匙にかかっていると云っても過言ではない。その内に友軍の飛行機がやって来れば攻撃になるのだと、兵隊達は信じていた。

明日は二時に起き、この草履を一足作らなければ数が足りない。早や二番立ちの不寝番だ。時計がないので、やしの実の繊維を縄にして、二尋ぐらいのところ結び目を作った火縄を時計替わりにした。草履の材料もやしである。就寝時間は、四、五時間、耕した面積も5町歩位。収穫は、二、三ヵ月先となり、益々食べ物がな^⑭い。サグやしから澱粉採取を始めたが、良い粉は少量で、前方に流れた荒い粉が

⑫ 芋の一種で澱粉として食用に供する

⑬ すこっぶ(シャベル)の一種 砂や土などを掘取ったりすくったりする道具

⑭ ヤシの木から澱粉がとれる

大部分だ。荒い粉は、おが屑だが、それに少量の良い粉を混ぜて団子汁にして食べたが口から肛門まで直通である。栄養になるものはなく、中でも一番栄養のあるやしの水だが、これをとるため木に登る元気がない。次第に体は衰弱の一途をたどる。四十日間澱粉採取の長をして終わった。散髪や髭を剃った事がない。歯を磨いたことも顔を洗ったこともない状態は、帝国陸軍の終わりの姿だった。

二十年六月上旬、第十派遣隊司令部の舟艇隊が編成された。隊長は畑中中尉、井内軍曹。折畳舟二乃至三隻を一組で暗夜に乗じて糧まつや弾薬を運ぶ。一航海七日乃至十日かかる。七月中旬頃、折畳舟二隻で、糧まつを司令部に納めての帰りは、弾薬を積んでの途中メデ岬沖で敵魚雷と遭遇、曳光弾で真昼のように明るくなった。

「飛び込め。」

と号令した。五反田、早川、汐崎、吉田と自分の五人。敵はすぐ横に来てサーチライトを照らし自動小銃で撫で打ち、スコールに逢ったようだ。立ってみると足が届く。引き潮だ。小さな島にたどり着いてやし林に逃げ込む。汐崎が足首をやられている。塩水がしみて、「痛い痛い」と連発する。五反田が

「そこに敵がいる、黙れ！」

と叱る。暫くして見ると汐崎がいなくなった。また、迫撃砲^⑬を打ち込んで来る。動けない。敵は暫く哨戒していたが、姿を消す。早速海岸に出て、汐崎を呼んだが、答えがない。砂浜を見ると早川が迫撃砲で撃たれている。早川上等兵は乗り込む前からマラリヤで高熱を出し寝ていた。また、やし林に入り夜

⑬ 周囲を明るくする弾

⑭ 敵に近づいて障害物の向こう側から攻撃する砲

明けを待った。あたりが薄明るくなると、二人で砂浜に出て手で砂を掘り早川を葬る。吉田が海上に浮かんでいる。すぐ飛び込んで引き上げ、早川上等兵の横に葬った。他の一隻は無事本島に上陸していた。捜していた汐崎は、夜間泳いで本島に渡っていたので安心した。早川、吉田の遺品として親指を切断して持ち帰った。この日はこの付近一帯は敵の盲爆に逢った。本部に連絡のため歩兵隊に軍通信を借りに行ったら、奇遇にも同級生の西村軍曹に出会った。早速飯を炊いてくれ、煙草を吸わせてくれた。

涙が出る程感激した。それ以後輸送は続くが、恐怖症にかかったようである。この頃ビアク島の先発隊が敵の火炎放射器で玉砕したことが伝わって来た。ワシレ^⑰当時ビアク島への先発隊が編成され、自分もその一員に入っていたが、事情があつて編成から外された。複雑な気持ちと共に戦友の冥福を祈る。

昭和二十年八月十五日終戦になる。やれやれと思つた。十月十日^⑱豪州軍の命令で兵器の海没作業が始まる。兵器、飛行機のエンジン、工作機械は爆破、自動車は油をかけて燃やした。弾薬は伝馬船で沖へ沈めた。誠に無念の一語だった。

十一月十五日ガレラから転出命令が出る。今まで寝るのも忘れ作つた芋畑は水泡に帰した。ペチャンに全軍が集結させられた。また一から畑作りの開墾が始まるが、三ヵ月経たないと収穫はない。十月一日付けで伍長に任命される。舟艇隊として行動したが、食事は乾パンの水煮を、やし椀に一杯だけでは歩行もやっとだった。

昭和二十一年の元旦を迎える。戦争もおわつた正月門松もやしの葉で、しめ縄もやしの繊維で作って

⑰ 燃え立つ火を四方八方に射出する機器

⑱ オーストラリアの軍隊

いかにも正月らしい。元旦は蔵ざらえの料理で三日間ゆっくりと休養した。四日、四名が舟艇隊から中隊に復帰した。また農耕が待っている。毎日毎日追い回される。時々マラリヤが出て十日余り休むが、鹿や豚を射止めて御馳走してくれるので、以前より少しは良くなった。藪もだんだん大きく成長してきた。自分は草刈り専門で一日にマムシを平均二匹位捕っていた。これはまた最高の御馳走である。ガララ当時はよくサグエル^⑩を飲んだ。白色で甘酒に似て取り立ては甘く、二、三日置くとスツパクになり酔う。又、トカゲの何十倍もある動物トツケの肉は鶏の様で、うまかった。食べられるものは何でも口に入れた。ある日、錦蛇を撃ち取ったものが、朝の汁に入っていた。とても美味だった。錦蛇の長さは五米もあり、その皮が干してあった。

漁労班が作られ、自分もその一員に入る。毎日爆薬を持って沖に漁に出る。黄色葉を梱包して導火線に点火する。アジ、サバ、ボラが面白いように取れる。

井内班長以下四、五名で折り畳み舟にエンジン付で基地をペテアンより西方に置き、留守番に木下上等兵を残して自分等は沖に出た。海底には鯖がうようよしている。「ここだ」と爆薬を投下した。大漁である。日も大分西に傾きはじめていたので帰途につくが、エンジンがいくらか始動紐を引っ張ってもかからないので、締めて櫓で帰ることにした。基地までかなり遠い。辺りは暗くなってくる。かすかに岸が見え始めた頃、虫が知らせたのか班長は大声で「木下！木下！」と呼ぶが、こんな遠方から届く筈がない。漸く岸に着く。「木下！木下！」と呼ぶが答えない。燈をつけて小屋に近づくと、木下上等兵は半身

⑩ 植物から採った汁

肉が吹き飛んで死んでいた。早速天幕に死体を包んで蝟壺に埋葬する。その夜は引き上げるが途中大漁だった魚は捨ててしまった。翌日小屋に行き調べたら、原住民が言うには、不発弾を拾ってきて住民の前で、信管をたたく様子をして、「魚たくさん取れる上等。」と言っていたそうだ。その住民は逃げたそうだが、その後信管をたたいて爆発したようだ。その後もこうした事故が続発した。

復員の日が近くなった頃、帰りの船内糧まつにと、芋を薄く切断し、土のかまどを作り、中に棚を乗せ、蒸し焼きにして取り出して粉にし、袋に詰めた。茄子の木も背伸びして取る位まで大きくなったのに、皆残して去らなければならない。

乗船の日も近いのに三日熱が熱帯熱に変わってしまった。高熱が十三日も続く。何も喉を通らない。無理をして食べても胃に行くまでに吐いてしまう。生きているのが不思議なくらいで、気力だけだ。

いよいよ骨と皮になる。五月八日中隊長が、注射液を十本持ってきて「衛生兵に射って貰え」と渡してくれた。小林衛生兵に「一度に両腕に頼む」と言ったが、彼は「射てば命がない」と言う。「死んでもよいから射ってくれ」と頼んだ。ではと一度に射って小林は逃げた。すると不思議に一時間程経ったか熱はだんだん引きはじめた。夜には平熱になっていた。何の注射か分からないが、中隊長、小林衛生兵に感謝の手を合わせた。九日は衛生兵のはさみで散髪し、装具を整理した。五月十日カウ沖にリパティ型米国船八千吨が乗船を待っている。皆と一緒に山を越えカウの乗船場に向かう。検査も簡単に終わり乗船した。

⑳ アメリカの貨物船の型

船内は戦時中と違って装備は少ないが、兎に角人の息と臭気と暑さで苦しい。食事は芋粉のだんご汁、塩味で辛かったが、帰国出来ることが嬉しくて、食事がまずくても文句を言う者がいない。十日目に田^②辺港が見えだした。皆デッキにあがってきて、懐かしい母国の家々を眺めた。何処の兵隊か、シートの上上がった途端にシートから抜けて船底に落ちて即死した。哀れな死に方だった。六月四日田辺に入港する。早速消毒、白衣の天使がやってきた。何年も見ることが出来なかった女の姿に見とれていた。久しぶりの銀飯におかず付の食事、風呂にも入る。

十人に一個の四角い洗濯石鹸は、見る見るなくなっていく。流れ湯は真っ黒、何年もの垢である。

何とか人間らしくなった。六月五日解散する。

四年六カ月、生死を共にした戦友は、懐かしい故郷へと四散する。名残り尽きない別れだった。

これで我々の激動の青春が終わった。

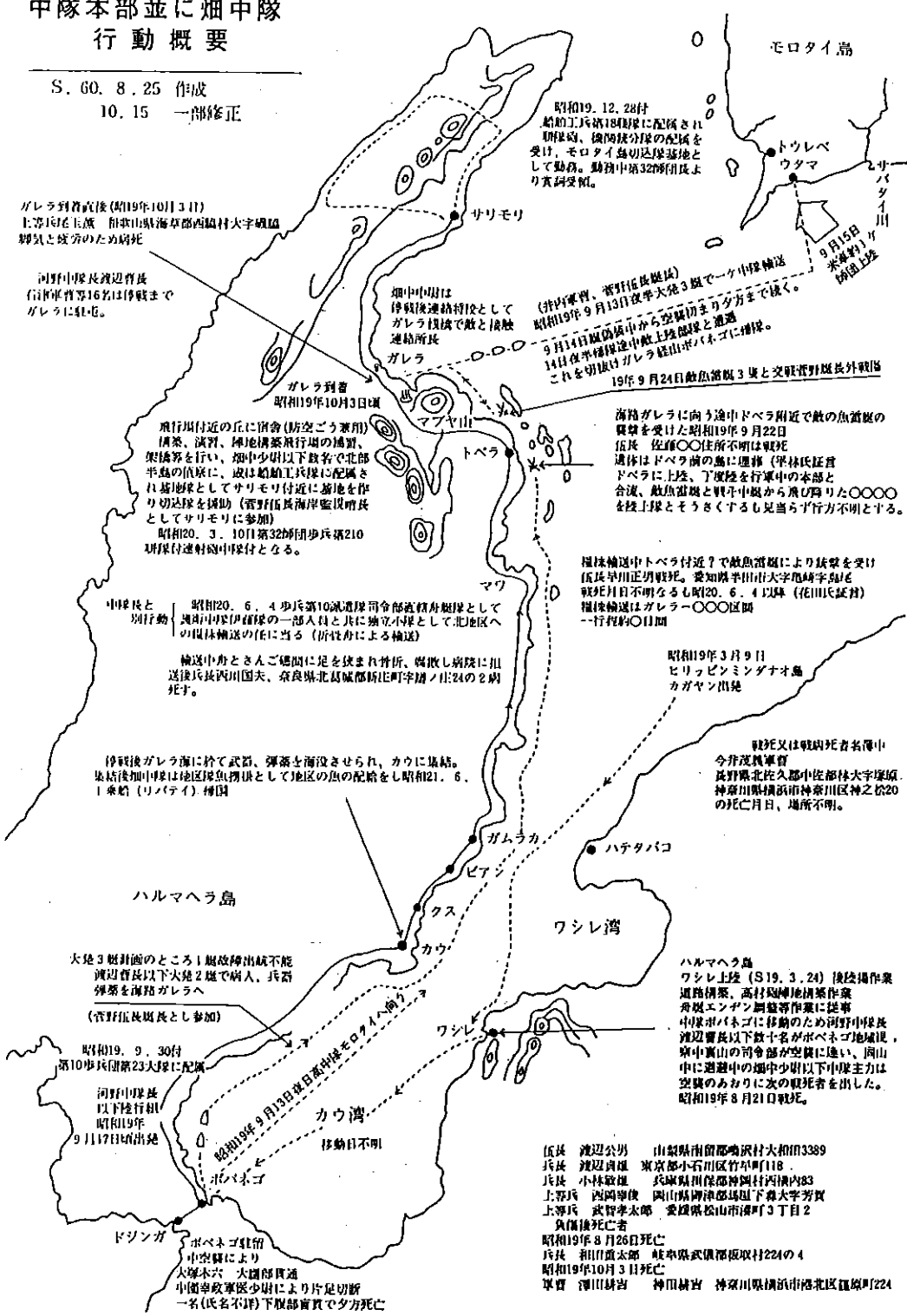
戦死者皆様のご冥福をお祈り申し上げます。



② 現在の和歌山県田辺市の港

中隊本部並に畑中隊 行動概要

S. 60. 8. 25 作成
10. 15 一部修正



ガレラ到着直後(昭和19年10月3日)
上等兵若玉廣 相本山根海草部西島村大字砲隊
脚気と疲労のため病死

河野中隊長渡辺晋長
石野重吉等16名は停戦まで
ガレラに駐屯。

畑中中隊は
停戦後連絡待機として
ガレラ根拠で敵と接触
連絡所長
ガレラ

昭和19. 12. 28付
船舶工兵第18隊隊に配属され
研修隊、偵察隊分隊の配属を
受け、モロタイ島切込隊基地と
して活動。動物中第32師団長より
賞状授与。

(管内軍曹、菅野伍長提議)
昭和19年9月13日夜半大砲3挺で一ヶ中隊輸送
9月14日飯島嶺中から空襲切まらう方まで続く。
14日夜半種隊途中敵上陸部隊と遭遇
これを切抜けガレラ麓山部(本)に増援。

19年9月24日敵魚雷艇3隻と交戦菅野伍長外戦死

飛行場付近の丘に宿舎(防空ごう兼用)
構築、演習、陣地構築飛行場の掃蕩、
架橋架けを行い、畑中少尉以下数名で北部
半島の偵察に、敵は船舶工兵隊に配属され
基地としてサリモリ付近に基地を作り
切込隊を掃蕩(菅野伍長海岸監視哨長
としてサリモリに参加)
昭和20. 3. 10日第32師団歩兵第210
期保付連射砲中隊付となる。

中隊長と
畑中中隊伊原隊の一部人員と共に独立小隊として北地区へ
の糧秣輸送の任に当たる(折佐舟による輸送)

輸送中舟とさんご嶺間に足を挟まれ骨折、搬送し病院に担
送後兵長西川国夫、奈良県北葛城郡新庄町字畑ノ庄24の2病
死す。

停戦後ガレラ海に捨てた武器、弾薬を海没させられ、カウに集結。
集結後畑中隊長は地区隊魚雷艇として地区の魚の配給を昭和21. 6.
1乗船(リノパイ)。帰国

高踏ガレラに向う途中ドベラ附近で敵の魚雷艇の
襲撃を受け昭和19年9月22日
伍長 佐藤〇〇住所不明は戦死
遺体はドベラ島の島に遺棄(平林氏証言)
ドベラに上陸、丁度陸を進行軍中の本部と
合流、敵魚雷艇と戦つた中隊から飛び降りた〇〇〇〇
を授上隊とさくさくするも見当らず行方不明とする。

糧秣輸送中トベラ付近で敵魚雷艇により襲撃を受け
伍長早川正男戦死。愛知縣平田市大字旭峰字島田を
戦死日不明なるも昭和20. 6. 4日隊(花田氏証言)
糧秣輸送はガレラ〇〇〇〇区間
一行程約〇日

昭和19年3月9日
ピリピンミンダナオ島
カガヤン出現

戦死又は戦死死者名簿中
今井茂義軍曹
長野県北佐久郡中佐郡体大字塚原
神奈川県横浜市神奈川区神之谷20
の死亡日、場所不明。

大砲3挺封鎖のところに1艇故障出航不能
演習員長以下大砲2挺で病人、兵器
弾薬を海路ガレラへ
(菅野伍長提議とし参加)

昭和19. 9. 30付
第10歩兵第23大隊に配属
河野中隊長
以下陸行組
昭和19年
9月17日出現

昭和19年9月13日敵中隊モロタイへ入り
移動日不明

ハルマヘラ島
ワシレ上陸(S19. 3. 24) 後陸揚作業
道路構築、高付陣地構築作業
舟艇エンジン調整作業に従事
中隊ボボネゴに移動のため河野中隊長
渡辺晋長以下数名がボボネゴ地確認、
東中真山の司令部が空襲に遭い、同山
中に避難中の畑中少尉以下中隊主力は
空襲のみならず次の戦死者を出した。
昭和19年8月21日戦死。

- | | |
|--------------|-------------------|
| 伍長 渡辺公男 | 山梨県南留部町磯沢村大和町3389 |
| 兵長 渡辺貞雄 | 東京都小石川区竹早町118 |
| 兵長 小林敏雄 | 兵庫県川部郡神岡村西内83 |
| 上等兵 西岡孝俊 | 岡山縣神津郡馬場下森大字芳賀 |
| 上等兵 武智孝太郎 | 愛媛縣松山市濱町3丁目2 |
| 負傷戦死者 | |
| 昭和19年8月26日死亡 | |
| 兵長 相田重太郎 | 岐阜県武儀郡坂取村224の4 |
| 昭和19年10月3日死亡 | |
| 軍曹 澤川勝吉 | 神奈川県横浜市港北区區塚町224 |

九、国鉄北条線列車脱線転覆事故記

網引町 太田 加七

日 時 昭和二十年三月三十日 午後三時三十分頃

事故場所 網引駅と万願寺川鉄橋との中央地点

私の任務 ① 神戸車掌区加古川支区車掌として、この列車に乗車中

当日は良い天候でした。北条町駅発、粟生駅行き上り列車は、法華口駅で貨車の入れ換え作業が手間取り、約四、五分遅れで発車した。途中、田原駅で客扱いのため停車し、網引駅に向かって進行中であつた。万願寺川鉄橋上で、進行右側（南）の八寸山^②上空にエンジンが停止したような飛行機一機を車掌室から認めた。それから約十秒ほど経った時、今度は進行左側（北）そら豆の植えてある田の中に飛行機が墜落し、二、三回もんどり打って黄色の土煙を上げて停止したのを見た。それと同時に、列車が大きく前後左右に揺れて、機関車（C十二 一八九号）は、左の落差約一米五十センチ下の青田に百八十度転覆し、一輛引いていた客車も連結器がはずれて機関車の上に約三米ほど乗り上げた。客車は木造のボギー車^③のため中間部分がくの字型に折れ、丁度、中間に乗車されていた方が圧死された。死亡者はあまり外傷が無かったように思われた。負傷者の大半はガラスによる切り傷と打撲等であつた。転覆と同時に機関車は蒸気がなくなるまで汽笛が鳴り響いた。付近の人は勿論のこと、九会村の人、特に当時の警防団^⑤の方はよく鶉野の航空隊に米軍機が襲撃していたのでたぶんそれと思われたようだ。今は故人の

① JR西日本の加古川線現在の北条鉄道

② 現在の工業団地予定地外の西端の山

③ 前後二つの台車の上に車体を載せ、各台車が別々に運動できる構造にした大型車両

④ 現在の九会小学校区

⑤ 消防団と類似

増田喬氏は九会村の警防団長をされていたので、生前によく私に「九会村の団員を全部召集し、負傷者の救出をしたら、網引公会堂に搬送した」と言っておられた。

公会堂では、姫路海軍航空隊から軍医と衛生兵が来て、負傷者の手当てをしていた。死亡者も同じ場所にそのままの姿で置いている状態であった。夕方、姫路検事局（当時）検事が来て、機関士の天田氏に「前方をよく見ていなかったのではないか」ときつく言っていた。しかし、物件があるのではなく、線路が少し北側に寄っていたぐらいでは、「発見は無理だ」と私も思った。丁度、その時、私もよく知っている河合西にある青野が原憲兵隊の隊長少尉の方がサイドカーで乗りつけて来られた。そして、「軍の機密だ。空飛ぶ飛行機が不時着したのが原因だから、調査の必要なし。」また検事に「早く帰れ」と言って検事を姫路に帰し「処理は憲兵隊です」と言っていた。国鉄にも責任は無いようなことを言っておられた。幸いに、鉄橋から網引駅方面は下り坂のため、列車は時速十軒ぐらいだった。そのため被害は少な目ですんだ。だが、戦中、戦後、交通事故としては市内では最大の事故だと思う。

私の記憶に残っている死亡者、特に近くの方は

北条町 三枝幾次氏（新聞店）陸軍軍曹

丹波の人で三枝氏の友達の軍曹の人

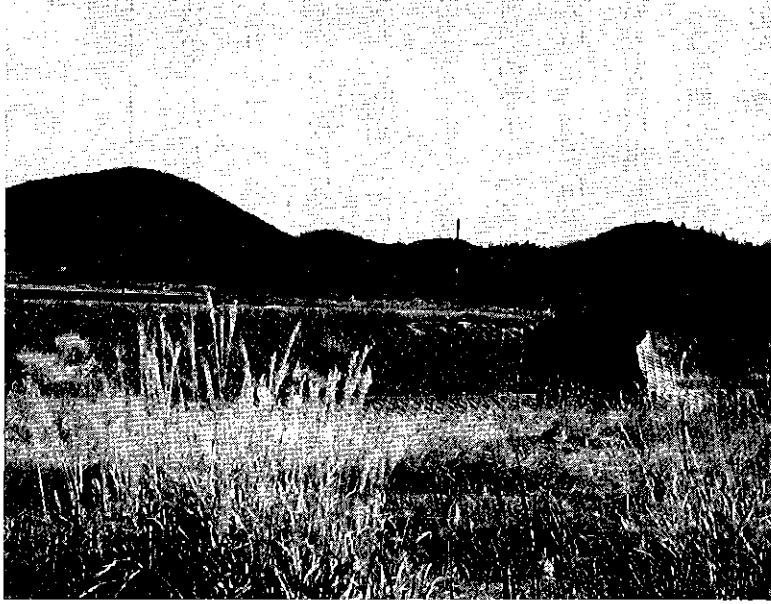
網引町（南網引町）神沢豊次氏 老人

小野市 宮崎さん（元、内外航空株式会社市場工場長の夫人）

⑥ 加古川線 現在の青野が原駅
⑦ 現在の自衛隊青野が原駐屯地

神沢氏の甥で、今は故人神沢英一氏に聞いた話では、当時国鉄からだと思いが補償として棺桶と、金百円が出たそうだ。たぶん他の方も同じだと思う。

脱線現場



現在の田原駅



現在の網引駅

七、白いマフラー

—— 鶉野飛行場周辺 ——

中野町 下村 静子

私が生まれたのは大正十五年（一九二一）五月です。

私の若いころは二・二六事件（一九三六）、日華事変（一九三七）と、日本の中国侵攻が次第に拡大して、第二次世界大戦に突入していく幕開けの時代でありました。

主人も出征^①しましたが、おかげさまで、無事復員^②し、一男二女の三人と孫九人（内孫三人、外孫六人）で結婚五十年もすぎ、健康に恵まれ平和に暮らさせていただいております。平成五年七月二十七日の毎日新聞の歴史の伝言を読んではいたら、『戦争末期、日本の物資がなくなり、熟練した搭乗員も不足していた。練習用の複葉機^③で・・・「白いマフラー」なびかせて・・・』これを読んで、ああーとあの時の事を思い出しました。

あれは昭和二十年の初夏の頃のことでした。空襲も次第に激しくなって、ここ鶉野の飛行場へも敵機が飛んで来るようになったのです。飛行機も航空兵も分散しました。私の家へも若い航空士官が宿泊しておりました。毎日毎日が緊張した日々です。そんなある日、その航空兵が「もう〇〇時間したらあの方角を見てよ、白いマフラーを一番長くなびかせているのが私です」そして別の一人が「翼を上下に二回振りますから、それが私です」と言い残して揃って飛行場へと行かれました。私たちはその時間にな

① 軍隊に加わって戦地に行くこと

② 軍人が任務を解かれて帰郷すること

③ 飛行機の主翼が上、下二重になっているもの

④ 航空隊の将校（軍隊の幹部）

るとジーと空を見上げていました。編隊を組んで飛行機が飛んで行きます。その内の一機から白いマフラーが長くなびいています。もう一機はその横で翼が上下してました。悲しい別れでした。どこへ行かれたのか、あるいは、それが最後の出撃であったのか、それはわかりません。飛行機が小さくなるまで見送っていました。

そんなある日、その日は朝から何回となく米軍機の空襲を告げる警戒警報のサイレンが鳴りました。^⑤
「ああ、またやなあ」と思いつつ、机に向かって仕事をしていましたら、空襲警報が鳴りました。サイレンが鳴って間もなく、ゴーとすごい音がして低空で東の方から飛行機が飛んで来ました。こんなに低く飛んできたことがなかったので体が震えました。

「来たー」と思うと同時に飛行場のあちこちから黒い煙がもくもくと上がり始めました。九会村役場にいた私たち女子と、男の年寄りはい急いで防空壕に入りました。その時ドーンと重い大きな音がしました「爆弾が落ちたんだ」と思ったら、すっばいようなへんな臭いが流れてきました。しばらくは皆動けなく、気がついたら、いつも仕事をしている所に座っていました。

爆弾は村役場の隣のお墓に落ちたのです。後で見たのですが、落ちた近くの墓石が真っ二つに割れて転がっていました。私の祖父の墓石も飛んできた破片があたったのか、少し壊れていました。

この爆弾が二十メートル北に落ちていたら、村役場にいた人々は亡くなったり、怪我したりしていたでしょう。

⑤ 敵機が日本上空に飛来し、こちらに来る可能性があるある時に国民にサイレンで知らせる。尚、近づいて来ると空襲警報にかわる

⑦ 加西郡九会村
現在の九会小学校区

飛行機が去った後で、村役場の西の窓から飛行機を見ていた人達に聞いたことですが、次々と飛行機が攻撃され燃え上がり、分散していたあちこちの飛行機もやられたのか黒い煙が上がっていたそうです。村役場の天井板も爆風で激しく上下していた由。

この頃は村役場にしても小学校にしても、若い男の方がいなくて、年寄りと女子が多く、

国をおもう道に二つはなかりけり

戦の庭に立つも立たぬも

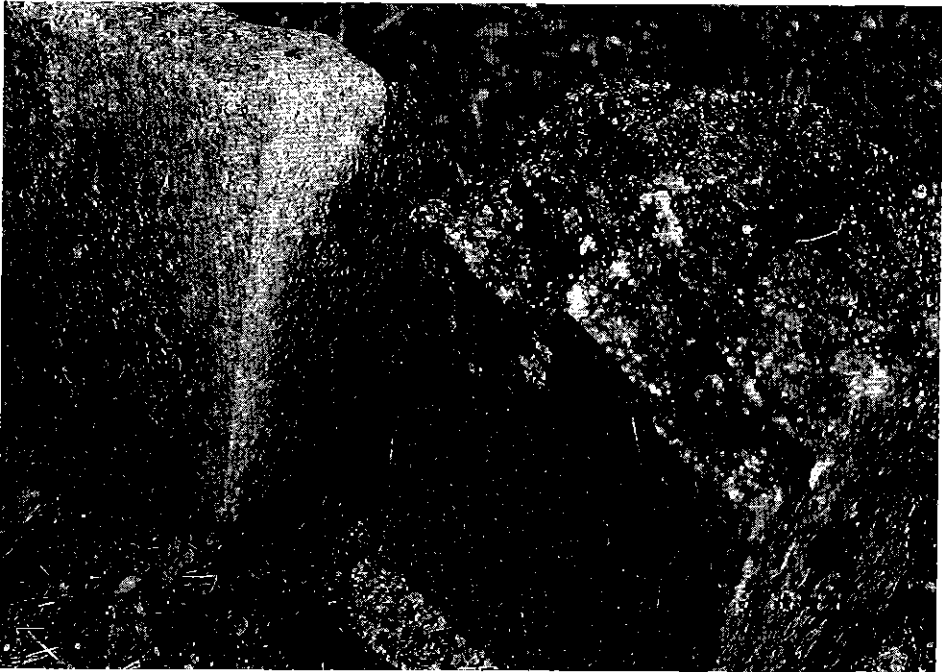
の気持ちで、月月火水木金と休みなく国中が力を合わせて国を守っていたのです。

今は飛行機の音を聞いても、飛行機雲を見ても安心して空を仰げます。有り難い世の中です。感謝して毎日を通り過ぎてはなりません。そして二度とあのような事があってはならないのです。

九会村役場に接近していた墓ですので、ご先祖の墓石が身代わりになったようです。いつまでもほっておいてはもったいない。墓石関係者と恩徳報謝のため手をたずさえて美化したいと思っております。

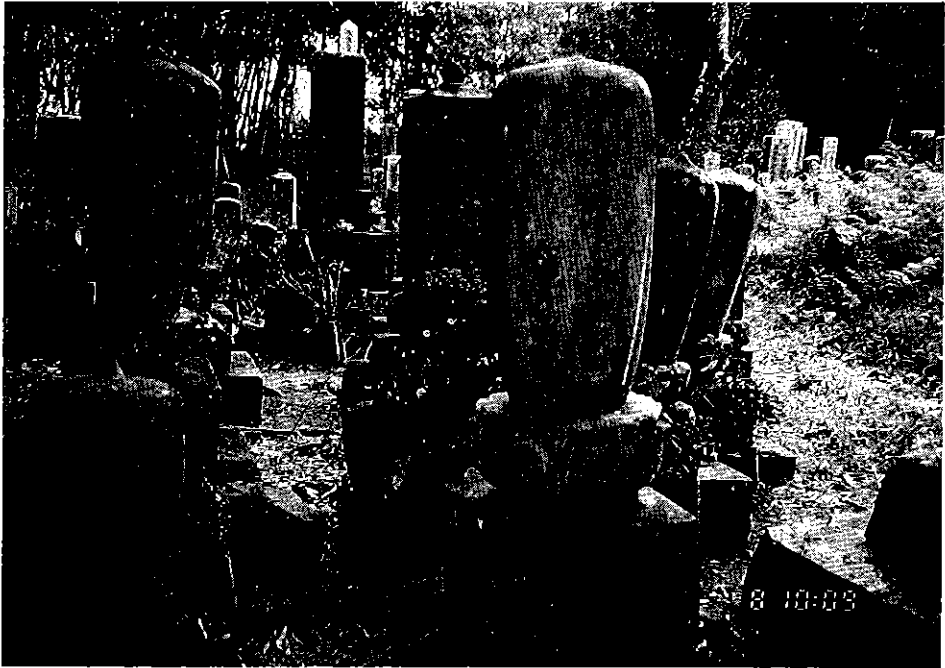


旧九会村役場 南 清慶寺壇下墓地



爆風によって折れた墓石

爆風によって折れた墓石



十一、第二次世界大戦体験記

中国から南方へ

国正町 民輪進治

①(1) 兵役の義務

② 師範学校を卒業して小学校正教員として当時の国民学校に奉職するうち、満二十歳を迎え、国民として避けて通れない徴兵検査を受けた。判定の結果、甲種合格となり現役兵として三カ年間兵役に服することとなる。支那事変たけなわの昭和十五年十二月八日、宇品を出発し、中国大陸漢口付近で活躍中の第十七師団隷下歩兵第八十一連隊の初年兵として揚子江下流、蘇州郊外の教育隊に入隊した。

(2) 歩兵の本領

「歩のない将棋は負け将棋」と言われるように歩兵は陸軍の主兵であり、他の砲兵、③ 工兵、④ その他の兵種の協力を得て常に最前線で戦闘をするものだ。他の兵種の協力が有る無しに関わらず戦闘を遂行できる兵科で、歩兵無しでは地上戦は遂行できない。歩兵の戦闘は有効射程三百米以内から射撃を始め、その目標は敵の指揮官、⑤ 重火器、その他、我に最も損害を与えるものを選び敵をおびえさせながら、そのすきに躍進を繰り返し、敵に接近して突入し⑥ 白兵戦で勝敗を決するが歩兵の本領である。

(3) 警備並びに討伐作戦

自昭和十五・十二・十三 至昭和十八・十・二十 幹部候補生として
自昭和十六・九・二十六 至昭和十七・四・二十 内地帰還

① 小学校の教員を養成するための学校
② 現在の小学校

③ 火炮を使って戦闘する兵士

④ 建築、架橋、爆破などの作業をする兵

⑤ 歩兵の携行する火器の中、重機関銃、自動砲、大隊砲、連隊砲などの総称

⑥ 敵、味方が接近して戦う

入隊すると、その本領を会得するための基本を訓練される。この第一期教育は三ヵ月であったが、二ヵ月の特訓で警備につくこととなる。進攻作戦で日本軍は 奥まで進んだが、占領したのは点と線だけと言われ、戦略的な要塞都市と主な鉄道沿線だけであった。例えば『池の中の藻をかき分けて進んだだけで藻は元に戻ろうとする』のと同じように帰順したように見せかけて反乱したり、また善良な住民を巻き込んで思わぬ奇策で日本軍を手こずらせる。広大な大陸で限られた兵力では決して「子どもの手をひねる」ような戦争ではなかった。北支方面は共産軍、中支方面は蒋介石中央軍が、絶えず侵入してきて三つ巴の戦は果てし無く続いた。連隊は、津浦線上宿県を軸に網の目のように分散配備にしていた。が、昭和十七年五月より、私は連隊の幹部に採用され、分屯警備隊長や、作戦に参加する。部隊を誘導する尖兵長、敵中深く潜入して敵情や地形を偵察する将校斥候等を務めた。下級将校は常に陣頭に立つので損耗が特に多く「明日は我が身か」と生と死の背中合わせで昼夜の別なく神経を使う毎日であった。

「現役満期除隊を命ず、即日臨時召集」を受ける。

(4) ^⑩ ビスマルク群島進駐作戦 自昭和十八・十・三 至昭和十八・十二・十四

第十七師団は昭和十八年九月、南東太平洋方面の戦勢挽回のため、ビスマルク群島へ進駐することとなる。第八十一連隊は十月二十日に上海出航、軽巡他、^⑪ 駆逐艦五隻、^⑫ 特設巡洋艦四隻に分乗した。この堂々の輸送船団は、目的地に着くまでは海軍に頼るしかなく、上陸しても米軍と地上戦を交えるまでは、「ヤシの木陰でバナナを食べて昼寝も出来る」等緊張した責任感から解放されていた。が、出航二日目

⑦ 反抗心を捨てて従うこと

⑧ 当時の中国の一方の総指揮者の名前

⑨ 軍隊の本隊の前方に進んで警戒に当たる小部隊

⑩ 東経一五〇度 赤道直下 ニューギニア島の東の島々 ビスマルク諸島とも呼ぶ

⑪ 魚雷を主兵器とする小型快速軍艦 奇襲攻撃、艦船の護衛を任務とする
⑫ 速い速力と戦艦に準ずる戦闘力を持つ軍艦

の夜、台湾沖で突如遇番司令の竹刀で叩き起こされ、「只今粟田丸が撃沈された」と知らされる。僚船粟田丸は、私の所属する第一大隊で、その大隊本部第一、二重機関銃中隊が乗船していた。連続四発の魚雷をうけ、一分四十秒で轟沈し、五百三十二名の将兵が海没散華した。実は地獄の戦線に向かいつつあったのである。途中トラック島を経て、南下三日目、十一月三日十一時四十五分、船団は敵三十八機編隊の空襲を受け、私の乗船している「清澄丸」は至近弾をうけて航行不能となる。駆逐艦「夕張」に移乗、十一月五日六時ラバウル^⑭に入港した。港内は軍艦、輸送船で溢れていた。諸隊が上陸用舟艇に移乗、続々と棧橋に向かう途中の九時三十分、戦爆連合の二百五十機余りが数波に分かれて急襲してきた。地上並びに軍艦からの対空射撃の弾幕で、空は真っ暗になり、敵機の急降下爆撃、機銃掃射をうけながら上陸する。

(5) マーカス作戦 自昭和十八・十二・十五 至昭和十九・二・四

遭難した私の第一大隊の再編が急がれたが、それにも増して前線への出勤が急がれ、新大隊長小森少佐を迎えた。私が臨時編成の重機関銃隊長に任命され、残存第二、四中隊と共にニューブリテン島西部マーカス岬に向かうため駆逐艦に乗り、十一月二十八日夜、ラバウルを出航した。

同島北岸沿いに翌朝同島イボギ^⑮に上陸して南下、同島を横断約一カ月密林内を難行軍する。既にマーカス岬に上陸していた米軍に対し、クリスマス^⑯の夜、切り込みを敢行して飛行場を奪回し、敵を岬の突端に圧迫し、押収した土工具、地雷等を利用して敵の猛砲爆撃下持久を策し、陣地を構築した。地上か

⑬ 東経一五三度 北緯八度
地点内南洋諸島の中の島

⑭ ビスマルク群島、ニュー
ブリテン島東端の港

⑮ ニューブリテン島、西南
部の岬

⑯ ニューブリテン島 西北
岸の港

らは戦車を伴い反撃してくるが、一步も退かず、地上支援の航空攻撃と共に敵は上陸兵力約一個師団の二分の一を失ったことが敵側の放送によって明らかにされた。我が陣地は弾痕と、尊い血と肉に彩られて地獄絵図そのままの苛酷凄惨の極みとなった。が、よく歩兵の本領を發揮して二カ月の間、敵の飛行場設定の企図を妨害した。

この勇戦敢闘の状況は、十九年一月及び二月の戦況上奏の際、上聞に達し、再度に渡り御嘉賞を賜る。この光栄とはうらはらに切り込み依頼、後方からの補給は絶え、戦死傷は勿論、飢餓に加えて、罹病する者が続出し、自滅の一途をたどりつつあった。このころ、方面軍全般の戦況も悪くなり二月二十四日に「ラバウル要域へ一據撤退」の命令を受け敵と離脱する。

(6) 「カ」号作戦

自昭和十九・二・二十五 至昭和十九・四・二十八

ラバウルへの撤退は陸路北海道沿いに千数百軒の原住民道を頼りに「イボギ」から補給された約十日分の食料を食い伸ばしながら開始した。数日後、前進途上の「タラセア」に米軍が上陸した^{②①}と無線で知らされる。小森部隊は敵中に孤立した。体力が極度に低下しているため、重機の搬送が苦で歩兵に同行できなくなり単独行軍となる。密林や大湿地帯で迷えばお陀仏である。私が斥候兼尖兵となるが責任は重大であった。路傍で見かける熱帯特有の色や香の強い果実は、猛毒のものが多く、食べても安全な草木魚貝に頼る外はない。飲み水や食べられるものは全て煮沸しなければならないが、マッチや調味料は絶えてない。レンズを利用して火を起こしても度々のスコールで湿った枯れ木はあっても早速に燃えな

^{①⑦} 天皇に意見や事実を申し上げること

^{①⑧} 天皇が聞き知ること
^{①⑨} 天皇からお褒めの言葉を頂くこと

^{②①} ニューブリテン島北、中央部ホルマン岬の根っこ

^{②②} 敵の情勢や地形を探り調べること

い。「ああ、白飯が食べたい」この忍苦は死の行軍と表現するしかない。全員マラリアに罹患しており、栄養失調も日増しに加わった。途上の敵中突破も交戦することなく、原住民の好意で奇跡的に救われた。撤退完了後も体力は回復せず、次々と倒れていった。

(7) ラバウル防衛作戦 自昭和十九年・四・二十九 至昭和二十・八・十四

昭和十九年二月以降、日本本土はもとより他の戦場からも完全に遮断されることになって、世界戦史にも類例を見ない方面軍という大きな組織の軍隊が一年半という長期間に渡って敵中に孤立した。ラバウル要域を堅固に保持して来攻する敵を撃滅する方針で準備した難攻不落を誇る「ラバウル要塞」を築いたが終戦となる。

(8) 戦後

夢にも見なかった生還が現実となっても、進駐してきた「濠軍」より食糧の支給を受けることはそれだけ日本の賠償金の負担が重くなる」として、一切現地自活による自給自足であった。

復員後少し遅すぎた感はあるが、兵庫を補充地とした第八十一連隊の殉国の将兵は、創設以来七年間に五千二百二十四柱を数えた。生存者が相より、姫路護国神社の神苑に御霊を招き国家保護のため戦った永劫不滅の榮譽を讃え、冥福と恒久平和を祈念して、その足跡を副碑に刻み鎮魂碑を建立した。

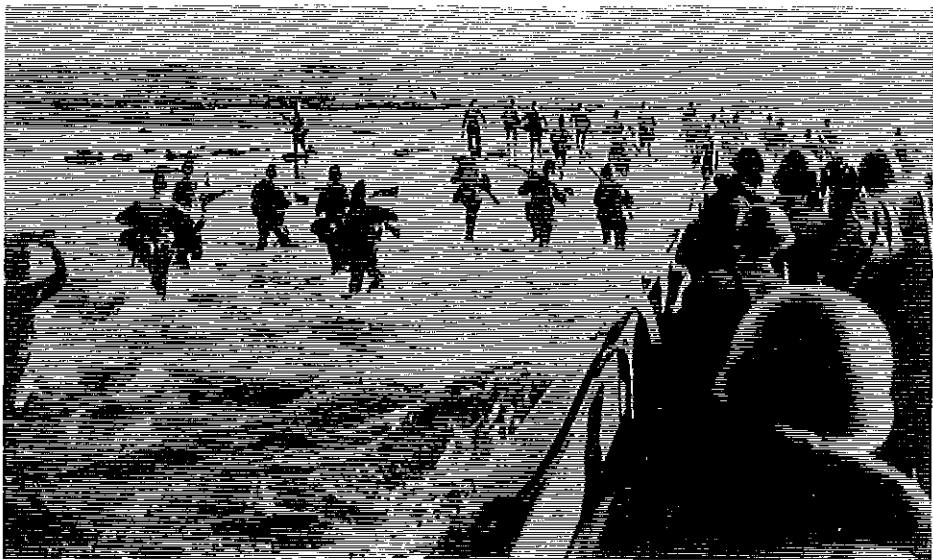
大戦は「国家の自存自衛と大東亜共栄圏確立」を旗印に、一億一心火の玉となって、その遂行に邁進した。が、戦後間もなく極東軍事裁判で戦犯は処刑された。国内は食糧不足で餓死者が多数続出し、戦

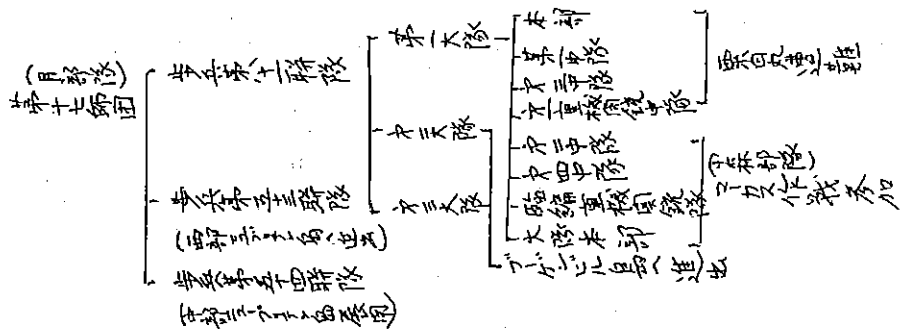
②② 法定伝染病
マラリア病原体が赤血球に寄生して生じる伝染性熱病
熱帯地方に多い

②③ オーストラリア軍

争以上の苦しみに耐えた。

とにかく、戦争は好んで起こすべきものではなく、それ以上の苦しみを産むし、食糧不足も味わいたくない。





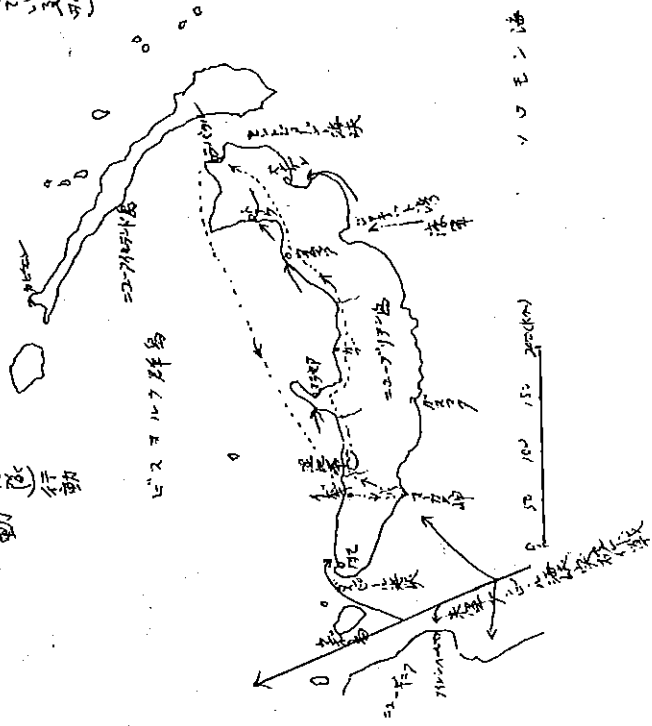
御褒賞 (注)

○ 神山参事者、統帥官、陸軍兵団と、小森部隊の勇戦は、合軍を感動させた。小森部隊の功績は、抜群なると、この内に達し、陛下から二度おはげの御褒賞を賜った。あう玉、砕かまじくは全滅したとき、に、かま、は、當時、は、破格の褒賞を受けた。

○ 歩兵聯隊誌より

小森部隊(毎連三大隊)の二ヶ所の勇戦、敢闘状況は、昭和六年五月四日の状況と、その際、二所に達し、小森部隊は、極めて困難な状況にあつた。あう玉、砕かまじくは全滅したとき、に、かま、は、當時、は、破格の褒賞を受けた。

小森部隊に、唯一の、中、森、参事、の、美、字、に、贈、る、御、褒、賞、を、賜、つ、た、と、い、ふ、話、が、あ、る、と、い、ふ、話、が、あ、る。



十二、比島沖海戦

西野々町 北田 一夫

私は、太平洋戦争が激しくなり、日本が守勢にたった昭和十八年四月第三期師範徴兵として広島県大竹海兵団に入団した。

同年七月、海兵団教育を終え、軍艦「伊勢」に乗る。当時、「伊勢」は航空戦艦に改造され、小沢機動部隊に所属していた。

昭和十九年十月、日本は攻勢に転ずべく「捷一号作戦」(敵がフィリピンに上陸した場合)命令を発動した。航空戦艦「伊勢・日向」^④空母「瑞鶴・瑞鳳・千代田・千歳」(これは六三四空で搭載機二二六機)^⑤「軽巡「大淀」^⑦と駆逐艦数隻で編成された機動部隊本隊が呉柱島沖を出撃したのは十月二十日である。

この日、小沢長官の「敵機動部隊の空襲を吸収し、これを北方に誘致、囹の任務を完遂する」と悲壮な決意表明の訓示があり、「いよいよ、決戦の時来る」と、一同別れの杯を交わし決死敢闘を誓った。

これは、レイテ作戦と言って、フィリピンを再度奪回すべく、陸海空合同の大作戦であり、当時の連合艦隊の総力を結集し、アメリカの機動隊に決戦を挑んだ大海戦である。^⑧豊後水道付近から、敵潜水艦の激しい魚雷攻撃をかわしながら、^⑩嚴重な見張りと対潜警戒のなかで大洋に出る。常に、「蛇行運動」を展開しながら進撃する。味方航空機からの連絡により、二十三日いよいよ敵機動部隊と遭遇するとの知らせがあり、艦内の緊張は極限に達する。しかし、その日は、敵の艦影を見ず、台湾の東方海上に達

① 旧制師範学校卒業者の特別な徴兵制度

② 戦艦と航空母艦の両機能を兼ね備えた軍艦
③ 敵がフィリピン、沖縄本土、北海道に夫々上陸した場合を想定し、一〇四号作戦とした

④ 飛行機を積む航空母艦
⑤ 航空母艦を中心に編成した海軍の航空隊の名前
⑥ 艦艇の種類で、戦艦航空母艦、重巡洋艦、軽巡洋艦、駆逐艦、潜水艦などある

⑦ 広島県呉(当時軍港)の近くの島で、海軍の弾薬庫があった

⑧ 四国と九州の間の水道
⑩ 敵潜水艦の攻撃から守るための警戒行動

する。一体、どうなったのだろうか。と、不安の中にも戦闘への士気はいよいよ高まってくる。

わが機動部隊の航空機は、若干の哨戒機を残して二十三日に出撃したが、翌二十四日になっても帰艦しなかった。

十月二十五日、艦隊はフィリピン・ルソン島の北東部に達した。この日は、雲一つない日本晴である。日本海々戦の「天気晴朗なれども波高し」によく似た日だった。朝七時、朝食の用意をしていると、「配置につけ」のけたたましいラッパの響き、「待ちに待った時が来た」と二番砲塔（主砲）^⑫の配置につく。食事は応急食、七時三十分頃、遙か二万メートル程の彼方に敵機の大編隊が現われ、わが艦隊に向かってくる。三十六センチメートル（口径）の主砲八門が一斉に対空射撃を始めた。敵編隊のなかに打ち込むと、対空弾は握り拳ほどの尖った弾子となって飛び散り、敵機に命中する。すると、バラバラと落ちていくのが見える。「敵は卑怯だから、少し落とされると攻撃の手をゆるめる」と教育されてきたが、なかなかどうして、勇敢にどんだん突っ込んでくる。

一万メートルぐらいになると、高角砲が一斉に射撃開始。見張員は敵の機種によって、急降下爆撃機か、緩降下爆撃機かを判断し、司令室に報告する。その結果によって艦の守り方、攻め方が異なるわけである。五千メートル位になると、機銃が一斉に火をふく。戦艦上空にスリ鉢状の弾幕ができる。敵機は勇敢にその弾幕を破って突っ込んでくる。中には火をふきながら落ちていく敵機もあるが、逃げる敵機は一機もなし。

⑪ 味方の艦艇を守り敵機の様子を見張る飛行機

⑫ 大砲（口径三十六センチの主砲）をうつ要員がはいの厚さ約十センチの鉄板の囲い

ひと暴れした後、敵機は去っていく。この一回目の攻撃で「瑞鶴」は直撃弾を受け、大きく傾いた。全員に退艦命令が出たのだろう、飛行甲板から飛び込む兵隊の姿が見える。海面で助けを求める兵隊をわが駆逐艦が救助に向かう。

午前十時頃、救助中に第二次の敵攻撃機が彼方に見えはじめた。「全員配置につけ」の艦内放送。その時、「瑞鶴」の勇姿は既に海上になく、誠に残念。その仇討ちと意気込む。味方の哨戒機は、巢をさらわれた鳥のように艦隊の上空をぐるぐると回っている。

走り回る駆逐艦に敵一機が急降下爆撃。その艦はまっ二つに折れ瞬く間に海底の藻屑と消えた。味方の魚雷に誘爆したのだろう。沈みつつ機銃から火焰をふいており、誠に悲壮な最後だった。

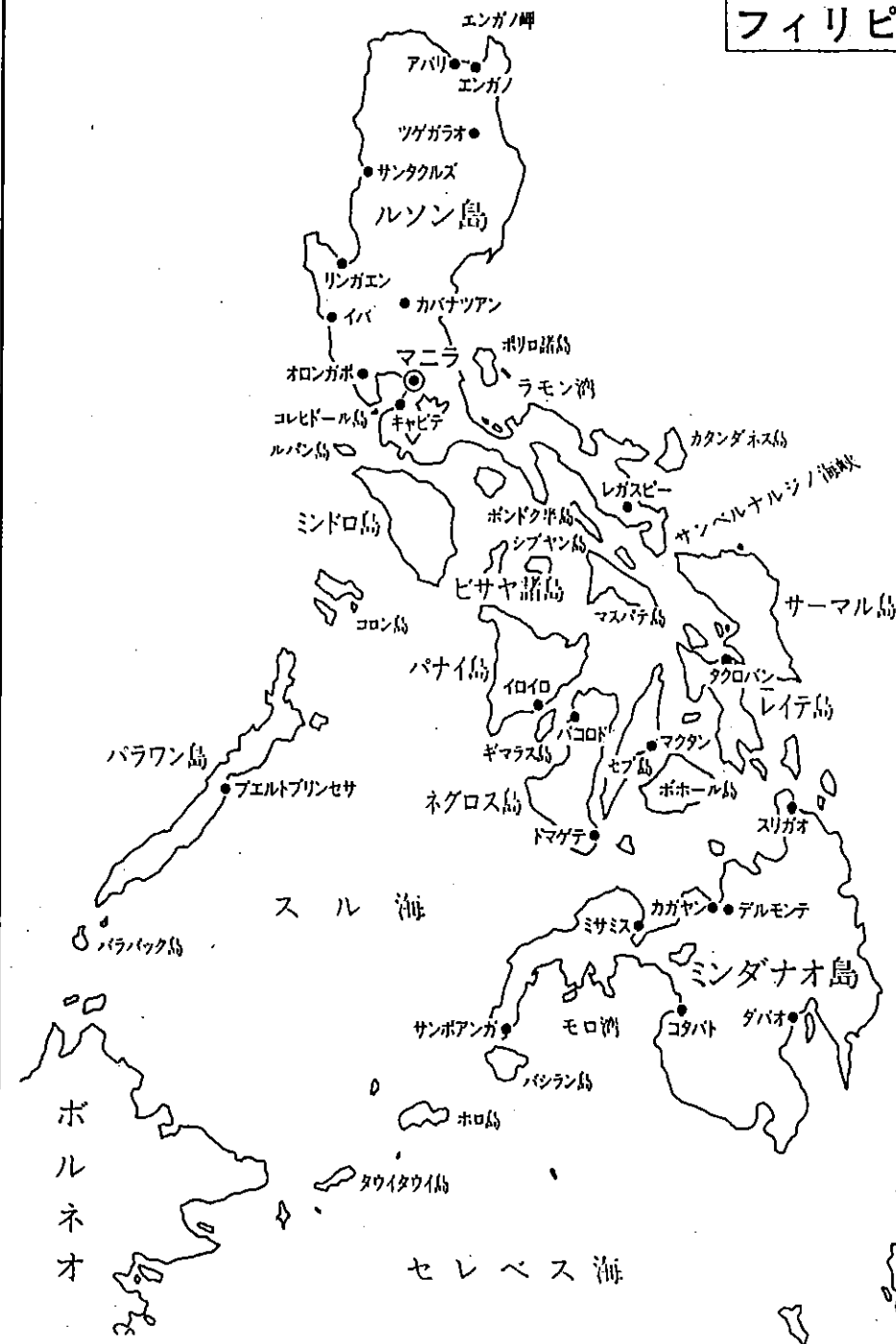
豊田連合艦隊指令長官より、「天祐を確信し、各員一層奮励努力せよ」とのZ旗が揚がる。戦闘の間は、海に泳いでいる将兵を救助し、救助者を駆逐艦から戦艦に移す。負傷者もおり、全身血まみれになり、うめき声もあちこちで聞こえる。まさに、この世の地獄である。

午後三時頃、第三次の攻撃を受ける。空母は沈み、護衛の駆逐艦も少なくなり、敵はいよいよ戦艦を攻撃目標にしてきた。わが艦の主砲・高角・機銃・噴進砲は死力を尽くして応戦する。敵の激しい集中攻撃のために度々至近弾を受け、艦底のバルジが破損し海水が入り、艦が十度近く傾き速度が鈍り、傷ついでる奮戦である。艦は傾き対空弾は撃ち尽くし、次の攻撃があれば、恐らく「伊勢」も沈み、私もこの世にいないだろうと思うが、幸い第四次の攻撃はなく日暮れとなる。引き続き南進中、夜半すぎ、

⑬ 攻撃防衛のための兵器の種類
⑭ 一番大きな大砲
⑮ 口径十二、七センチの大砲
⑯ 機関銃
⑰ 蜂の巣の様なものの一つから鉄砲の弾が出る兵器
⑱ 浸水の広がりを防ぐための空所

命令により急きよ反転、北上し、二十六日奄美大島に入港した。思い出したくない青春時代の一大ドラマであるが、この日の海戦で、若くして散った何百とも知れない戦友のご冥福を祈るとともに、悲惨な戦争は二度と繰り返してはならないと、誓いを新たにした次第である。

フィリピン





比島沖海戦伊勢の奮戦（「軍艦伊勢 下巻」より）

比島沖海戦伊勢の奮戦（「軍艦伊勢 上巻」より）



昭和19年10月25日・比島沖にて奮戦中の伊勢。米艦載機の攻撃をかわし、応戦しつつ全速で疾走している伊勢の勇姿。艦首の砲煙は1番砲塔の三式弾発射によるもの。すざましい高角砲と機銃の砲煙の中に本艦の特長である三叉状の後櫛トップマストが浮んで見える。

十三、終戦前後の思い出

南網引町 寛 精 一

「貴様達がぼやぼやしているから日本が負けたんや、馬鹿野郎。」小嶋小隊長の怒号が、飛んで来た。焼けつくような猛暑が続いていた、昭和二十年八月十五日昼頃の出来事である。

国民の前で初めて天皇陛下下のラジオでの玉音放送^①とあって、隊長以下、兵は「何事が起きたのか」と緊張し、直立不動の姿勢で固唾を吞んで聞き入る。陛下の重々しい口調で話される言葉は難しく、何の事か意味も分からず聞いている中に「耐え難きを耐え、忍び難きを忍んで」と言う言葉のなかで重大放送の意味が分かった。さっき言った隊長の怒りも理解できた。「それはそうですよ、我々兵隊でさえ随分悔しい思いで二年八ヶ月間苦勞してきたのに、これはいったい何だったのだろう」すべてが水泡に帰した感じだ。ましてや尽忠報国の精神を叩きこまれた幹部候補生出身の隊長として、持って行き場のない不満を、兵隊にぶっつけたのも当然だったかとも思われる。が、反面「これで除隊が出来、帰れる」と思ったのも事実である。

思えば昭和十七年十二月二十五日、補充兵役^④として召集令状をうけ、中部第五十一部隊、野砲隊^⑤に入隊した。この頃は勢に乗った状態で、かなり戦果を収めていたとはいえ、我が方の被害も日々目立ちはじめた。一年後位には内地の空襲が始まり、南方諸島の激戦が続いていた中で、予備役の動員も度々行われた。

① 天皇の肉声による放送

② 将来軍隊の中心人物となる将校

③ 兵役を解除される

④ 不足を補うため、国民から入隊させる兵

⑤ 野戦用の移動に便利な火砲を運び、操作する隊

あれは確か、六動員の時だったと思う。今の不利な戦局からみて、生死はおぼつかない出兵とあって、我々訓練中だった中隊挙げて姫路駅まで見送る。この時は、城南練兵場^⑥での面会があった。新婚の若夫婦、幼子の手を引いた奥さん、中には乳飲み子を抱えた奥さん、涙はご法度とは言え共に手を取り合っ
て主人との別れを何時いつまでも惜しみ、涙している光景は、今でもはっきりと頭に焼きつき離れるこ
とはない。戦争というものの惨めさをつくづくと感じた一時だった。果たしてこの人達の中に何人の生
還者がいただろうか。

十九年頃には、動員の度に配置換えがあった。幸か不幸か私たちも本土決戦に備え、突第一〇一三七
部隊として駿河湾、相模湾の敵上陸に備え、野砲陣地の構築に当たっていた。しかし、日毎空襲が激し
くなり、我々のいた近くには富士山という目標もあり、B二九が大編隊を組んで来襲する。不気味な音
をたてながら殆ど毎日のように高度飛行するのを見ており、丹那トンネルも度々狙われていたようだ。
そして、沼津も大空襲^⑧にあつて、危うく命拾いする夜だった。が、最初は映光弾^⑦で真昼のような明るさ
になり、目標を定め焼夷弾の投下となる。翌日くすぶり続ける沼津市内を見回った時の悲惨さは到底言
い表すことは出来ない。

この頃になると、あらゆる都市は焼かれており、二十年四月には敵は沖縄上陸作戦である。さんざん
痛めつけられた挙げ句、広島と長崎への原子爆弾の投下であった。

こうして振り返って見ると軍国主義のもと、厳しい軍律と、組織の力と、国のために捨て身の行であ

⑥ 現在の姫路城南の広場

⑦ 夜間、弾道やあたりのよ
うすが、わかるように火を
引いて飛ぶ仕掛けの弾丸

⑧ 高熱を出して燃える薬剤
を入れた爆弾(砲弾)

った若者達である。「咲いた花なら散るのは覚悟、見事散りましょ国の為」といった風潮のもとで多くの戦死者を出し、内地の都市は瓦礫の山と化す。私の住む小さな町でも九人もの戦死者が出ている。

二十年九月一日、現地を離れ、姫路工業高校での復員である。グマラン戦闘機が低空飛行で旋回しながら様子を伺っていた。この時いろんな噂が飛び交う。「男はキン抜きをされ、女性は暴行される」とか言いふらしていた。が、そんな事は一切なく、アメリカは紳士的である。

戦後の様子を少し記す。食料不足はその極に達し、農家は戦中、戦後も、採れた米麦芋類に至るまですべて供出制度^⑨で、飯用米以外供出する。買う日用品も大部分チケット制で砂糖、醤油にも事欠く事も度々である。食えるものなら何でも食べる。芋づる、南京の種といった具合で、食糧増産が叫ばれ空き地、河川敷、山等開墾され、さつまいも、野菜等の増産に励んだ。食糧で思いついたが軍隊時代、神奈川県民家にいた頃、ふかしたじゃがいもに塩をまぶしたあつあつを頂いた時の味だ。「こんなうまいものがこの世にあったのか」と思った。今でもあの味は忘れることが出来ない。

次に、経済封鎖があった。つまり、物資不足からくる物価高である。インフレが激しいため、平価の切り替えだ。現在使っている貨幣が使えなくなり、新しい貨幣と交換される。私はもう少しで満期になるという生命保険の掛け金がいなくなった。これは、随分と惜しい思いをした。

物価の急上昇により、金より物の時代になり、品物さえ持っていれば高価で売れる。こういった風潮の中で三宮のガード下のヤミ市でスーツを買った。これは、今でも持っており、見るたびに当時の混乱

⑨ 民間の物資を法定価格で政府に売り渡すこと

⑩ 一国の貨幣の対外価値を切り換える(引き下げた)

した世相が思い出される。

これといった娯楽もなく、映画を観に加古川や神戸の衆楽館へよく行った。その時、新開地近くに駐屯していた進駐軍兵士が、カマボコ形の丸い屋根の宿舎へ出入りし、ジープで走り回っている姿は『かっこ良いなー』と思ったものだ。そして、神戸へ行く交通機関は、加古川までは定期バスである。

加古川神戸間は蒸気機関車で引っ張る汽車である。

この汽車はいつも超満員で乗車率は百五十パーセントといったところでしょうか。デッキは勿論のこと、屋根の上までも人を乗せて走り、降りると、真っ黒な顔になる。

最後に戦中、戦後の体験をした私達。今の生活から振り返ると夢のようで、この平和がいつまでも続く事を願うものである。



① 神戸電鉄、湊川駅近くに
あった娯楽施設

十四、いくさ（軍隊）の軌跡

桑原田町 菅野重雄

(1) はじめに

昭和二十年（終戦）五月、朝起きて間もないのに、警戒警報があつた。この日は朝から、警報と解除が繰り返され何も手つかずに過ぎてしまった。昼飯の直後、またまた警報でうんざりする。辟易気味で敏捷な行動もとれず防空壕へと移動し始めた。当市の場合には主に米機は西方からの進入が多く、大空に大きく弧を描き機銃掃射の上、遁走していく皮肉さだ。当市もようやく爆撃圏内に入ったのか、米機をみるようになった。飾磨港よりの艦載機、また、偵察機の望見はたまたまあつた。明石の空襲（一月十九日）につづき三月十四日～十八日阪神地方は空襲に遭つた。

四月に入って再度警報の発令があり、六月には厳しくなり、七月三十日には九会小学校（現、亀岡産業（株）第2、第4校舎も被弾して大破したが、教員及び生徒には被害がなかった。老兵にとれば綱渡りの跡でひとしおの感慨にむせぶのである。

今日、この頃、戦争を知らない世の中で、過去にあった戦争は忘れられようとしている。だが、戦争の犠牲者は多い。大多数の国民が、肉親や身近な人を失い、心に深い傷跡を秘めている。戦争は二度と起こしたくない。軍国主義は悲惨な結果をもたらした。今さら戦争のことなど思い出したくない人もあろう。戦争に散ったわれわれの祖父や父、兄を忘れてはならない。戦争を起こした指導者（戦犯）に罪

① 敵機が襲来して来ているので、注意し用心するよう前もって人々に知らせること。（空襲警報は、頭上に敵機が襲来した時）

② 飛行機上から機関銃を広角度にうって相手をおしはらうこと

はあっても、これらの人達（祖父、父、兄を指す）に、なにの罪があろう。

我々は、幾百万の戦死者の尊い犠牲の上に立っている。自分たちの妻や子を愛するのと同じように、郷土（加西）を思い、国の為に戦った人達、祖国の繁栄と妻子また子孫の安全と幸福の為にと信じて身を捨てて戦ったのだ。戦場は広大であった。中国大陸、太平洋の島々で、南方戦線でいかに戦ったか。当市出身一、七―四名の戦没者は、どんな苦戦を強いられたか。どういう戦果をあげ、どんな最後を遂げたか、我々は人知れずみ黜（いさお）の陰にかくろい、感謝の念を持ってこれら勇士の霊に冥福を捧げたい。（因みに小生編著の「郷土の魂」参照）

(2) 軍のしきたり

この度は市内の情報他者に譲り趣をかえて、持ち合わせの資料を整理してみよう。

日本の軍隊の誕生は明治に逆上る。明治五（一九七二）年一月二八日明治天皇によって全国徴兵の詔が発せられた。国民は兵役の義務を負い、男子は年齢一七歳より四〇歳までは兵役に服する。徴兵検査があり、この結果一定の基準によって四種に分けられる。現役に適する者、国民兵役には適するが現役に達せない者、全く兵役に適さないもの、判別しにくいもので、常備、後備、補充、国民兵役に区分された。現役に達する者は、身長一、五メートル以上で身体強健の者、体格に応じて甲種、乙種合格が宣言される。それに次ぐ体格の者は丙種として国民兵役に服する。

検査が済むと、現役兵として徴収されたり、補充兵として召集され教育訓練を受ける。現役は陸軍が

③ 旧兵役法のもとで徴兵適齢（20才）の男子を召集し、兵役に服する資格の有無を身体及び身上にわたって検査する

二年、海軍が三年、予備役は陸軍五年四ヵ月、海軍四年などとなっていた。いったん有事の際にはそのまま、あるいは召集されて戦地へ出征する。兵役はあらゆる物に優先した。個人の生活や感情は無視され、好むと好まざるにかかわらず戦場へ駆り出された。

⑤ 「赤紙」という召集令状を受けると、背広や野良着を軍服に着替える。妻子や職場を捨てて、「お国のために銃をとる」という一切に優先する命令であった。

「『応召のため鉄道、船舶を利用するは妨げなし』といえども戦時に汽車汽船に乗ることあたわざること多きをもって、たとえ汽車汽船に乗ること能わざる場合においても、指定の日時に到着し得る如く注意すべし」という厳しき、「汽車や汽船をアテにするな、遅れぬように早めに来い」というわけ。

旅費は半額割引がある。理由なく遅れるとうるさかった。病気のものは医師の診断書がある。交通事故の場合は、駅長、警察、憲兵⑥、それに市町村長の証明を必要とした。戦争は、当市からも沢山青壮年を動員した。海軍は呉海兵団、陸軍は大坂、姫路の師団に入隊した海軍は軍艦、陸戦隊、航空隊にも入隊する。陸軍は、郷土の結びつきが深く、はじめは薩摩、長州、土佐の三藩から、いわゆるご親兵⑦（近衛兵）を徴集し、次いで東京、大阪、鎮西（熊本）東北（仙台）に四鎮台を設けた。その後は先進諸国にない軍隊を急速に強化した。

明治二十一（一八八八）年大阪鎮台を改編して、大阪の第四師団が編成された。さらに、明治三〇（一八九七）年には姫路に第十師団が新設され、師団司令部を置き、歩兵第三十九連隊のほか、野砲、騎

④ 戦争または、事変などのおこること

⑤ 赤色の紙を用いたからいう。軍の召集令状

⑥ 軍事警察を掌る兵科軍隊に関する行政警察、司法警察をも掌った

⑦ 君主などが護衛として手に備えおく兵

兵、工兵、輜重の各十連隊があった。

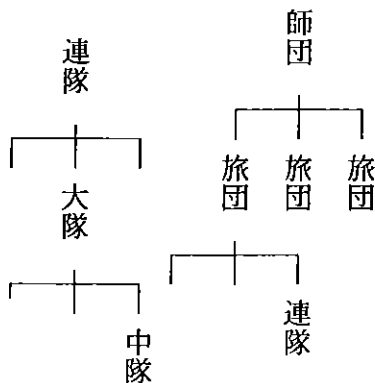
一方、大阪師団には、篠山に歩兵第七十連隊が誕生した。特に篠山七十連隊と、姫路第三十九連隊には、祖父、父、子と三代に渡り入隊した一家もあった。めでたい限りだ。

大阪第四師団^⑧には、第七旅団と第三十二旅団管区があり、大阪歩兵第八連隊、篠山歩兵第七十連隊の連隊区があった。第三十二旅団^⑨には、堺の三十七連隊、和歌山の第六十一連隊区があった。県下の青壮年は、水上、多紀有馬、川辺の各郡が篠山七十連隊、淡路の三原、津名二郡が堺の第三十七連隊に入隊した。

このほか、大阪師団管区には、騎兵、野砲の第四連隊があり、深山重砲、高槻工兵、輜重、軍楽隊、由良の要塞砲大隊などがあった。たまたま連隊区^⑩はその後変更し、淡路島が大阪第八連隊に変わり、のちに神戸連隊区となった。

(3) 大阪 姫路基幹に

神戸市や美囊、武庫、明石、加東、加西、印南、多可、加古の八郡は、はじめ神戸連隊区であったが、のちに姫路三十九連隊区に変わった。一方、姫路市、神崎、宍粟、飾磨、揖保、佐用、赤穂各郡は姫路の第十連隊に属していたが、のちに神戸連隊区が篠山七十連隊に移る。姫路は第三十九連隊区に変わった。姫路にあった歩兵第十連隊は岡山に移った。但馬の出石、朝来、城崎、養父、美方の各郡は、福知山の第二十連隊区に属し、姫路の第十師団に属していたが、のちに鳥取の第四十連隊区に変わった。



⑩ 旅団の下、大隊の上

⑧ 陸軍部隊の一司令部を有し、独立して作戦する戦略単位、旅団の上に位置する
⑨ 陸軍部隊編制上の単位の一つ、師団の下、連隊の上

とにかく県下の将兵は、大阪第四師団、姫路第十師団を基幹として戦線に出勤した。とくに篠山の七連隊、堺の三十七連隊、姫路の第三十九連隊、鳥取四十連隊は、郷土との結びつきが深い部隊であった。戦争が始まると平時編成の軍隊は急速に増加した。特に太平洋戦争での師団数は百七十二師団にのぼり戦線の拡大と共に充実された。

第一次大戦のシベリア出兵後の宇垣軍縮で廃止されていた岡山の第十七師団が、昭和十三（一九三八）年四月姫路で再編成され、さらに六月には第一一〇師団が新しく編成された。

姫路第一〇師団が満州へ永久移駐と決まった。昭和一五（一九四〇）年七月には姫路に第五四師団が新設された。このほか八四師団（一五年七月）、続いて第三五五師団（昭和二〇年七月）が生まれた。

大阪でも二五師団、三四師団、四四師団、一〇四師団、二二五師団などが編成された。また内地以外でも朝鮮（現韓国）龍山^⑪に新設された第二〇師団、中国の九江^⑫で編成された六八師団、昭和二〇年に京城^⑬で生まれた九六師団があり、いずれも兵庫県出身の将兵で所属され勇戦した。

(4) 大陸 南方に転戦（終戦）

大東亜戦争は、真珠湾攻撃より前にすでに中国大陸でその火蓋は切っていた。満州事変、日華事変がそれであった。先ず姫路の一〇師団で動員令が下った。蘆溝橋^⑭の一発の銃声で大陸に火がついた。八月一〇日一〇師団は神戸より輸送船に乗った。師団長磯谷廉介中将は基幹部隊の姫路の歩兵第三九連隊、岡山の一〇連隊、鳥取の四〇連隊を率いて内地師団の大陸一番乗りをやった。

⑪ 現在のソウル南東部の特別区で龍山区

⑫ 中国江西省北部の都市揚子江の南岸にのぞむ河港

⑬ 大韓民国の首都現、ソウル

⑭ 中国北京の南郊口蘆溝河上に架せられた橋

第一〇師団は徐州会戦に勇戦、その後満州で再編成、台湾から比島^⑮に転戦しルソン島、ピナガン地区で終戦を迎えた。また、大阪の第四師団は北満警備から、中支作戦に活躍、比島バタン半島攻略戦、コレヒドール占領で名をあげ、その後、スマトラから南方総軍の予備軍としてタイ国へ移駐、ここで終戦を迎えた。

姫路で再編された第一七師団は（昭和一三年）中支へ進撃、江南、溪水、予南作戦を経て蘇州徐州、上海へ移り、さらに南方のニューブリテン島ラバウルへ転進、五次にわたるビスマルク作戦などで苦闘し、終戦まで戦い抜いた。新設の姫路一一〇師団も北支で活躍し、京漢作戦、老河口作戦と最後まで不敗を誇る師団として勇名を轟かせ洛陽付近で停戦した。

姫路一〇師団は満州に移駐する。代わりに新設された第五四師団はジャワからビルマに転戦した。インパール作戦の頃、インド国境付近まで進撃、友軍援護で大撤退作戦のしんがりを務めて奮戦したが、この間に終戦の報を聞いた。第二五師団は、篠山の第七〇連隊が第四師団から引き抜かれて所屬していた師団で、ソ連国境にあったが、後、本土決戦に駆り出され、九州、宮崎県の山中で決戦師団と期待されたまま終戦を迎えた。

大阪の第一〇四師団は、広東攻略作戦に参加、バイアス湾敵前上陸など南支で活躍した。この師団に属していた篠山第一七〇連隊は、その優秀さを買われて南方軍直属の部隊に引き抜かれた。後、ハノイ付近にいて独立混成第二旅団に編入され、大本営直轄となり、困難なニューギニアのブナ地区で死闘、

⑮ フィリッピン群島の略

殆ど玉砕の形で終戦を迎えた。

朝鮮（現韓国）の竜山で新設の第二十師団は、ニューギニアのウエワクに上陸、アイタベ攻略戦の主要を努め、アレクサンダー山脈の中で、終戦の運命となった。

この他、姫路で編成の八六師団は、関東よりの本土決戦に動員され、第三五五師団も本土決戦に備えた。四四師団や二二五師団も最後の本土防衛部隊となった。

また、大陸各地に転戦した第三四師団、六八師団は済州島で終戦を迎えた。

以上、郷土部隊の最後を拾ってきたが、市内出身者で編成した部隊で千余名の犠牲者を出したが、生存勇士は不屈の心を持っていた。

(5) おわりに

最後に、当県出身の軍人として有名になった人も多い。姫路第一〇師団を率いて大陸一番乗りの磯谷廉介中將も、丹波篠山の出身。終戦時、抗戦継続を叫ぶ陸軍過激分子を叱り、帝都を混乱から救い、ピストルで自決した東部軍管区司令官の田中静彦大將は龍野市の出身。このほか、元東部軍司令官の藤江恵輔大將、香港占領地総督として戦犯処理役田中久一中將、元関東防衛軍司令官の本郷義夫中將、元陸軍燃料本部長秋山徳三郎中將、元支那派遣軍総參謀長の小林浅三郎中將、元レイテ島第一師団長、片岡薫中將も兵庫県の出身である。

一方、海軍では元神風特攻隊の創設者といわれ終戦後自刃した大西滝次郎中將がいる。丹波は氷上郡

⑩ 神の威徳によって起こるという風。特別攻撃隊の略称。太平洋戦争中、体当たりでの自殺的な攻撃を行った日本の陸海軍の部隊

芦田村（元青垣町）の生まれで、マキン、タラワの玉碎で有名な最高指揮官柴崎敬次少将も加東郡東条町の出身である。元連合艦隊参謀長や軍務局長を努めた鈴木義一中将は神戸市の出身。ラバウルの南東方面艦隊指令長官の草鹿任一中将も少年時代を神戸で過ごした。尚、従兄弟の元連合艦隊参謀長だった草鹿竜之介中将も宝塚に居を構えていた。

戦時報国債券
 (戦時中資金調達のため、国家が発行した有価証券)

戦報8 戦報8

附 票 回八第 時取 (集 団 拾)

金 増 割 120/組 06167

附 金 増 割 戦 時 報 国 債 券

昭 和 十 八 年 四 月

株 主 日 本 勤 業 銀 行

120/組 06167

拾 金 圓

此ノ債券ハ此ノ時資金調合法ノ規定ニ基キ發行シタルモノニシテ債券ノ賣出ニ依ル收入金ハ大蔵省預金部ニ於テ運用スルモノナリ

大東亞細亞火災海上火災保險株式會社



證券保管請求書

戦時報国債券 第8回

120/組 06167

券面金額 10圓

貯金通帳
 記帳番號
 交付日附印

預ケ人氏名

※

戦報8

證券保管證

戦時報国債券 第8回

120/組 06167

券面金額 10圓

貯金通帳
 記帳番號
 保管日附印

預ケ人氏名

※ 殿

戦報8

十五、私の青春時代

東笠原町 三宅 席 男

(1) 軍事色強まる

私がやっと小学校を終えた昭和六年に、我が国の関東軍の謀略によって、南満州鉄道柳条湖で路線を爆破し、満州事変を惹起した。昭和七年の五、一五事件、同十一年の二、二六事件と、次々と不祥事件をおこした。その度毎に軍部が台頭した。昭和十二年我が陸軍は、性懲りもなくまたまた蘆溝橋で戦争を仕掛け、北支事変へと徐々に中国全土に戦火が拡大しつつあった。国内では軍事色が愈々濃くなって高等小学校を卒業すると青年学校と称して週何回か夜間に専ら軍事教練を受け、一步一步兵隊に近づいていった。世間では「徴兵検査を受け、兵隊に行つてはじめて一人前の男子だ」と言われていた。

(2) 徴兵検査と志願兵役

私は十四年に徴兵検査を受け、機を見て私一人決然として前に進み出て、かねてからの思いを込めて「海軍機関兵を志望します」と申し出た。一世一代の大演技だった。熱意が認められて昭和十五年呉海兵団に入団し、四等機関兵となる。その年に東条内閣が成立する。軍部は野望を露にして、北部佛印に②進出、日本に石油重要物資の禁輸措置をとるに至らしめた。海兵団は海兵の基礎教育の場所。四ヵ月余りの間に機械の勉強の他に、軍事教練を一通りこなすのだから大変である。無我夢中で過ごした自分を③取り戻すのは、夜ハンモックに入つてからだけだ。小銃や拳銃を手にしたのも、実弾射撃で弾痕無しと

① 日本陸軍の関東州及び満州にあった諸部隊の総称、明治三十八年南満州の特殊権益擁護のために設置し、その後我が国の満州支配の中核的役割を担った

② フランス領、印度支那の略 現在のベトナム

③ 柱の間や樹陰に吊るし寝床に用いる編糸製の網

出たのも、海軍生活でここだけだ。野外演習に出て野営の夜食に出たたなごころより大きいような大福餅のおいしかったことなど忘れられない。ある日軍港内にカタター訓練に出て、在泊の艦艇の偉容さに胸躍らせた。既に進水艤装中の戦艦大和があまりにも大きいので、遮蔽物から大煙突や艦橋の一部が中空にはみ出して異様に見えたのが、印象に残った。航空母艦「鳳翔」で艦務実習を終え、巡洋艦「熊野」に配属が決まった。当時の「熊野」は我が海軍では最新鋭の軽巡^⑤で、排水量七千五百屯、十五糎三連装砲五基、六十一糎魚雷発射管四基を装備し速力三十五ノットで重巡に匹敵する性能を誇っていた。「こんな優秀な艦に乗れるなんて願ってもないことだ。」と胸膨らませて乗艦して目を見張った。二連装二十砲五基十門が天を睨んでいる。凶体も大きく感じる。世間が知らない間に「熊野」「鈴谷」「最上」「三隅」の四隻は排水量一万二千五百屯の重巡に变身していたのだ。花嫁修業四ヵ月半の娘が結婚式に出ると予め聞いていたよりハンサムで健康そうな感じの主人にめぐり会った感じだった。

(3) 飛行機、艦の大改造

例のワシントン条約失効に前後して海軍では窃かに古い軍艦の殆どが近代装備に大改造、改装された。改造後、十メートル以上長くなった艦や、一万屯も排水量が大きくなった戦艦などが出現して、開戦前には面目を一新していたようだ。戦前(十四、五年)航空戦を予見して潜水母艦「大鯨」をはじめ水上機母艦「千歳」「千代田」を空母に、同じく「高崎」を建造途中から空母「瑞鳳」にと、特務艦から航空母艦への大改装が相次いだ。開戦後は大型豪華客船を改造して樫原丸(隼鷹)に、鎌倉丸をはじめ数

④ 船体が完成してから、航海に必要な一切の装備を整えて就航に至るまでの工事の総称

⑤ 小型の巡洋艦の略

⑥ 大型

⑦ 潜水艦に燃料の糧食などを補給し、潜水艦乗組員の休養施設を有し、または、潜水艦隊の旗艦となつて誘導の任に当たる軍艦

⑧ 水上機を搭載する航空母艦の一種、飛行甲板がなく飛行機の発艦はカタバルトによって行う

多くの客船が空母や輸送空母に改造された。中でも改造の最たるものは、空母「信濃」だろう。この艦は「大和」の姉妹艦として横須賀で建造中だったが、戦争の様相が一変して戦艦不用論まで出て大空母に改装された。捕鯨船が大型輸送艦。キヤッチャーボートが哨戒艇になって大活躍。捕鯨船「日新丸」「円南丸」も度々見かけて感激した。飛行機も同じで戦前、世間を沸かせた訪欧親善飛行を実現した朝日新聞社の神風機は、九十七艦攻となって真珠湾攻撃から大活躍した。世界一周親善飛行の壮举をなし遂げた毎日新聞社のニッポン号は、九十六陸攻となって中国戦線に渡洋爆撃を敢行する。この機種は太平洋戦争緒戦にマレー沖に英戦艦二隻を一举に葬って勇名を轟かせた機種で、戦争と平和は紙一重との見方が出来る。

(4) 南方への進攻

「熊野」を旗艦に姉妹艦四隻は、第七戦体を編成して台湾の高雄、馬口へ、後には海南島三亜を前進基地とする。そして、東支那海はもとより南支那海、南方海域へと我が軍の南進作戦を支援して俊速を生かして奮闘する。昭和十六年七月、遂に南部佛印コタバル、サイゴンに我が輸送船団を護衛して無血上陸を成功に導いた。これは、よかったが、アメリカはこれを契機に日本に対して石油を含めて重要物資の禁輸措置に出るとともに、日米戦の腹を決めたと言われている。

(5) 巡洋艦「熊野」乗艦

「熊野」に乗艦と同時にカッター部員に選ばれた。何も分からないまま、この道に入ったが、これが

⑨ 捕鯨母船に従って捕鯨に従事する船

⑩ 敵の襲撃に備え、見張りをして警戒する船

大変なことで朝、皆より早く起きてカッターの練習に寒中でも汗を流し、食事の前に帰艦するのが日課である。この時点ででたくたに疲れていたが、そのまま自分の持ち場に就く勤務が繰り返されたのは辟易した。惚れた弱みと思い直したがやはり辛かった。手のまめは潰れる尻の皮膚が爛れて禪について剥がすとき思わず涙が出た。痛さの所為だけでなかったのだろう。

(6) 海軍工機学校入校

在艦一年で十六年九月海軍工機学校を志望して「熊野」退艦、横須賀に入校する。十二月八日太平洋戦争に突入する。前線の兵隊に負けじと勉強に熱が入った。学校の隣が軍艦「三笠」の記念艦でいろんな人が見物に来るのでフェンス越しに懐かしくも思い、異国の人を見るようにも思った。昭和十七年十月同校を卒業する。

(7) 軍艦「日向」乗艦

軍艦「日向」に乗組が決まり、呉に向かう。当時「日向」は桂島にいた。桂島泊地は呉湾に隣接し、お互いに見えず、周りを島に囲まれた天然の要塞の海域だった。「日向」などの大型艦艇は敵の雷撃に備えて艦の周りに防潜網を張りめぐらせて厳然と横たわっていた。乗艦といっても呑まれた感じだ。

十二門の三十六糎砲、高い艦橋、艦腹も広く大きなバルジを持ち、ハッチを見てもアーマ鋼板の厚さに驚くばかりだ。艦が巨大なので乗組の私達が弱く、小さい存在に見える。「日向」は第二艦隊の旗艦で、司令長官が座乗しておられた。そのためでもないと思うが、艦内風紀が厳しいのが伝統的で「伊勢」

① 敵の潜水艦の行動を妨げるため、港湾の入口などに張る網

の電機か「日向」の缶か、いっそ海兵団で首吊って死のうか」と、昔は歌われた様だ。^⑫「月月火水木金」開戦とともに益々猛訓練に入った。朝は早朝訓練、夜は夜間訓練、時々「配置に付け」のラッパで自分の受持ちに駆けつけて戦闘訓練と、文字通り訓練に明け、訓練に暮れる始末で閉口した。が、皆が前線を思っ堪えに堪えた。四月には東京初空襲で戦局にも陰りが見えはじめ、六月ミッドウエー海戦で惨敗する。我が海軍「虎の子」の空母を四隻も失うに至り、大本営も国民の動揺を恐れて過少発表に終わった。が、後々辻褄が合わなくなった。この時、「日向」は長駆してダッチハーバー作戦に参加し、後方支援を完遂して桂島に帰着する。十八年春、門海西部で戦技（実戦譜の演習）中「日向」の五番砲塔が暴発し百名近い戦死者を出す痛ましい事故が発生した。軍艦の搭載火薬の恐ろしさを知る。これを機に「日向」と「伊勢」は五、六番砲塔を撤去して、格納庫と飛行甲板を造り、カタパルトを装備する大改造をして「伊勢」と共に航空戦艦として生まれ変わった。対空砲火も充実して水上機を二十機積む筈だったが、最後まで飛行機が揃わなかった。十八年六月八日桂島に停泊中、突然、戦艦「陸奥」の三番砲塔火薬庫が大爆発を起こし、沈没する。そのため多数の将兵も艦と運命を共にする大事故が発生した。が、軍は報道を禁止して国民に知らせなかった。「陸奥」は「長門」と共に四十糎砲を八門積んだ艦では世界の軍艦でも数少ない艦で、我が海軍の損失は実質的に大きい。戦死した乗組の将兵も、敵に向かつて一発の砲弾も撃つことなく、内海に空しく姿を消した。空しさは、断腸の思いだったろう。

(8) 横須賀工機学校入学

^⑫ 一週間全く休日がなく働
きづめることで、土曜日、
日曜日が無い

^⑬ 戦地で実際に戦闘するの
と同じようにして演習（練
習）すること

昭和十九年五月またまた志望して、高等科機関術練習生として、横須賀工機学校に入学する。前線の戦友の奮戦に励んで勉強に打ち込んだ。この間にも六月にはマリアナ沖で、我が機動部隊が戦勢挽回を期して攻撃を仕掛けた。が、大部分の飛行機と空母を失って大敗を喫した。十月遂にレイテに米軍が大挙して上陸を敢行したが、我が方にはこれを阻止する海空軍力を無くしていた。工機学校の卒業時に八重桜の特技章を付けて昂然として呉に帰ってきたが、乗る艦が無くなったのか随分海兵団で待たされた。

(9) 駆逐艦「桜」乗艦

やっと横須賀工廠で艤装中のT型駆逐艦「桜」に乗艦する。「桜」は千五百吨の小型駆逐艦で、全く新しい構造で小型乍ら対空、対潜攻撃力と防御力共に強く、頼り甲斐のある艦だった。新しい艦に初めての乗組で、機関に精通した者は、一人もない。だから、まるで若い母親が初産の子供を育てるようになった。引渡しを受けてから十日余りの日時しか許されなかった。一隻の小型駆逐艦と言えども、一大戦力として渴望されているのが、ひしひしと伝わってくる。東京湾を出ると、つい庭先のような海面だが、当時は既に敵の潜水艦が跳梁して油断出来なかった。が、無事呉に投錨した。

(10) 空母「信濃」の沈没

後日知ることになったが、大型空母「信濃」が「桜」より十日程前に、潮岬の南方海上で敵潜水艦に沈められていた。私と「信濃」の出会いはこの二ヵ月ほど前、工機学校高等科から「信濃」の艤装の一部

を受けもってナットの一個にも願いを込めて締めた思い出のある艦だ。甲板士官が『「信濃」は世界で初めて飛行甲板に装甲を施した世界唯一の浮沈空母だ』と得得として話してくれたのが忘れられない。潜水艦の魚雷を四本受けたが、さすがに航行に支障のない程度の被害だった。が、徐々に浸水して遂に横転沈没するに至った。乗組将兵の訓練不足で手をこまねいていたのか、自艦は沈まないととんだ過信をしたのか、一発の大砲も、一機の飛行機も飛ばすことなく伊予灘深く没した。「信濃」に関しては一枚の写真も残しておらず、悪夢を見たような気持ちしかない。桂島に帰った「桜」はその後の訓練で練度を上げて、上海、汕頭方面に出撃し、陸軍を支援した。上海から最後の引き揚げ船団を護衛して二十年三月、呉に帰投した。同五月舞鶴方面への回航の途次、下関海峡通過中敵機が投下した磁気機雷に蝕雷し、舵取機の故障で呉に引き返した。この頃、瀬戸内海も安全水域ではなくなっていた。五月八日ドイツが無条件降伏し、七月一日に「桜」退艦し、防府の通信学校に転勤、同日呉大空襲を受ける。

⑭ 予科練を連れて、山口県下大島柳井方面で、松根油採取作業を手伝うが大きな乾溜釜から滴下する松根油を見て「松根油の一滴は血の一滴」の感を深くした。ある日、B二九が投降勧告ビラを投下して飛び去った。私たちの採取した松根油もおそらく特攻機に届かなかっただろう。

(11) 終戦（山口県柳井）と復員

終戦を山口県の日本海側柳井で迎えた。涙も涸れてしまって出なかった。復員は早かった。客車がないので、無蓋車の石炭の上に腹這いになって乗っていた。この石炭も食物も充分無い中で空襲下よく頑

⑭ 予科練習生の略

⑮ 松の根から油を採り、飛行機の燃料とした

張ってくれた炭坑戦士の汗と涙の産物だと、感謝した。広島駅に着いたが、駅とはいえ枕木を組んだ上にレールを敷いて汽車が止まっている。隣の線は焼け爛れて外殻だけ残した車両が一編成あるだけで、広島駅の建物も施設も何一つなかった。街は全く焼野原で遠くの山だけが青かった。「原子爆弾」たった一発の威力の大きさに驚いて息を呑んだ。駅前で大きな荷物を背負った復員兵が道を尋ねている様子だったが、恐らく我が家は焼失していただろう。せめて家族が何処かで無事でいてくれたら、と祈った。我が家が一段と恋しくなった。

(12) 戦争懐古

太平洋戦争を懐古して想う。開戦前に大本営陸軍部でアメリカの戦力を詳細に調査検討しているのを見ると、海軍力三対五、石油生産量一対七百二十一、鉄鋼一対八〜二十、飛行機一対五、船舶一対二等々アメリカ一国に連合国を加算すると膨大な物になって彼我が戦力は比較にならない。南方の資源を入れても即戦力は無理で、これで勝因があったのか「敵を知り、己を



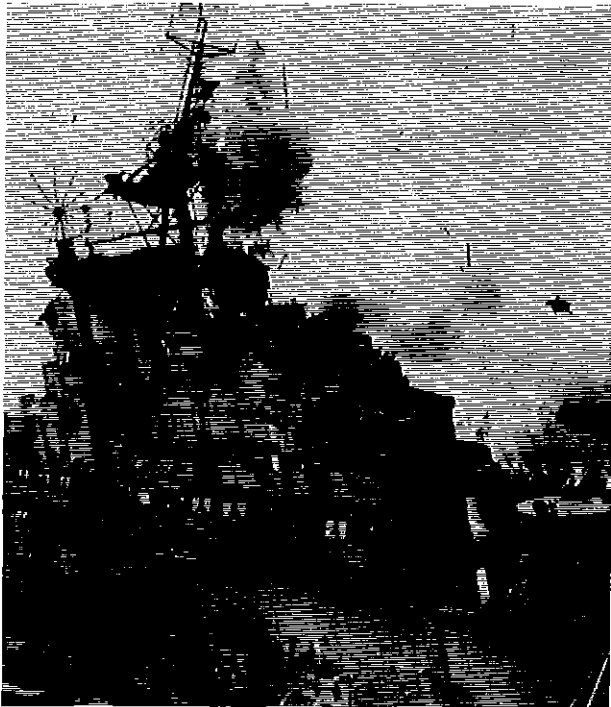
復員として家族と喜びの再会

“ 決定版 昭和史 ” 毎日新聞社刊より転載

知らば百戦危うからず」と「窮鼠猫をかむ」と言っても最後は四匹の猫が勝つのは明らかである。この情勢の下に軍部は全く「とうろうの斧に向かう」が如く、開戦に踏み切ったもので、私にとっては今でも謎として消えない。初戦の真珠湾で奇襲が成功して大戦果を挙げたが、三次攻撃を執行して石油基地を含めた軍事施設も攻撃して止めさせるべきではなかったのか。海軍の相撲部で「押さば押せ、引かば押せ、押して勝つのが相撲の本領」と言われていたので残念だ。空母を取り逃がしたのと「真珠湾を忘れるな」との痛い禍根を残す事になった。戦前の海軍は独自に新しい技術を開発し、民間技術も吸収して造艦技術は勿論、科学技術も、惜しみなく取り入れて「軍艦一隻一隻が先端技術の結晶だ」と自負していた。だが、なぜか戦争になるとエレクトロニクスの面で数段後れていたと認めざるを得ない。が、今日の日本を見るとその頃、この面には十分な資質があったのではないか。この面で「人と知能を動員したら、惨めな結果にならずに済んだものを」と対策の遅きを惜しむ。因みに敵は昭和十九年六月十九日のマリアナ沖海戦でレーダー射撃装置を使用する。砲弾はVT信管を使った。この信管は「発射された砲弾が目標から十五米の距離に接近すると弾頭内のこの電波信管が感応して自動的に爆発せしめ、破片を広範囲に飛散せしめる。」我が軍の高角砲の二十倍の威力をもっていた。腹立たしい限りだが、日本軍機がよく落ちるので「マリアナの七面鳥打ち」と歓声を挙げたと言う。これで西大西洋の制海権は米軍の手にはいった。十月二十六日栗田艦隊はレイテ湾に突入して、湾内の敵艦艇輸送船を撃滅し上陸部隊を追い落としてフィリピンを守る任務を負ってレイテ湾に向かう。一方では、小沢艦隊は敵主力

艦隊の誘導に成功して、レイテ突入の好機との電信を発信したのにもかかわらず「受信しない」という。その上、敵機動部隊発見の誤報を確信して、レイテ湾頭敵艦艇を目前にして北方に反転したものだ。だから、敵に遭遇する筈もなく戦場を離脱してしまった。実に愚劣極まる行動で、我が方はもとより敵も啞然としたらしい。「勇卒の上に弱将」があった四艦隊の生存者の嘆き声が聞こえてくる様だ。陸軍も負けず劣らず謎のような戦争を演出した。先ずノモンハン事件がそれである。中国戦線が膠着状態にありながら、ソ連に戦いを挑んだ。「二兎を追うものは一兎も得ず」のとおり勝敗は明白で惨敗を喫した。ビルマ、インパール作戦も同じで、部門の智将の進言を退けて十分の一に満たない糧食や弾丸で敵地に追いやるように軍を進めた。が、食糧弾薬が欠乏し、インパールを包囲しながら退却するに至る。道々全滅に近い戦死者を出して完敗した。「腹が減っては戦が出来ぬ」のことわざのとおり。ガダルカナルでも全く同じで軍人精神で腹を満たす事も出来ず、精神力をもって砲弾にかえ、敵をおどす事は出来なかった。戦時中「米英恐るに足らず」「我れには無盡蔵の精神力あり」と国民に向かって獅子吼した将軍が良心の呵責に堪えかねたのか、ピストル自殺を計って死に損じる醜態を演じた。が、「武士道とは死ぬ事と見つけたり。」常時、死の覚悟が出来ていなかったのか疑わしい。軍人訓なるなるものを兵に渡して「捕虜の辱かしめを受けるより、自決せよ」と手榴弾を渡しておいて、自分は心臓か、こめかみを見事に撃ち抜く精神力がなかったのか謎に包まれている。軍部は戦術的な研究に没頭して戦略的には極めてずさんだった。例えば、大東亜共栄圏の看板を造った迄が彼等の戦略でその後、占領地の処

選については略奪以外何一つ出来なかった。戦略的には戦後も含めた遠大な計画を建てるべきだった。少なくとも学徒には軍事教練に代えて、外国語教育を普及し、学徒を動員するに及んでは銃を捨て、ペンを替え、各地に派遣してその土地々々の言語で我が戦争目的を説得して戦争遂行に協力を求むべきだった。現地市民に医療活動などが出来たら絶大な成果を挙げたと思う。古語に言う「武家の商法」に終始した。海軍の人事は学校の成績で殆ど決まっていた。職業軍人である士官は、兵学校の卒業成績で左右される。トップ級になると一生が保障されたようなもので、年功序列で位階勲等が自ら訪れてくる仕組みになっている。だから、海軍上層部はこんな立派な人が目白押しの状態だったが、問題があつて軍政方面に秀でた人、軍略面で有能な人が唯、順番に着任すると、とんだ結果になる虞れがある。「智将必ずしも勇将ならず。」平時はそれでよかったが、戦時は人選で動きが取れないので裏目に出る事が少なくなかった。「皮を切らせて肉を切る。」「肉を切らせて骨を切る。」ような戦争だったが、名将を選ぶならば味方の艦艇、人員、飛行機などの消耗損失を少なく押さえて、敵に大打撃を与える作戦を遂行した指揮官を名将と呼びたい。



十六、あ、紅の血は燃える(二)

— 国鉄貨物操作場での勤務 —

北条町古坂二丁目 高井康之

◇ 昭和二十年四月某日 吹田操作場勤務

俺たち二組は下り坂阜、一組三組は登り坂阜と決定。

今日一日は専門の連結手と一緒に添乗位置に乗り、見習い。一寸恐ろしい気がしたが、とても快適だった。坂阜の坂を下るときの貨車の速度は、時速四十軒から五十軒だと聞く。その貨車を自分でブレーキをかけ、速度を適当に落とし、連結させ停車さす。危険な仕事だが男らしい仕事だそれを一日平均六回位行う。

専門の鉄道員に聞くと、初めの間は皆緊張して事故を起こさないが、大体二カ月から三カ月目が一番事故を起こす率が多い。半年もすると熟練者になりコツを飲み込むから、事故数も少ないとの事。

◇ 四月某日

① 集団疎開に行っている弟よりの便り

— 配給だけの給食だと腹が空くから何か食べるものを持ってきて欲しい。 —

母は早速今度の日曜日になぎり飯を持って行くらしい。弟もだらしのない奴だ。「欲しがりません勝つまでは」の意気を持って頑張らねばならない時なのに、そんな弱音を吐いてどうする。沖繩の兵隊

① 学童疎開のこと
太平洋戦争の末期に、戦争の災禍を避けるため、大都市の国民学校児童を農山村地域へ移動させること

さん及び学生や民間人のことを思えば、これしきの事ぐらいと何故齒を食いしばれない」と励ましの返事を出した。

◇ 四月某日

昼休み時。沖繩での特攻隊②の話に花を咲かせた。

死ぬと決めて飛行場の滑走路を飛び立ち、敵艦を眼下に見て突入する時どんな気持ちができるだろうか。久保君曰く。無我夢中だろう。

松尾君曰く。その瞬間、思考力、判断力は我々が想像するより以上に働き、心の中は鏡の如く澄みきっているだろう。

仁井君曰く。その瞬間、半ばヤケクソで獣の様な猛々しい気持ちであろう。

俺は……判らない。

◇ 四月某日

「添乗位置、制動力よし」乗車の際の確認要項も、すっかり板についた。勿論今では単独乗車だ。

毎日、毎日が男らしい作業で、生き甲斐を感じる。久保君も仁井君もこの作業が大好きだと言う。

それにしても、同じ動員学徒でも、大阪駅の小荷物室に配属されている三年四組及び二年生は肉体労働で可愛そうに思う。

昨日も帰路、電車のなかで二年生の宇治君と一緒になり、彼の話を聞き彼らの仕事は全く土方並みと

②

特別攻撃隊の略
太平洋戦争中体当たりの自殺的攻撃を行った日本陸海軍の部隊。
別名「神風特攻隊」

③

現在の中学校二年生の年齢と同じ

聞き、大いに同情したところだ。毎日八貫目から十貫目もある荷物をホームから貨車に積み込み、五時頃になると全くクタクタで家に帰って、夕食が済むか済まないかですぐ床に入り、寝入ってしまうとの事。お互いに国の為、大君の為、動員されているとはいえ俺たちは恵まれている。

◇ 四月某日

あの空襲があつてから早一カ月。

焼け跡にバラックがぼつぼつ建ち始めた。そのバラックや壕舎の前を通るたび「気を落とさず勝利の日まで頑張つて下さい。」と心の中で激励する。

午後、乾先生来訪、昼休み時間沖繩の戦況を聞く。

本日、添乗七回新記録なり。

◇ 四月某日

午後、ポイント掃除。油に浸したポロ布でポイントを磨く。途中で何度も投げ出したくなる様な嫌な仕事。けど誰も不平を言わない。これも大事な仕事だ。もし、ポイントの調子が悪ければ脱線転覆だ。

—— ④ 午後、貨車の入構^④が全然なし。「何か事故でもあったのか」と、心配する。

◇ 四月某日

母 防空演習の時、足に怪我をした。

大した事はないと思うが重い物を持って歩けない。

④ 操作場構内に貨車が入ること

不幸にも今週は俺の家が配給当番に当たっているの、夕方、隣保長の砂川さん宅へ行き当番を誰かにかわってもらおうよう頼みに行く。その時、砂川さん宅で闇屋らしい人が来ており、闇で卵を買っているのを見た。

「隣保長たる人が」と、腹が立ったが、当番を心良く替って呉れたので我慢してやった。

◇ 四月某日

櫻が散り始めた。

控室の傍の櫻も昨日・今日で大半散った。

地下足袋の先が破れた。けれど配給は来月と言うから、未だ辛抱して履かなければ。

昼食の時、鉄道員の井上と言う若い人が助役に、ひどくなぐられていた。見ていて可愛相なくらい、気をさかして俺達学生は控室を出たが、鉄道員の人達は、面白半分に見物している。

三時頃、仁井君が其の井上さんを慰めているのを見て、俺は矢張り仁井君は久保君が思っている程の悪人ではないと感心した。

—— 松尾君欠勤、理由不明。

◇ 五月某日

中継ホームで働いている鉄道員が貨車から衣服や食物等を抜荷しているとの噂がある。幾ら物資が不足しているからとは言え、盗人を働くななんて言語道断だ。ドイツでは野荒らしをしただけでも死刑に処

⑤ 闇取引を業とする人

せられると聞くが、全く死刑にしてやってもよい。最近、職場だけでなく近所の話でもそうした道義の乱れがよく見聞きされる。俺ん所でも一ヵ月程前、父が風呂屋で下駄を盗まれたし、隣の時本さん宅では洗濯物が二度も盗まれたと聞く。国家を挙げての決戦の今日、日本人が日本人の物を盗むなんて持つての他だ。故人曰く、「渴しても盗泉の水を飲まず」だ。

◇ 五月某日

海軍に召集され、田辺にいる伯父よりの便り。

それによると、神戸に一人残っている伯母の疎開について、色々心配されておられる。けど伯母の里は名古屋だから今更疎開したところで、危険性は神戸と大して変わらないだろうと父が言っていた。父の考えでは、神戸も三月の空襲で大半が焼け野が原になっているのだから、今後、空襲の被害もそう大したことは無いだろうと楽観的である。俺も父の考えに同感である。そして、たとえ空襲で家が焼けなくても万が一、この身が死すとも運命だと諦める。運がなければ防空壕の中に居ても死ぬし、運が良かったら壕に入らなくても死なないだろう。それ位凶太い根性で居れば大丈夫だろう。

◇ 五月十一日

俺の人生で、この日は忘れられない一日として永久に残るだろうし、また、永久に書き残されねばならない。

午前八時三十分、始業と同時に俺は寒けがして頭の痛みも甚だしく休養室で寝ていた。熱を計って貰

う。三十九度二分。柳田班長が来られ「そんなに熱があるのなら、すぐ天王寺の鉄道病院に行ったら」と親切に言ってくれたので早速、届けを出して天王寺へ行った。

鉄道病院で注射をして貰い、病室に連れていかれベッドの上に寝かされた。「今晚一晩ここで泊まっても良いよ」と医者に言われたとき、空襲警報——。

地下室へ担架に乗せられたまま待避。ドシンドシンと爆弾の響きが身体にしみる。「1トン爆弾だ」と医者が言う。

空襲は神戸との事。俺は自分の身体の悪いのも忘れて神戸の父母の安否を気づかった。

午後二時か三時頃、空襲警報解除。

いても立ってもおれない気持ちにかられて、病院を無断で飛び出した。梅田に出ると阪急、阪神とも不通。

⑥ 省線は西宮までしか動いていないと聞く。(よし、行けるところまで行ってやれ)と決心して省線に飛び乗る。やはり西宮までで不通。西宮で下車。阪神国道に出て西へ西へと歩き出した。雨が降ってきた。土砂降りだ。朝からの病気で頭が割れるほど痛い。靴の中に水が入り足も重たい。何処を歩いているのか判らない位の疲労。

俺が歩いていく反対の方向から、罹災者の人の群れが歩いてくる。

「三宮付近はどうですか。大丈夫ですか。」と尋ねてみても誰も答えてくれない。家、財産を今失っ

⑥ 元、運輸省の管理に属した汽車、または電車の線路省線電車の略、現在のJR西日本

た人達にとって他人ごとでないと言った表情。その気持ちも判るが俺にとっても父母のことが気掛かりだった。来る人来る人に次から次へと尋ね続ける。

その中「さあ、三宮付近は全滅やな」と答えてくれた人の言葉を聞き、へなへなとその場に座り込んでしまいたい気持ち。それでも自分が自分を励まし、齒を食いしばってどしゃ降りの中を西へ西へと歩き続ける。

住吉付近まで来たら、国道電車の線路が爆撃で大きくはね曲がり、架線がだらりと地にたれている。トラックに多くの人を乗せ、神戸の方に向かって走っているのを見つけて「乗せてください」と声を大にして叫んだ。けれど、どのトラックも満載で乗せてくれない。もうその頃になると歩くというのではなく、ただ足を一步一步前へやっとのことで踏みだしているという事だけ。

涙が出た。爆弾で崩れ落ちた我が家。爆死した父母の姿が不吉な予感として頭のなかに浮かび上がってくる。それらを思い出すまいと努力しても無駄だった。涙が出る。その涙を激しい雨が叩き飛ばす。身体が寒さのため震える。頭は割れそうだ。（この調子だと神戸に着くまでに、どこかで倒れてしまうぞ）そう思った。と同時に（なにくそ、倒れるものか、せめて父母の安否をこの目で確かめるまで、絶対に倒れないぞ）と負けじ魂も湧いてくる。

御影付近まで来たとき、すっかり夕闇に包まれていた。その時、後ろから来たトラックが俺のすぐ傍で止まり「何処まで行くのや」運転手が声をかけてくれた。「三宮まで」と答えると「よっしゃ、後ろ

へ乗れや」と言ってくれた。そこでトラックの後ろに回り荷台によじ登ろうとしたが、力尽きたのかなかよじ登れない。と、荷台に乗っていた人達が、手を貸して引き上げてくれた。すでに荷台は満員で腰を下ろす所もなく、全員立ったまま乗っていた。それでもトラックに乗れたと言う安心感から、全身の力がスーと抜けていくのがはっきり判った。途中、春日野道で下車し我が家を目指して歩いていくと、この付近は全然空襲でやられた形跡がない。これなら大丈夫だと思おうと現金なもので、足取りがしっかりしてきて走りだしたい気がする。若菜小学校の前を通り自分の家が見えたとき思わず「万歳」と叫んだ。「只今」と言って玄関に入った瞬間、完全に伸びてしまった。びっくりした母が俺の肩を抱いて二階へ連れて上がり、すぐに寝床の中に入れてくれた。布団を被り俺は泣いた。嬉しかったのか、疲れ果てた為の涙なのか。いや、おそらく病気の身体をここまで自分で自分を励ましつつも運んできた気力の勝利を喜んでの涙だろう。

この日記十二日午後一時書く。

◇ 五月十二日

朝から熱が出て、朝食も取らずに床に就いたまま。

昼過ぎ昨日の出来事を日記に書いたまま夕方六時まで寝る。母の話では昨日の空襲は凄かったらしい。一トン爆弾の威力は焼夷弾と比べものにならない位にひどく、壕に入っても生きた心地がしなかったと言う。それにしても灘区が爆撃されてそれほどだから一トン爆弾の恐ろしさが良く判る。俺がいた

大阪まで地響きしたのだから。それにしても灘区の人には気の毒だ。幸い、赤坂通りの伯母さん宅は無事だったが、窓ガラスは一枚残らず全部吹っ飛んで壁や屋根も大分落ちたとの事。深江^⑦、御影^⑧付近は全滅らしい。(父の話)

午後七時頃、松尾、玉田兩人来る。彼らは昨日、交通が不通の為、鉄道の寮で一泊したとの事をして天王寺の鉄道病院に電話した所、俺が行方不明になったと聞き心配して寄ってくれたらしい。久保君も心配していると聞き、彼等の友情がとても嬉しい。

しかし、今の俺の身体の調子から見て、明日はとも出勤出来そうもないので欠勤届を書き両君に言い伝える。

◇ 五月某日

「振り分け。集中。線別。打合せ・・・」事務所の拡声器が叫ぶ。「それっ」とばかり控室から飛び出し坂阜を駆け登り入構して来た貨車の添乗台に飛び乗る。

伝票を片手にした当番の鉄道員が「八番。前一番、尻三十二番」と、俺の連結線を告げる。それに「添乗位置、制動力良しっ。」と大声で答えるとガチャッと連結をはずしてくれる。

下り坂(坂阜)を徐々に速度を上げ貨車は走り出す。最高速度、四十軒。頬をたたく風が快い。そして、指定された番線に入り連結される位置が近づくとブレーキを降ろし片手で踏みしめる。連結時の速度は丁度人間が歩く速さが最適速。それよりも早い速度なら連結器を壊したり、貨車を壊す恐れも有り、

⑦⑧ 現在の東灘区
旧武庫郡本庄村と御影町

その衝撃で添乗位置から振り落とされ負傷することもある。

連結速度が遅すぎると連結器の環が落ちず連結不良。そうなれば、一度停車した貨車を渾身の力で後退させ、また、貨車を押し、人力で連結させねばならない。

それだけに、完全に連結させると、「ガチャン」と連結器の環がうまく落ち、その衝撃は何とも言えない嬉しさだ。向かい風の日。追い風の日。それぞれ日によってブレーキのかけ方に注意しなければならぬ。最初の頃は連結不良の続出であったがこの頃では、すっかり作業に慣れて連結不良の割合は十回に一度、有るか無しの良い成績。「この分だと、学校を辞めて本職の連結手になっても良いぞ」と冗談話に花を咲かせる。

◇ 五月某日

食事当番なので本屋まで昼食を取りに行った時、本屋の裏の便所の傍で一人の鉄道員が班長にひどくなぐられているのを目撃した。何でも、無届けで欠勤したので制裁を受けているらしい。学校だけでなく、鉄道の世界でも、やはり軍隊並である事が始めて判った。それにしても我々動員学徒は恵まれている。

学校時代なら一日休んでも欠席届をださなければならぬし、無断で早退しようものなら、必ず鉄拳制裁だった。だが、動員されてからは、皆、ずぼらになって欠勤しても届けをださない。

また、出さなくても叱られない。考えて見ると、俺たちは学徒だからとお客様扱いで甘やかされている

のではなからうか。特にこの頃の俺たちはだらだらしている。級友の中には欠勤して映画を見にいったり、魔法の宝（定期券）を使って近郊へ旅行する物もかなり増えた。それだけなら良い。煙草を吸う者もかなりいる。控室で寝そべって悠々と煙草をふかしている級友を見ると、どなりつけてやりたい様な気がする。けれど、今日あって明日の無い生命ならーと思って我慢してやる。一日平均六回の添乗もずぼらな奴は控室で寝そべり二、三、四回位しか添乗しない。特にH君等は話にもならない。作業はズボけるし、煙草は吸うし、最近では色気がつきスーチャン（彼女）の事ばかり平然としてのろける。そして、暇さえあれば、恋文を書いたり、スーチャンからの恋文を読み返している。完全な不良少年だ。学校生活から離れた解放感から、こうした事のないようにと、くれぐれも教習時代に田井指導員から言われたけれど、とうとうそんなやつが俺の同級生から始めた。悲しむべき事だ。

津坂君の死を思う時、H君の行為がよけいに目につく。十人十色というが、五十人近くの人数がいれば仁井君の様な弱虫もいるし、H君の様な奴がでるのも無理はなからう。幸いにして俺の友人にH君のような人間がいない事に幸せを覚える。本日添乗七回なり。

◇ 五月二十一日

⑨ 魔法の宝を使って、小野に集団疎開している弟に面会に行く。夏の寝着やにぎり飯を渡し、色々池の土手で語り合う。弟は子供心にも神戸の空襲の事を心配していたが、「安心しろ、すでに高架線より浜側は焼野原になっているからたとえ空襲で家が焼けても逃げる所は十分あるから生命だけは絶対に大丈夫

⑨ フリーパス券

夫だ。」と言ひ残し、午後三時の小野発の汽車で加古川駅に出た。加古川駅で乗換時間が一時間もあるので駅前をぶらぶら散歩する。駅前通りは疎開のためか広い大通りになっている。駅前通りを左におけると一軒の食堂が営業しているのが不思議な位に思われ、その店に飛びこんだ。代用しるのを売っていた。甘い。聞くと柿の実を粉末にして作ったのだそう。こんな所でこんなおいしい者に出くわすなんてやはり田舎町だと思った。加古川発十六時四十分の大阪行列車で帰宅。

◇ 五月某日

朝からどんより曇り蒸し暑い。「こんな日は事故が起こり易いから注意せよ。」と助役が俺達学徒を集めて注意をあたえる。

十時頃、二番線に分解された航空機を積んだ貨車が入構。取扱いは細心の注意を払わねばならないので俺達学徒は乗れず本職の鉄道員が添乗する。行く先は九州の鹿児島。おそらく特攻機だろう。昼休みおれは、その貨車の傍へ行きシートをめくり航空機を見る。戦闘機らしい。(すっかり頼むぞ)と心中で祈り、その貨車が発車するまでその場にいた。

◇ 五月某日

午前十時から機関区見学。ここには、四年生及び三年生の四組の者が動員されている。一步、足を踏み入れたとたん頭が変になる位の騒音。その間をハンマーやスパナを持って油だらけの作業服で動員されている学友、先輩達が駆け回っている。機関車の動輪をはずしている者。ボイラーの油さしをして

いる者。中には機関車の釜に頭を突っ込み真っ黒になって煤煙を取っている者もいた。同じ学徒で動員されているとは言え、彼らに比べて何と俺たちの恵まれている事か。色々と現場の鉄道員に機関区の仕事を説明して貰うが騒音の為、全然聞こえぬ。一時間程でそこを出て青空を仰ぎ、大きく深呼吸をした時、ほっとした。坂阜に帰り、控室で寝ころんでいても耳の中でまだ「ガンガン」と言う騒音が残っているような気がしてたまらない。

◇ 五月某日

沖繩の戦局、重大なり。

控室の壁にも「沖繩の勇士に続け」との標語が張り出された。朝礼の時、助役の話によれば、沖繩の学生も銃や日本刀を持ち日夜、斬込隊として第一線で活躍していると聞く。俺は、添乗し坂阜を降りる時、今日から「この鉄路は沖繩に通じる。」と口には出さぬが心の中で叫ぶことにした。

そして、それに依り戦い抜く決意を一層高くして無事故、能率の向上に努める。それが、沖繩の学生に報いる最善の道だと思ひ頑張るつもりだ。

◇ 六月一日

―大阪空襲―

午前十時から防空壕に入ったまま。機関車や貨車も分散して退避。俺は控室の傍の壕から頭を出して大阪の空を見る。敵機の姿は見えない。味方の戦闘機が数機見えただけ。やがて爆弾の音。たちまち、

大阪の上空に黒煙が上がる。「退避っ。退避っ。」その声で驚き壕の中へ駆け込む。B29らしい。

爆音が頭上を通る。何分か立って爆音が去る。再び頭を出して大阪の方を見ると黒煙は全市を覆い、夕ラタラとその中で燃え上がる火の手も見られる。「俺の家は大丈夫だろうか？」級友は皆心配そうな表情で背伸びして眺めている。「あの方向では俺の所は大丈夫」久保君が嬉しそうに言う。坂阜の上の事務所に駆けて行くと助役が構内電話で大阪の空襲状況を聞いていた。だが、大阪市内に通じる電話線が不通で状況が不明との事。午後になり大阪市内の黒煙が雨にまじって降って来るのだろう。五時頃になっても電話は不通、交通も不通。回復の見込み全くなし。帰宅出来ないで俺たち神戸組は寮で泊まる事にした。六畳の部屋で松尾君、玉田君、青木君と俺の四人で寝る。夜9時頃、風呂に入り寮の中庭に立って大阪の方を見ると、まだえんえんと夜空に赤く燃える火の手が見られた。

◇ 六月六日

昨日、(五日) 神戸大空襲

逐に俺の家も罹災。幸いに、父母共負傷なく元気。昨日、(五日)、一公休日の事とて朝九時まで寝る。九時頃、起床。顔を洗い、便所に入ってしゃがんだとたんに空襲警報のサイレン。あわてて飛び出し、朝食を始めた頃、すでに、敵機の大編隊が、上空にあり。「退避っ、退避っ」と叫ぶ声で防空壕に入る。どうやら、今度は神戸らしいとの情報で壕を飛び出し家に走り込み、フトンと雑囊⑩(この中に、この日記帳を何時も入れている。)を取り出した。上空を見ると、六千米位の上空でB29が三機編隊

⑩ 種々雑多なものを入れる袋。肩にかける布製かばん

ずつ、十編隊位で西南より東北に向かっていた。対空砲火の音が激しく耳につく。(当たってくれ、もう少し右だ) 声にならない声で吾が対空砲火に声援する。「ぞー」焼夷弾の落下音。頭から防空壕の中に飛び込み、目を押さえ頭を伏せる。何秒かたったか今かと焼夷弾の落ちて来るのを待つ。だが、幸いにして異常はない。恐る恐る防空壕を出た。春日野道付近に黒煙が登り始めた。まだまだ大丈夫だ。ほっとする安心感。頭上の爆音を耳にして上空を見上げると、一機のB29が一条の黒煙を引きながら南の方から落ちてくる。「撃墜だっ。やったぞっ」俺は思わず叫んだ。俺の声で壕内の父母を始め近所の人が飛び出した。「キーン」爆音も一段と高くなり日だるまとなったB29が一層近づく。と、その敵機から三つの落下傘が投げ出されふわりふわりと開き、ゆっくりと降り始めた。落下傘が段々地上に近づくにつれて、手足をバタバタ動かしている敵兵の姿も見え始めた。「此処に降りて来て見ろ、たたき殺してやる。」父が腰にした日本刀をたたいて言った。すでに、敵機は六甲山の裏へ墜ち、落下傘の敵兵も海岸付近に落ちて姿は見えなくなった。吾が軍の戦果を目の前に見て勇氣百倍。だが、その頃すでに二の宮から加納町にかけて焼夷弾が落とされ、上空に黒煙が大きな入道雲の様に登っていた。そのため、敵機の姿も段々と見えなくなった。視界、零。もう上空は黒煙だけ「ザー」再び落下音。「退避っ、退避っ」警防団の人の声で壕に入る。壕に入る瞬間、^①若菜小学校の方をちらっと見た。小学校の上に雨が降る様な無数の斜線が見えた。焼夷弾だった。その余りにも無数の焼夷弾に背筋が冷たくなるのを覚えた。「ザー」今度は近い。その音がだんだん近づく。「今度こそ駄目だな」と思って壕の入口付

① 現在の中央区
旧葺合区にあり、今は廃校

近を何気なく見た。そのとたん、入口付近にパッパッパッと花が咲いたように火の粉が広がっていた。「焼夷弾っ。」誰かが叫んで壕を飛びだした。次々と壕の中から隣保の人が飛び出し俺も飛び出した。そして、吾が家を見ると玄関、壁、柱に点々と付着した火の粉が無数。見た瞬間もう手が付けられないと思った。今まで常識で考えていた焼夷弾の攻撃とは全く異なりこうまで早くこうまですごい物とは知らなかった。すでに二階のひさしから黒煙が吹き出し始めた。裏の三隣保の江戸川さん宅から火の手が上がり「轟っ」とすさまじい音がし出した。「さあ逃げよう。」父が鉄兜の紐を締めなおし、ふとんを破る。母と俺も防空頭巾を被り直して布団を被り父に続いた。生田川の橋まで来たら人の波。この布引へ逃げる人と、西の三の宮へ逃げる人とが交じって大混乱。俺たちは父に続いて三の宮へと向かった。「布団が燃えているぞ。」父の声で、覆っている布団を見ると、あわてて近くの防火用水に布団を突っ込み火を消し、また被り直して西へ西へと向かった。焼夷弾が付近に落下する。その数も無数と言ってよい程。丁度、ニュース、映画の戦場場面そのままだ。が、不思議に焼夷弾は逃げまどう人の上に落ちず、わずか十米程の至近距離に落ちる。「これが、天祐神助だな」と気がついたのは、二の宮神社に避難してからだった。⑫二の宮神社に避難して三十分位いただろうか。焼けたトタン板が紙の様に飛んで来る。父の顔も母の顔も真っ黒、目だけ充血して赤い。付近を見渡したが近所の人はいない。壕を出た時までは一緒だったが後は散り散りばらばらになったらしい。空襲も一段落をついた。父母と一緒に三の宮駅へ出た。待合室、改札口の広場は罹災物で一杯、身動きも出来ない。警防団の人が来て町会別に整

⑫ 三ノ宮駅北東に位置する

理し始めた。⑬「若葉通六丁目の人は高架下七百三十一号へ集合」とメガホンで叫んでいるのは、砂川さん。指定された場所に行くと、すでに隣保の人は大半集まっており、お互いに涙を流して再会を喜び合っていた。父は「役所が心配だ」と言い、俺たちを残して出かけた。夕方になりコンクリートの上に布団を敷き雑魚寝をする。隣保の人が、皆一カ所に集まり寝るのだから足をのばすこともできない。

ふと朝から何も食べていないのを思いだし急に腹がへり始めた。日が暮れて夜になっても未だ市内は燃え続けていた。何時になったのか、時間も判らない。皆、寝ている。時々、子供の泣く声がする。

俺は寝れない。隣保の人達と十年余りも近所付き合いをして来たが、今日を限りで各々離散しなければならぬ。この人達、再び一堂に会する事ができるであろうか。泣き虫の眞ちゃん。チョコの貞ちゃん。マンガを描かせたら天下一品の哲三君。幼なじみの友達も明日から何処で暮らすのやら。眠れない。「家を焼かれて残念だ」とは思えない。正直な所、やれやれと行った感じ。今まで、（今度やられるのか？何時やられるのか）数多い警報のサイレンを聞く度、そう思いながらきたが、明日からはもうその心配が無い。こんな事を言えば両親は怒るかもしれないが、ほんとうにそう思うのだから仕方がない。

一夜が明けた、皆ごそごそと起きはじめる。先ず、腹が空いて耐えられない。俺だけではない皆がそう言う。食もなく、なす事もなく、コンクリートの上でゴロゴロ寝ころんでいる人達。まるで乞食だ。そう思うと、一人でおかしくなる。午前六時頃、父が役所から戻って来た。小脇にかかえた鉄兜の中にぎり飯が一杯。役所できり取り持って来たという。このにぎり飯を隣保の人に公平に分け合う。おいし

⑬ 生田川の東
当時の私の住所

い。一生の中、これほどおいしいと思って食べたものはないだろう。にぎり飯を配り終え、再び父は役所へ行つた。昼頃、隣保の人達と一緒に焼けた我が家を訪れる。一面焼野原で何処が何処やら見当もつかない。ただ、郵便局の焼け跡にポストだけが取り残された様に立っているのを目印に吾が家がわかつた。

暑い上空は初夏の太陽。そして大地はまだ焼けていた。上下から熱気を浴び、たまらない程熱い。母と二人で鉄棒で焼け跡を掘り起こす。ムツと熱気が顔を包む。二階のベランダの手すりが出て来た。なおも掘り続けると、コップだろうか、窓ガラスだろうか。ガラスの溶けた大きな固まりが出てきた。鉄瓶が出る。防火用水のコンクリートが出る。時計が出る。今更、使い物にならない物ばかりだが、何か宝捜しをしているような気がしておもしろくなる。父がまた鉄兜にチリメンジャコを一杯詰め込んで帰って来た。それをまた、隣保の人に配り渡した。「チリメンジャコは美味いが、これに酒か、ビールでもあればの」と砂川さんの小父さんが言う。その言葉で皆がどっと笑う。おそらく、二十数時間振りの笑い声だろう。

「ここらで、一寸一休みだ。花さか爺さんも楽ではない。」北川さんが言う。「そうだよ、ここ掘れワンワンだ。」と答え、また、皆が笑い出した。大地の地熱で腰を下ろす所がないので立ったまま一休みする。幸いに水道は蛇口だけ残っておりそこから、水道の水がどくどく出ているので渴きだけは癒せる。また、花さか爺さんを始める。今度は、ブリキで作った衣装箱が出て来た。開けて見るとギッシリ

詰めた教科書が灰になっていて活字が白く浮き出ている。そおっと、さわってみると、粉々に碎けパツと空に散る。愉快だ。子供みたいに一冊ずつ灰になった教科書を粉にして飛ばしていると、母に「この忙しい時に。」と叱られた。防空壕付近を掘り出すと、バケツに入れた瀬戸物の茶碗や鍋が出て来た。皆、無事だ。一個も破損せず使用できる。母はとても喜んでた。日が暮れるまで花さか爺さんを続けていると町会長が来られ「三隣保の人は今晚から二ノ宮小学校の講堂で寝て下さい。」と伝言された。

⑭ 二ノ宮小学校の講堂も身動きできぬ程の人で一杯。今、この日記はその講堂の窓辺で書いている。鉛筆もこの一本でお終いだ。もう暗くなり、これ以上書けない。明日も良い天気なのか星が美しく一つ二つ見え始めた。まだ、加納町の方が燃えている。

◇ 六月七日

乞食生活、三日目。今日も朝から花さか爺さん。朝食は乾パン一袋（一所帯に）父の特配^⑮（……？）。握り飯のおかげで、昼は味気ない乾パンから解放される。焼け跡から掘り出した茶碗や湯のみ等をバケツに詰め込み整理する。午後警報発令。しかし、もう焼かれるものがないのでのんびりした気持ち。焼け残った電柱に新聞が張られていた。俺たちが見たB29の撃墜の写真も出ていた。それよりも沖繩の戦線が重大化されたと報じている報道の方が、切実に感じられる。神戸も焼けた。何とかこの辺で総反撃が出来ぬものだろうか。午後、加納町と三ノ宮駅で焼死体が集められていると聞き、見に行く。三ノ宮の待合室にぎっしりと集められた死体。もうそれは人間としての形は残っていない。真っ黒な粘

⑭ 三ノ宮駅北東

⑮ 特別の配給

土で作った人形の様だ。その数は、ざっとみても二百体、見ていて恐ろしいとは思わない。三カ月前の空襲で始めて死体を見た時は、身体が震えたが今度は大丈夫だ。この気持ちはどうしたことか。自分でも判らない。しかし、「自分の肉親がそうなら」と思うと背筋が冷たくなる。ともあれ、父母とも健在なり。これは幾多の財産を焼失したるより有り難い事なり。父、午後、今後の俺たちの身の振り方を心配して相談する。俺は即座に吹田の寮に入り学生として動員を続けると決意をのべる。

父も役所の寮に入り勤務を続けるとの事。さしづめ母は明日から北条の藤本さん宅へ疎開。弟は依然、そのまま集団疎開を続ける。結局、明日より吾が家一家四人、散り散りばらばらで暮らす事になる。これも勝つ日までの辛抱、元気を出そう。くじけずに。

明日からは 一家離れて暮らすなり 今宵限りの飯ほおぼれり。

◇ 六月八日

すでに昨日、北川さん、砂川さん、時本さんなどは各々縁故の田舎へ疎開せり。

松田さん、井上さんは焼跡の防空壕を改築してバラックを建て暮らすとの事。俺は母を連れひとまず北条へ疎開させるため同行する。父は役所の都合で行かれぬが仕事を一段落させてから後を追うという。

午前十時頃、住み慣れた若菜通りを離れた。母が手にする荷物、バケツ二個。この中には茶碗六個。鍋二つ。衣類七枚。俺は布団四枚を小さく畳んで縄をかけ、それを背に負う。雑のうちの中は作業服一着と冬用の学生服一着、それにこの日記帳一冊。これが、今の高井家の全財産なり。いや、まだある。

⑩ 罹災証明書に不屈の魂。そして、それを内に秘めたこの生命。市電が不通なので神有電車の湊川駅まで歩く。湊川駅超満員。すべての乗客は焼け出されの罹災者ばかり。電車が入って来た。吾れ勝ちに人を押しつけ押しつけ殺到する。悲鳴、叫喚。まるで地獄図絵だ。やっと乗れたものの後から後から押し込む人で足の踏み込む場もない。子供が泣く。親が叫んでいる。「押さないでください。この子がつぶされる。」その叫び声も泣き声だった。「馬鹿野郎っ何言ってるのや。お前の子供だけが乗客やないんやど」誰かが嘲笑しつつ、窓から大きな荷物と共に乗り込もうとする。その時、後の方から、「何を言っているのだ。貴様等それでも日本人かっ。幼い子供がいるというのに、その言語態度は何事だ。空襲で家が焼かれたぐらいで日本人の誇りまで失ったのか。こんなときこそ公衆道徳を守るべきではないか。その子を皆で面倒見てやってはどうです。皆さん。」と大声で叫ぶ人がいた。聞いたような声だなと思つて振り向こうとしたが身動き一つ出来ない。満員なので振り向けない。「さあ、皆さん順番にもう一歩ずつ中へ詰めてあげようではありませんか。」その人の声が続く。やっとのことで振り返って見ると何とその人は父だった。日頃、おとなしい、大声も出さない父しか知らない俺は、この満員で殺人的な混雑の中で、誰にも屈せず堂々と他人の子供をかばい無頼漢の様な奴をどなりつける父を頼もしく思った。母も父だと気づき、「お父さん、日頃に似合わず大きな声を出して」と独り言を言いながらも得意そうな表情だった。三木の終点に着いた時、父も始めて俺たちに気がついたらしい。「お父さん、立派だったよ。」と俺が言うのと、「・・・」恥ずかしいのか返事をしなかった。三木から再び汽車で厄神駅

⑩ 災害を受けたという証明
書
⑪ 現在の神戸電鉄

へ出て、そこでまた、乗り換えて北条行の汽車に乗る。その間、厄神駅で二時間程待たされ、北条駅に着いた時は午後7時を過ぎていた。北条駅から二里余りの道を西在田まで二時間、徒歩。藤本さん宅へ着いたのは日もたっぷり暮れた午後九時。藤本さん宅では夜も更けているのに風呂を沸かしてくれたりご飯を炊いてくれたり大喜び。四日振りで風呂に入り畳の上で寝て人間の生活にもどった。

この日記 六月九日 午前9時 藤本さん宅の離れの部屋で書いている。

◇ 六月九日 土曜日

朝、十時 藤本さん宅に母一人残し、父と二人で北条駅に出る。北条発午後1時の汽車に乗る。父は神戸駅で下車。俺はそのまま吹田に直行。吹田の駅に降り立ったのは午後五時二十分。すでに級友は帰宅しており俺は寮に寄る。入寮手続きは明日するとしても今晚はここで泊めてもらいたいとお願いする。部屋は一階の十七号室。その部屋では級友である多治君、松原君と同室。多治君の話によると松尾君は昨日、戦災以来久しぶりで出勤したけれど今日退学届を出して家族と一緒に四国の讃岐津田へ疎開せり。玉田君も松尾君同様「退学届を出し、姫路の奥の新宮なる地へすでに疎開せりと聞く。聞いてがっかりした。阪急三人組で学生生活を続けるのは俺一人。それにしても一目、彼らと出会ってから別れたかった。

◇ 六月十日 日曜日

朝、寮から出勤。先ず久保くんが喜んでくれた。彼は俺の無事を祈ってくれていたとの事。親友久保

君の友情、終生、忘れ得まい。(今日から俺は松尾君、玉田君の分まで頑張るぞ)と決意する。帰寮後入寮手続き、転出証明書を寮長に手渡す。部屋は昨晚のまま十七号室。同室者は同級生ばかりなので、とても気やすくして良い。夜食は豆半分、米半分のご飯少しとおかずは豆とジャガイモの煮た物。正直に言っておいしくない。だけど不平不満は言えない。二日間、満足に食べなかつた罹災の日の事を思えば、

◇ 六月十三日 水曜日

この頃、出勤する同級生の数がぐんと減った。数えて見ると今日は十一人。罹災で退学した者もあるが、ずばらをかまして欠勤をする者が日増しに増えていると助役がこぼしていた。それが本当だとするともつての他だ。

祖国在亡のこの時にあって、学生たる本分を忘れたのかと一人憤慨する。空襲のせいか入構する貨車も少ない。本日、添乗一回だけ。張り合いが無い。夕方、寮に帰る。する事もなくごろりと寝をべって夕食を待つばかり。退屈、この上なし。

◇ 六月十六日

大畑君 殉職す。

二日目の添乗の時、連結を済ませて控室へもどろうとした時、多くの級友が顔色を変えて事務所の方へ駆けて行くのが目についた。初めは「果汁の配給でもあるのか」と思つてのんきに一人でとぼとぼ歩いてきたがどうも皆の表情がおかしい。「どうしたんや？」と声をかけて見たら、「大畑くんが怪我し

たらしい。」と誰かが返事をした。事務所へとびこんだ時にはすでに大畑君は特別仕立の貨車で天王寺の鉄道病院へ運ばれた後。目撃者の丹下君に聞くと、大畑君は八番線の貨車に便乗。連結速度が遅くて連結不良。その為、一度落ちてしまった連結器を上げようと連結器の前行った時、後方から丹下君の添乗する貨車が大畑君の貨車に連結。そのはずみで二輛の貨車が大畑君の胸部をはさみ込んでしまった。瞬間、大畑君が悲鳴を上げたので丹下君が駆け寄り全身の力を出し貨車を後退させた。「ばたん」と大地に投げ出された大畑君の胸部から真紅な血が吹き出し顔色は青ざめ、只「痛い痛い」とうわごとの様に力なく叫んでいたと言う。

午後二時頃、天王寺病院から電話で大畑君の死を知らせて来た。その悲報で級友、声なく悄然思えば彼の家庭は父なく兄弟なく母と二人暮らしのほず。後に残されし、母上の心情、察するに余りある。

三月に津坂君を失い、今日また大畑君を失う。尊い、犠牲。瞑せよ大畑君。寮に帰っても、同室の者と話をする力もない。只、大畑君の思い出にふけるのみ。どうせ、今宵は眠れそうもない。千里が丘に落ちる夕陽が涙で曇る。

⑩ 当時は鉄道病院
現在はJ R天王寺病院

大声で叫べど 答えぬ君悲し

千里の丘の 風も泣く

瞑して眠れ 吾が友よ

明日の勝利を 君が前に

誓って進まん その日まで

死せる君の 声はなく。

生きる吾等は 叫ぶなり

此の仇を果たすまで

勝利の栄光得るまでは

いかなる困苦にも耐え行かむ

― 大畑君に捧ぐ ―

罹災証明書

住 所 新潟県 佐和田市 佐和田町 佐和田
 氏 名 大畑 健一
 年 齢 46
 職 業 会社役員

右罹災者タルコトヲ証明ス
 昭和二十一年五月二十六日
 佐和田市 佐和田町 佐和田 大畑 健一

市 長 大畑 健一
 町 長 大畑 健一
 区 長 大畑 健一

申請 佐和田市 佐和田町 佐和田 大畑 健一
 備考 佐和田市 佐和田町 佐和田 大畑 健一

申請 佐和田市 佐和田町 佐和田 大畑 健一
 備考 佐和田市 佐和田町 佐和田 大畑 健一

申請 佐和田市 佐和田町 佐和田 大畑 健一
 備考 佐和田市 佐和田町 佐和田 大畑 健一

申請 佐和田市 佐和田町 佐和田 大畑 健一
 備考 佐和田市 佐和田町 佐和田 大畑 健一

乗車券の交付や避難先の配給受け取りなどに欠かせなかった罹災証明書

第二次世界大戦中及び敗戦直後の義務教育を語る（昭和十九〜二十一年）

——当時の小学校五・六年及び高等科生——

第二次世界大戦は、昭和十六年十二月に日本軍のハワイ真珠湾襲撃攻撃によって火ぶたが切って落とされた。

その後、勢いに乗って、中国、東南アジアを侵略していった。しかし、昭和十八年後半からは、アメリカを中心とする外国軍の猛攻を受け、日本陸・海・空軍ともに各地で孤立し、全滅するなど撤退していく。そして、二十年には沖繩へ敵兵が上陸し、日本本土も攻撃されだした。

国内では、兵器をつくる資材も底をつき、日常生活で使用していたり保管している総ての鉄・アルミ・銅製品などは国に供出し兵器の資材にしようとした。学校でも運動用鉄棒までも取り除かれた。また、衣食も戦地の兵隊が最優先されるため、老人・女性・子どもは、生活にも事欠くような状態であった。

そんな環境のなかで、小学校高学年児童は食糧増産や軍需用燃料づくり、飛行場、軍需工場の移転のための整地などに日々働いた。もちろん、食物栽培に必要な肥料などなく、人糞、牛糞と落ち葉などで堆肥づくりする以外に肥料はなかった。

軍需工場や兵舎・住宅密集地は再三にわたって米軍の空襲をうけ壊滅状態となる。学童疎開のため都市の児童は田舎に集中する。昭和十八年八月十五日終戦となり、以後教育は一変する。

国民は敗戦による不安と混乱の中で、何のためにどう生きるか目的を失い、右往左往するばかり。衣食住にも事欠き、混乱の日々であった。

座 談 会

昭和十九年から昭和二十一年の間に国民学校^① 初等科^②五年生から高等科^③二年生に在学されていた皆さんにお集まりいただきありがとうございます。

当時の学校生活、家庭生活などをお話しいただきたいと思えます。この座談会の記事を後世に残し、後輩たちが戦争の悲惨さを知り、平和への誓いを新たにしていただくきっかけになれば・・・、と願うものです。

一、 当子校校長生匠伯

食糧増産のため、雨の日以外は野外で作業をしましたね、前日に作業の内容が示され班ごとに農具が割り当てられました。例えば、今日の作業が開墾であれば備中鍬^④か巾広^⑤と弁当と水筒を持つての登校です。集合すると猪野山に出かけます。

現地に着くと、一人一畝^{うぶ}(約三十米位)ずつ、先生から割り当てられます。野山ですから笹や木が生い茂っておりましたので、前もって松の木を倒し、木の根を取り除いていても雑木や笹の根が張っており一振り一振りが大変でした。

十時と昼休み以外は働きました。割り当ての開墾が完了し、先生の検査(正確に耕され畝が正しく出来ているか)に合格すると休んでよいわけです。体の小さい私などは休憩もそこそこに働きましたよ。

③②①

現在の小学校
一年生から六年生まで
現在の中学校
当時は二年生まで

※ 戦前の学校系統図については

一三六頁を参照

④ 土を耕す用具で三本の股歯がある

⑤ 普通のものより巾の広い物で根などを切るのによいことから開墾地に適する

司 会	各学校の開墾地は野山で、雑木や松林が多かったと思いますが、地名はどこでしたか	
西 岡	私は疎開組で四年生まで神戸におりました。そのため、開墾は体力もなく農具の使用にも慣れていないので苦痛でした。開墾は大谷と善防池の上の松林でした。	⑥ 西笠原町大谷 現在は住宅地になっている
内 田	賀茂は鎮岩の競馬場跡と山下でした。	⑦ 現在の三洋電機鎮岩工場
石 野	富合は朝妻の工業団地のあたりです。	
繁 田	宇仁は小印南新田の松林でした。	
広 田	日吉は春岡峠と十万池の上です。	⑧ 池上町から山枝町に抜ける野山（現在のコンクリート工場）
河 原	富田は徳ヶ谷と女鹿山です。	⑨ 河内町と山田町の間の池の上部の野山
丸 山	在田は上野の宮山と中富です。	⑩ 坂元町徳ヶ谷住宅一帯
西 脇	九会は小学校が移転しましたので、学校敷地の開墾をしましたよ。	⑪ 今の女鹿山自治区
石 田	北条は飯盛野でした。私たち校区は非農家が多かったので農具のない者は、隣近所の農家から農具を借りて持っていきました。	⑫ 北町北の市営住宅のところ
司 会	開墾した後、さつま芋、大豆などを植えたと思いますか。また、後の施肥 ^⑭ や収穫とその後の取扱いはどうですか。	⑬ 現在の播磨農高の遊牧場辺り
丸 山	主に「さつま芋」でしたよ。舟底植といって長い蔓 ^{つる} を地面に沿って置き、その上に土をかぶせました。苗は学校の畑で苗床を作り一番苗、二番苗と何回かに分けて切り取	⑭ 当時、肥料といってもなく、人糞がたよりであった

りましたね。それでも不足しますので各自が家庭で残った苗も持って行きましたよ。

内田 前日に二人でペアを組み、棒・勺しやくと下桶⑮のいずれかが割り当てられます。植えた後は

近くのため池か川の水を汲み、二人でペアになって苗が活着⑯するまで毎日水かけでした

石野 活着すると、後は雑草ひきや施肥でした。施肥といっても学校の便所の大便秘を桶

に汲み取り、二人ペアになって運び苗に勺で施肥していきました。一日に何往復したで

しょうか、肩がはれて真っ赤になりましたよ。

西岡 下里では学校の便所の外に兵隊の宿舎があり、この便所の汲み取りもしましたね。

西脇 九会でも小学校の校舎に兵隊の宿舎があり、この便所の汲み取りもしましたね。

司会 学校の運動場も校門から校舎に入る通路だけを残して開墾しましたね。いつ頃からで

したか。

広田 昭和十九年九月頃から始めたのではないのでしょうか。国からの食糧増産の命令によっ

たのでしょうか。

司会 収穫した芋いもや大豆・南京なんきんはどうしましたか。

河原 学校まで⑰ふごに入れて持ち帰り、廊下の雨のかからない所に並べて乾燥しました。

土も落としました。また、ひまは種⑱を採り、麻は皮をむいて乾燥させましたよ。

西岡 乾きますと、俵に入れて教室に積み上げます。

⑮ 小便、大便などを汲む桶

⑯ 根が地中にはること

⑰ わらで編み、土を入れて運ぶ
入れ物

⑱ とうごまの別名

和田

これを荷車に積み五人一組で北条駅まで供出しましたよ。

繁田

さつま芋だけでなく炭・薪まきなども一日がかりで北条駅まで出しましたね。

丸山

当時の道路はガタガタの轍とエクボの道で、その上、鉄車であったので鴨谷・古坂の坂が大変でした。その間、鉄車輪が外れたり荷崩れを起こしましたね。

今のトンネルが軍需用燃料⑱(ドラムカンの貯蔵)の貯蔵庫として使われていたので、トンネルの上の山道を通っての供出で坂がきつく、なかなか頂上まで進みませんでした。

通学用の服装はどんな衣類でしたか。

石田

女子も作業は殆ど男子と同じで、服装はモンペに防空頭巾を肩からかけて行動しました。胸には学校名、学年、氏名、血液型を記入した白布を縫い付けていましたよ。履く

ものは草履ぞうりで、いつも一足を履き一足は腰にさげての登校でした。

河原

男子はズボンに学生服でしたね。衣類は、いたるところに継ぎをあてた物でした。先生は国防色の服とズボンにゲートル⑲を巻き、地下たび姿でしたね。夏は麦わら帽子、

冬は戦闘帽⑳でしたよ。

司会

雨の日はどうしましたか。

西脇

都会からの疎開児童が多く、机、椅子は低学年にまわされていました。上級生は机などないガラシとした教室か講堂で草履づくり、縄ないや俵編みをしましたね。

⑱ メチル・アルコールなどが入ったドラムカン

⑲ 草色がかかった茶褐色。もと、陸軍の軍服の色
⑳ 西洋風の脚絆

㉑ 陸軍の兵士用帽子

河原

雨の日は家庭から藁を持っての登校です。

司会

そうすると、この二年間はまず学習することはなかった訳ですね。

一同

その通りです。

司会

そのほか、学校生活で作業した内容は――。

広田

薪づくりのため、山へ入り木を切り出す作業です。

西岡

これを一本ずつ担いで学校まで持ち帰ります。

石野

学校では鋸のこぎりで薪にするものと、炭焼きにするものに分けて切りました。

繁田

冬場は、奥山寺雀谷から切り出した木を校庭北隅の炭窯四基でよく炭焼きをしましたね。班毎に前日に木を積み上げ、上からむしろに水を浸してかけ、上から土を覆って準備します。

和田

翌日、夜の明けるのを待ちかねて、どの班も競うように山へ行き点火します。その日のうちに焼き上げてしまうためです。日の沈む頃、焼き上げると広場に広げバケツで水をかけ、完全に消え終わるのを見届けてから下校しました。

石野

三日目には、この炭を雨降りに編んで作っている俵に一俵ずつ詰め、教室に積み上げていきます。

西岡

下里では、法華山で炭焼きをしました。腰弁当で現地集合が多かったですね。

司 会
そうすると教室や廊下は供出するまでの物置だったわけですね。

一 同
そうですね。

河 原
講堂は、師範学校生の宿舎でした。ここから軍需工場に働きに出ていたようです。

西 脇
鵜野飛行場勤務の軍属^{②③}二百人の宿舎として、校舎の一棟の二階が使われていました。

西 岡
下里でも軍隊の宿舎に一部校舎が割り当てられていたようです。

司 会
このほか、どんなことがありましたか。

広 田
鵜野飛行場の飛行機避難用格納庫の釘打ちに出かけました。弁当を持って出かけ、目

的地に着くとその弁当を食べ、空の弁当箱に釘を入れてかまぼこ型の格納庫の屋根の釘

打ちを一日中やりましたよ。手に豆ができ十日ぐらい痛かったことを記憶しています。

西 脇
鵜野飛行場づくりのために行き、モッコに土を入れて二人で土運びをしましたね。

石 野
滑走路のふちの石並べを工事監督者の指示でやりました。

繁 田
飛行機や戦車等の燃料にすることで松の根掘りをし、荷車に松根油製造工場に

運びました。

石 田
北条小学校裏の女学校^{②④}の運動場に兵舎を建て兵隊の宿舎としていました。また、都会

の児童が集団でお寺に学童疎開していました。この小学生はお寺で学習していたのか、

小学校には通学してきていませんでした。

②③ 西宮海軍航空隊

②④ 北条女学校・現在の北条小学校
校玄関前

河原

富田では、西谷の寺や学校横の本法寺へ集団疎開していましたが、週に何回か学校にも通学していましたよ。

一一 課誦賄慰宝大羽白・家庭宝大羽白・農辰敏系休休業未

苗代作り、田植え、稲刈り、麦蒔き、麦刈りなど農繁期は大変でしたね。

田植え前になると、害虫の卵取りのため苗代に入り紙袋に卵を入れて学校へ持っていく。百個以上という基準があつて、学校から帰ってくると競争して取りました。

内田

六月初旬、農繁期には四年生以上は家庭実習ということで一週間の休みがあり、麦刈り、麦こき、田鋤きなどを手伝いました。

和田

六月下旬には農繁休業として一週間苗取り、田植えの手伝いです。
田を耕すのに牛にからすきを付けて麦後の田を耕すのですが、体が小さくからすきが

重いので畝端で牛を廻し、からすきを持ち上げるのが大変でした。

石田

戦地に出征されている家庭へは、勤労奉仕のためお手伝いに行きました。また、女子は千人針をしましたよ。

和田

学校からの割当てがあり、夏休みには草を刈って干し草にして学校へ持って行き、梱包して供出しましたよ。

内田

竹の皮、藤の皮も採集して学校に持って行きましたね。落ち葉も山に入って集め堆肥

②⑤ 病害虫の予防をしたり、防ぐ薬は全く無く人の手によって取る以外には方法が無かった

②⑥ 牛馬に引かせて田畑を耕す農具

②⑦ 出征兵士の無事を祈るために千人の婦人が赤糸で一針ずつ縫って千個の縫い玉をつくった布軍馬の肥料とする

にしましたよ。曼珠沙華まんじゅしゃげの球根も採集割当てがあり、掘り起こして袋に入れ学校に供出しました。

②⑨ 北条の女学校や寺に学童疎開している小学生に、その季節の食物を持って慰問しました。たとえば、柿、栗、甘薯、などです。

稲の刈り取り、麦蒔きも大変でしたね。

稲刈りは、手が小さいので大人と同じように五株が握れないので四株ずつ刈りました。父が戦地に行っていたので祖父が中心となつての農作業です。刈り取ったものは、稲木⑩に掛け一週間位干すと稲こきです。

稲こきも今と違って足踏み式で一反(十アール)分を稲こきをして家に持ち帰り、夜になつて藁をつばき⑪にするのです。

夜が深々とふけ、寒さが身にしみる午後十時過ぎにやっと終わるのです。

その後、株切りをし、田を牛で耕し畝をつくり、畝の上に二条の浅い谷をつくつて、その谷に麦の種を蒔いていきます。

その上に藁を置いて土をかぶせていったね。

農繁期の終わるのが十一月二十三日の祭日が一つのめどでしたよ。
学校行事は

②⑨ 女学校の生徒は、軍需工場へ働きに行っているため校舎は空教室になっていた

⑩ 刈り取った稲束を乾燥するために架ける脚とその横木

⑪ わらを雨から守るために、田の隅に作っておくもの

石田 私たち昭和十九年度卒業生から修学旅行が中止になりました。

石野 担任の先生から「修学旅行は取りやめです」と話された時、皆は口々に「残念」といい悔しがったものです。

河原 その他、運動会・学芸会などの行事も会場もなく、行事を行うだけの時間的なゆとりもなかったようです。ただ、定期的に裏山の防空壕への避難訓練だけは行いましたよ。

二二、通学子会述上

司会 当時は通学から学校での遊びに至るまで町単位の行動でしたね。

一同 そのとおりです。漢字や計算テストに至るまで町単位で発表していましたね。

西脇 通学途中によく警戒警報があり、すぐ空襲警報に切りかわりました。B29が悠々と編隊を組んで上空を飛んで行くのに日本の軍隊は何の抵抗も示さないもどかしさを感じましたよ。

繁田 通学途中に空襲警報が発令され、すぐ艦載機が上空で低空飛行して私たちを機関銃で撃つのです。身のまわりに弾が地面に突き刺さっていきます。木陰に身を隠してじっとしていましたよ。

石野 空襲警報が発令されると、その日の学校は休みになりましたね。ただ、開墾地で敵機が来た時は山中で解除を待ちましたね。

西岡

校庭の鉄棒の杭には、⁽¹⁾ルーズベルトと⁽²⁾トルーマンの葉人形が作られ、機会あることに竹槍でこの人形を突くのです。

四、家庭生活

西脇

昭和十九年の終わりから二十年にかけては、鶴野飛行場周辺は爆弾の穴ばかりでした。そして、九会小学校の校舎に二つ爆弾が落とされました。幸い、児童は空襲警報発令中のため誰もおらず先生は防空壕に避難して難を逃れたようです。

広田

そうそう、どこの学校も避難用の防空壕を掘りましたね。

内田

家庭でも防空壕を掘り、夜、空襲警報が鳴ると避難しました。

河原

夜になると電灯を黒い布で覆い、光が外へ漏れないようにしましたね。避難の時は、いつでも持って逃げられるように大切な物をカバンに入れて枕元に置いて寝ましたよ。

広田

夏は殆ど暗夜の中で蚊帳の中にもぐり込んで休んだものです。

丸山

地域での遊びとしては、杭さし、⁽³⁾ぶちごま、⁽⁴⁾石やり、⁽⁵⁾ゴシ玉鉄砲、紙鉄砲、カエシなどをしていましたよ。「杭さし」といっても山で直径3〜4 cm位の樫かどんぐりの木を切ってきて、先を尖らして四十 cm位にして相手の杭を倒しあうのです。これも弟や妹の子守をしたり、家で飼っている牛を連れ木にくくりつけての遊びでしたね。

丸山

ただ学校から帰ると農業の手伝いがあるので、それを済まさない遊びは許してもら

(1) アメリカ合衆国の大統領

(2) イギリスの首相

(3) 長さ7 cm、径5 cm位に削ってコマにし、木の先に布を縄にした紐をつけて、これを叩きながら廻す

(4) Y字型の木の左右にゴムを付け、それに石をはさんで飛ばす

(5) 直径5〜10 cmの厚紙に絵を描いたものをお互いに裏返しにして勝負する遊び

えなかったね。

その他、野山で兵隊ごっここといって、敵、味方に別れて陣地を取り合いっこしたり、相手を取り合いっこしたよ。この時のおやつはハツタイ粉を新聞に包んだり、そら豆を煎ったものをポケットに入れて食べながらでしたね。

女子はどんな遊びをしていましたか

縄跳びやお手玉、ビー玉などで遊びました。

夏は池で水泳をしたよ。泳ぎなど教えてもらったこともないので、犬かきで池の端から向こう岸まで泳ぎ着くように泳いだものです。

これは女子も一緒に泳いでいたように思いますね。

食事はどうでしたか

「日の丸弁当」といって、米と麦が同じ位に入った弁当箱に梅干し一個を真ん中に入れたものが多かったね。

アルミ缶の弁当箱でしたが、これがデコボコで、しかも、梅干しの酸で穴の空いた所をハランで覆って使っていましたね。しかし、これも無くなり柳ごうりの弁当箱になりましたよ。

家庭では、主食を含めて配給制でしたので家族数によってチケットで米・麦などを十

(6) 麦、小麦の粒を煎り、ひいて粉にしたもの

日に一回ずつ貰いに行っていましたね。

いくら農業をしても、栽培したものは総て供出しましたから、配給を受けていましたよ。

家庭での食事は、さつまいものつるや野草などを米・麦に混ぜて食べましたよ。

夏には、いなご⁽⁷⁾を稲田に入って取ってきて串に刺して焼いて食べましたね。

五、敗戦を境として

敗戦の玉音放送は

当時、各町にはラジオが一台か二台しか無かったので天皇陛下からのお言葉があるとの知らせがあり、私の家の庭に皆が集まって聞き入りましたよ。

「アメリカ兵に殺されてしまう」とか、いろんな噂が流れていましたね。天皇陛下のお言葉の内容はよく理解出来ませんでした。日本は戦争に敗れ戦争は終わったのだということでした。

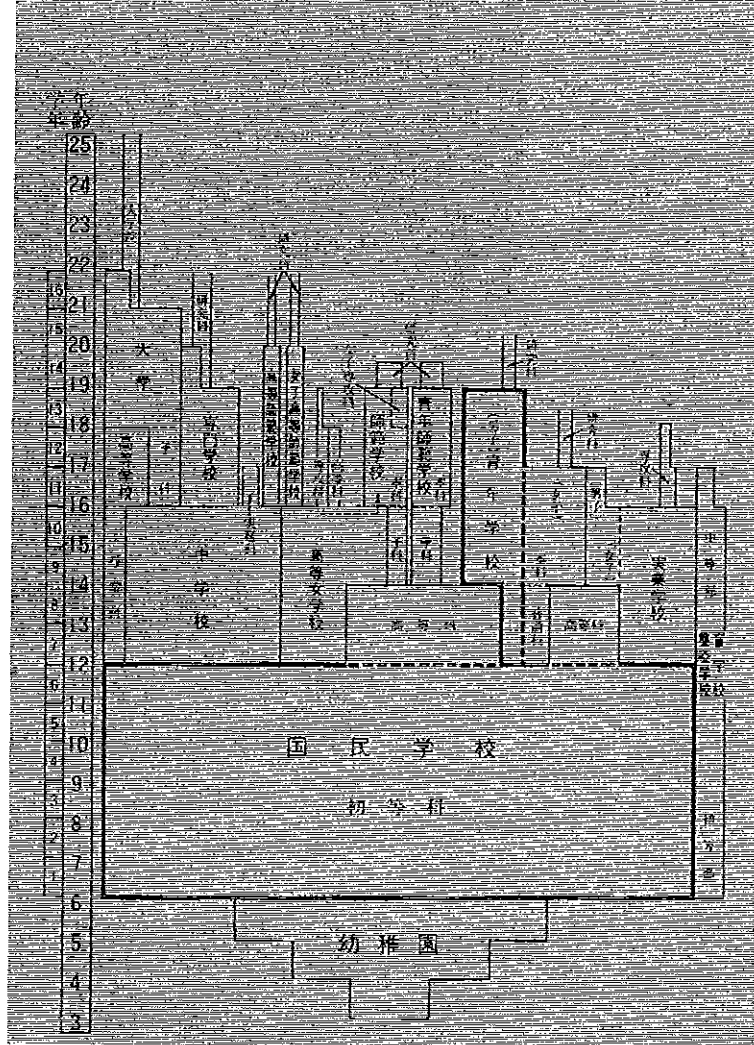
その後は田舎での娯楽が盛んになり青年団員による芝居（劇）とか、体育大会などを行っていました。しかし、食糧難で日々食べるのが精一杯でした。だから学校でも勉強はありましたが教科書もなく、これといった学習をした記憶は無かったように思います。どうもありがとうございました。

(7) バッタ科の昆虫。体長約三センチで黄緑色又は茶色、稲の茎の汁を吸って成長する害虫

西在田小学校行事概要

昭和十九年度	昭和二十年度	昭和二十一年度	
<p>四月 六日 入学式・始業式 二十七日 遠足 三谷山へわらび狩り 二十九日 天長節 拝賀式 五月 十二日 轟氏 英霊村葬 二十五日 二十七日 家庭訪問 六月 六日 一週間 家庭実習(四年以上表刈りのため) 二十七日 七月三日 農繁休業 七月 十一日 増田 氏 英霊を迎える 九月 四日 供出(乾草・竹の皮) 梱包 五日 藤の皮採集 六日 藪屑(い草のくず) 梱包 十月 十一日 加西郡生産増強研究会 十五日 北条女学校に集団疎開している児童を慰問(栗・柿・甘藷)を持参 二十七日 飛行機献金(八十一円六十五銭) 十一月二十日 加西郡教練研究会(本校) 十月 二日 集団疎開児童慰問(そ菜・大根等) 八日 退避壕づくり 十八日 供出(薪・団栗・薄穂) 北条駅へ搬送 二十二日 歳末同情金(三十五円五十銭據出) 二十三日 落ち葉集めの堆肥づくり 二十四日 増田・森・大西の三氏の合同葬 二十九日 二学期終業式 一月 十日 新年拝賀式 四日 三学期始業式 五、六日 新搬出 北条駅へ五・六年生(三谷・大谷より) 二十一日 高等科男子 慰労会(会食) 二月 七日 高等科男子 土地改良作業に出動 十一日 紀元節拝賀式 十二日 集団疎開児童慰問 北条女学校 十七日 第二回分庫麻供出 三月 二日 中等学校進学者審議会 五日 高等科男女全児童 会食慰労 六日 軍隊約二百名来校 昼食 十三日 修了式 十九日 午前七時三十分空襲警報発令(児童登校中止) 二十六日 修業式</p>	<p>四月 六日 入学式・始業式 七日 空襲警報 児童帰校 八日 児童落ち葉集め 十一日 校庭開墾完了 十三日 高等科男子 矢谷新造り 十八日 熊谷開墾開始 十九日 練成部協議会 二十一日 高等科男子 明石部隊奉仕 二十四日 わらび狩り(三年生以上は三谷・一、二年生は猪野) わらび四貫五百匁・三ツ葉三百匁を 集団疎開児童(北条高女)へ供出 炭竈完成 二十六日 炭竈完成 二十七日 集団疎開児童へ粗染搬出 高等科男子二百束 五月 三日 午後 運採集 四日 明石部隊奉仕(高等科二年男子) 五日 増田農園開墾着手 午後 マンジュシャゲ採取 七、九日 家庭訪問 十日 運 第一回出荷。兎増殖協議会 十一日 低学年退避訓練 マンジュシャゲ出荷 運 採集作業実施 十四日 防空訓練実施 二十三日 少年団 道路傍らに大豆時作業 六月 三日 農繁課外日(十日間) 十一日 生徒隊編成 全校生修練 二十三日 農繁課外日(一週間) 二十五日 授業時間短縮 い草出荷 七月 十六日 牝牛購入 十七日 海軍志願兵予備検査 二十五日 猪野新開墾着手 二十七日 終戦の詔書下賜 八月 十五日 承諾必謹の訓話 全児童登校 十八日 校庭に兎舎建設着手 九月 二十五日 食糧増産研究会 十月 十二日 農繁課外日(一週間) 二十二日 新教育方針 懇談会 十一月 十九日 教科書修正講習会 十月 十日 三学期始業式 十一月 十四日 英語講習会開始 十八日</p>	<p>四月 六日 入学式・始業式 十日 衆議院議員選挙(学校休業) 二十三日 新教育講習会 二十四日 春季遠足 二十六日 母親学園 五月 一日 校外指導開始 十四日 家庭訪問(三日間) 十七日 校外学習実施 二十七日 母親学園 役員協議会 二十九日 第二回母親学校実施 三十一日 加西郡教員組合結成式 六月 三日 農繁課外日(一週間) 七日 新教育講習会 七月 十七日 一学期終業式 二十日 郡教員講習会(全職員出席) 八月 十日 二学期始業式 九月 二日 夏季作品展覧会 九日 母親学園 十日 郡学童作品展 高等科二年参観 十七日 短縮授業復帰 二十三日 童話会(一、二校時) 十月 三日 校外学習開始 十五日 秋季小運動会 二十六日 机・腰掛入荷 二十八日 新憲法公布記念式 十一月 三日 午前中 祝賀 体育大会 進駐軍提供映画会(北条校)に五年生以上参観 十一月 十日 教員組合大会 十二日 教科 新経営研究会(在田校へ) 十三日 三学期始業式 二十四日 学校自治組織打合せ 一月 六日 映画会 十一月 十一日 新教育研究会(本校) 二月 二十三日 第二回映画会 三月 一日 憲法講習会 十四日 工事竣工学会 二十日 二十一日</p>	<p>1 3 5</p>

戦前(44年)の学校系統図◎文部省『学制百年史』より

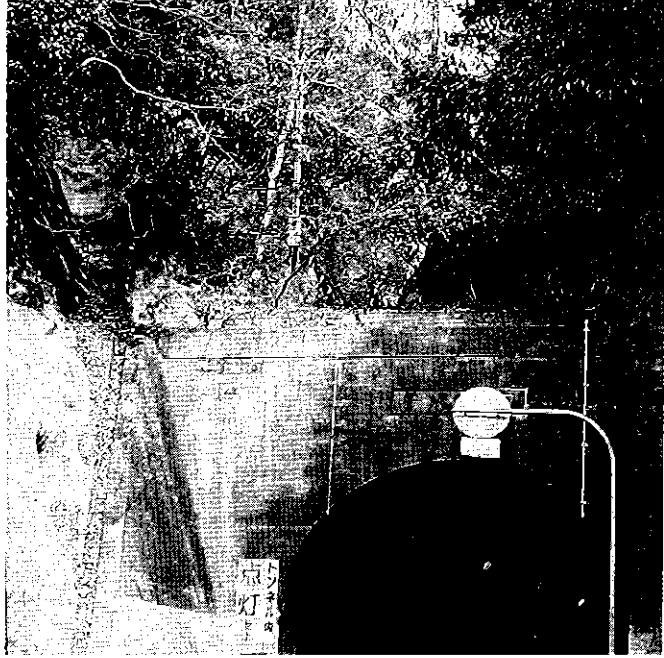


*国民学校

旧制の初等普通教育機関。国家主義教育を目的として、昭和十六年（一九四一）尋常高等小学校を改編発足。年限は初等科六年、高等科二年。同二年（一九四七）廃止される。

（日本語大辞典―講談社―）

（当時は大都市やその周辺を除いて、国民学校初等科から高等科へ行くのが、ごく普通の進学コースで、中学校・実業学校・高等女学校への進学率は、さして高くなかった。）

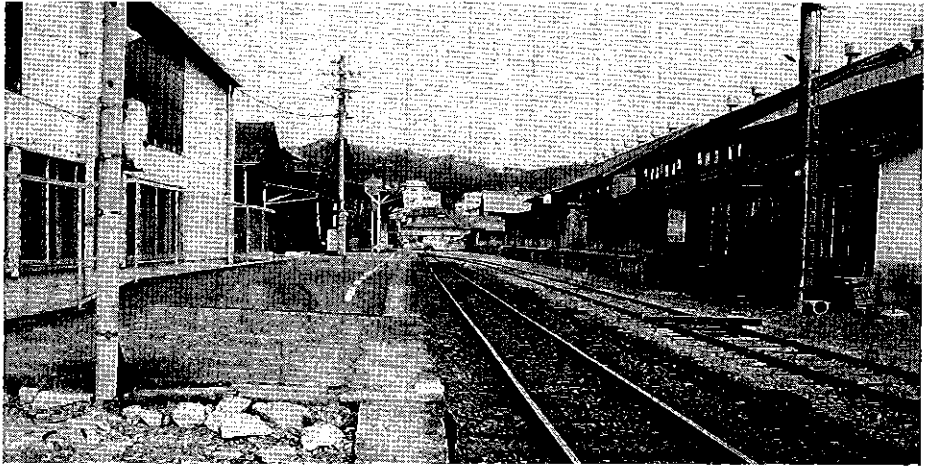


古坂トンネル 古坂側から観る
(トンネルの上に道があった)



鴨谷側からトンネルの上を渡る道

北条町駅



当時供出米、薪、炭などの俵をつめた倉庫

鶉野飛行場跡(滑走路)



座談会出席者

丸山 一夫	西岡 弘之	河原 義信	石田 敦子	西脇 章夫	内田 徹	石野 利一	繁田 己史	和田 重雄	広田 勝	氏名
〃	〃	昭和二十年度初等科	昭和十九年度初等科	〃	〃	昭和二十一年度高等科	〃	〃	昭和二十年度高等科	卒業年次
泉 (在田)	下里	富田	北条	九会	賀茂	富合	宇仁	西在田	日吉	出身小学校区



付録
(資料)

昭和二十年度 北条町会議事録綴

北条町議会

・議案第二十号

兵庫県加西郡北条町歳入出 追加更正予算(第四回)

・議案第二十一号

特別積立金戻入方法変更の件

・議案第二十二号

条例廃止の件

・議案第二十三号

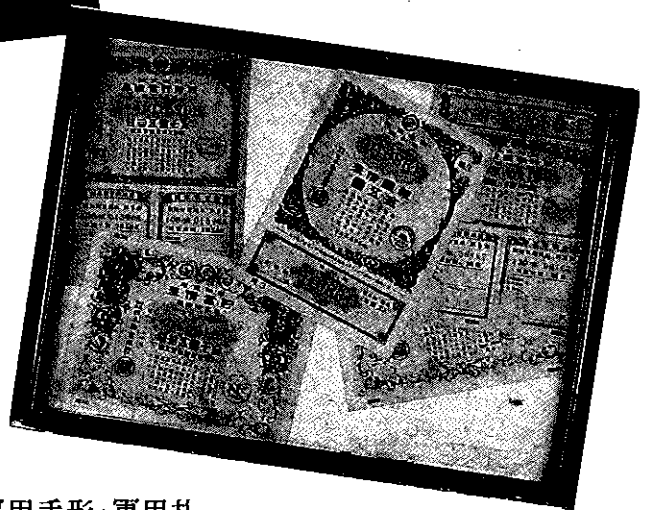
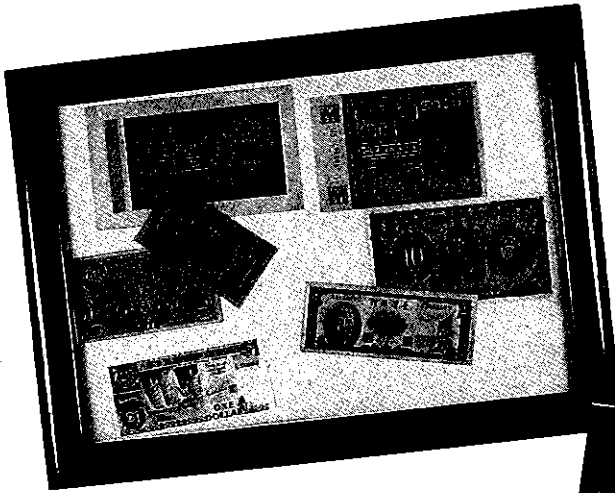
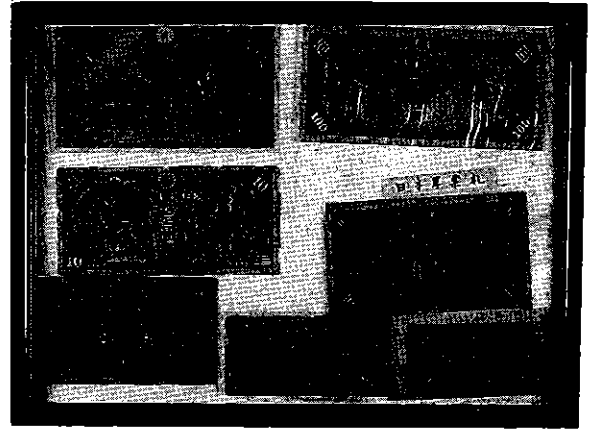
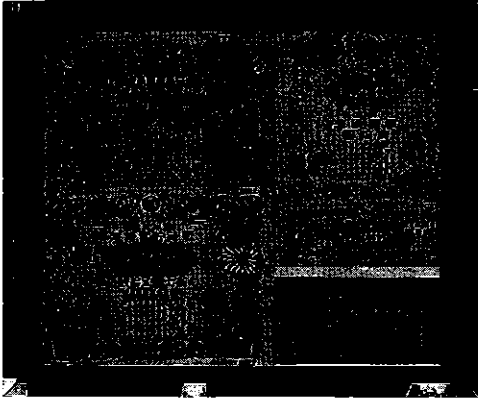
診療所設備準備資金積立金繰入の件

・議案第二十四号

収入役代理吏員更迭の件

米軍の日本本土空襲が激しさを増す昭和十九年、兵庫県は県民に対し空襲時の対応をする指針を全戸配布した。本ちらしは、右記北条町会議事録の裏面にあったものである。

即ち、物資不足の折、特に用紙不足であったので、本ちらしの裏面の白紙に議事を記している。



軍票(軍用手票の略)

戦地・占領地で軍隊が使用する手形 軍用手形・軍用札

朝日新聞社号外配布用呼び鈴

北条町古坂 野田四郎氏提供



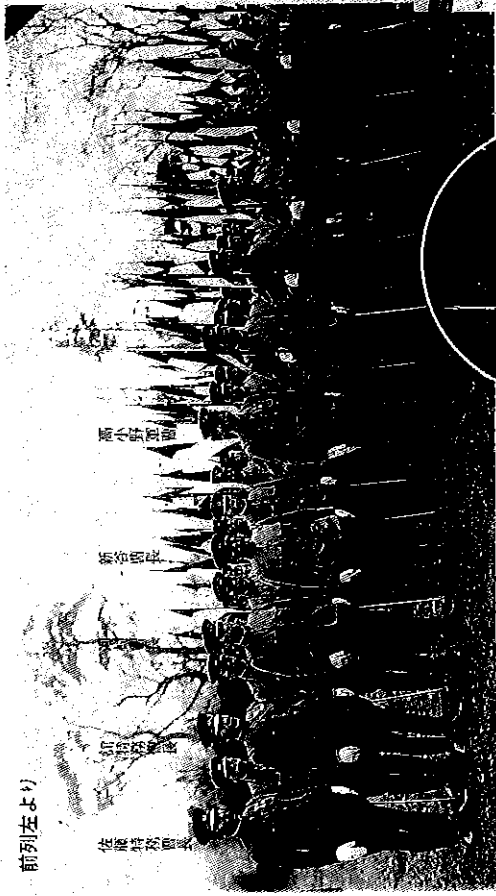
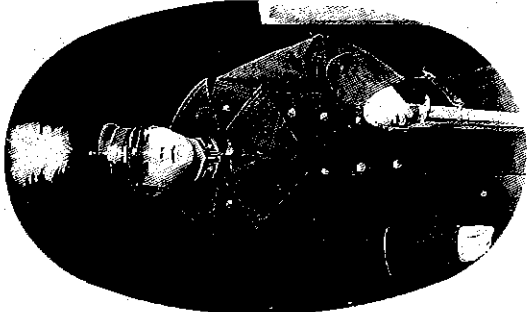
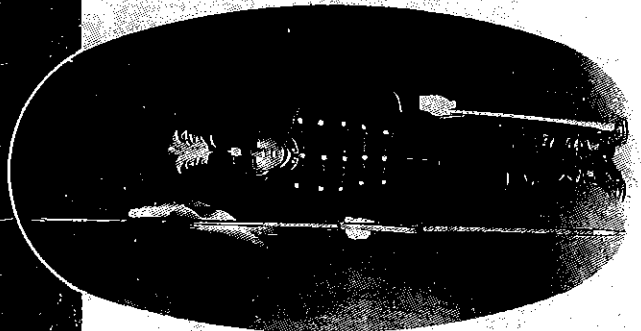
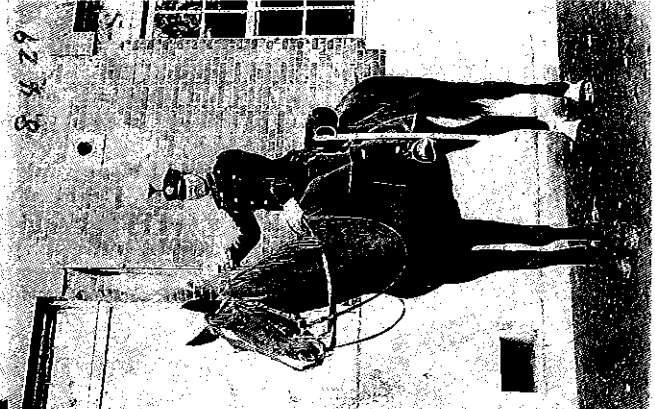
軍隊用外套(防寒・防雨のため、軍服の上に着る)

北条町古坂 野田四郎氏提供

槍 旗

近衛騎兵供養正装

供養や儀仗の権威は
鞍や飾に持たせられない
鎧下を守る武器をもち



前列左より

佐藤 特務隊長

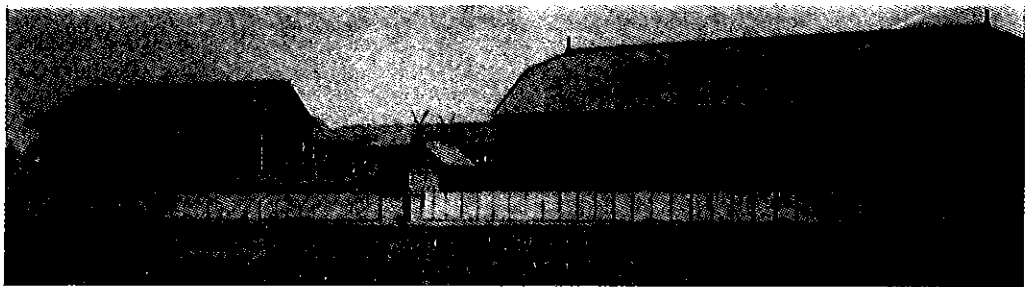
第八師團司令部

近衛騎兵

大西康憲氏提供



北条中学校竣工当時



新制北条中学校

あとがき

第二集は、平成5年度に原稿募集をし、六年度に発刊する計画でスタートいたしました。

ところが、投稿者が少なく、また第一集で欠けていた義務教育や高校教育の当時の様子についての投稿がありませんでした。

そこで原稿締切り後に、特に何人かの方にお願ひして国民学校の姿を座談会形式で掲載いたしました。

そのため発刊が年度末になり、五年度に投稿いただいた方には申し訳なく、深くお詫び申し上げます。

また、印刷原稿の仕上げについて、生涯学習課の大豊、金田両氏には何度も校正しながらタイプ打ち、本当にありがとうございました。
いました。

最後になりましたが、「決定版 昭和史」（毎日新聞社刊）から写真を転載させていただきました。厚くお礼申し上げます。

（編集担当 繁田己史）

第二次世界大戦体験記

轍(わだち)第二集

— 永遠の平和を求めて —

平成七年三月二十四日

編集 加西市教育委員会生涯学習課

発行 加西市教育委員会

加西市北条町横尾五一四

電話 (〇七九〇) 四二一一一〇

FAX (〇七九〇) 四三一八〇三

印刷

(有)邦栄堂印刷
加西市西笠原町七六六

